愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 202 集

八 巻 古 窯 群

２０１６

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 202 集

はちまきこようぐん

八巻古窯群

２０１６

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県知多郡東浦町は、知多半島の三河湾側の基部に位置しております。今日では名古屋市の近郊部として発展を続けていますが、歴史的にも文化財が多数知られており、古くから繁栄した場所でもあります。

この度、愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県建設部都市整備課による「街路改良工事３・３・２号名古屋半田線」に先立つ八巻古窯群の発掘調査を、愛知県の委託事業として実施致しました。その結果、先人の生活・文化に関するいくつかの貴重な知見を得ることができました。このたび、調査によって検出されました遺構、出土遺物をまとめ、報告書として刊行するにいたりました。本書が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関するご理解を深める一助となれば幸いに存じます。

発掘調査の実施に当たりましては、地元住民の方々を始め関係諸機関及び関係者の皆様方から多大なご指導とご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

平成 28 年３月

公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長　伊 藤　克 博

例　言

1．本書は愛知県知多郡東浦町に所在する八巻古窯群（遺跡番号は 470011）の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は愛知県建設部都市整備課による「街路改良工事３・３・２号名古屋半田線」に先立つもので、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3．平成 21 年度５月に面積 100㎡の範囲確認調査を宮腰健司（本センター調査研究専門員・現調査課長）・鵜飼雅弘（本センター調査研究員、現愛知県埋蔵文化財調査センター主任主査）の担当で実施した。発掘調査は平成 22 年度の４月～７月に実施し、面積は 770㎡。担当者は池本正明（本センター調査研究専門員、現統括専門員）･鈴木恵介（本センター調査研究主事）･阿部 敬（本センター調査研究主事、現十日町市博物館）である。なお、平成 22 年度に株式会社シン技術コンサルの協力を得た。現場スタッフは、代理人が光松 章、調査補助員が大島英俊、測量技師が成田典信である。
4．調査に際しては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県建設部・愛知県陶磁美術館・東浦町教育委員会・東浦町うのはな館・名古屋市教育委員会・多治見市教育委員会を初めとし、多くの機関から指導・協力を受けた。
5．調査区の座標は､国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。表記は世界測地系を用いている。なお、海抜標高はＴ．Ｐ．（東京湾平均海面標高）による。
6．遺構は以下の分類記号を用い、原則として調査時の表記をそのまま使用している。
SK: 土坑、SD: 溝、SU: 灰層
7．本書の編集には、以下の方々にご教示・ご協力を得た。（五十音順・敬称略）
青木 修・赤羽一郎・天野暢保・伊藤正人・井上喜久男・岩月あすか・内田智久・岡 千明・小川裕紀・黒田祐規子・楠 美代子・柴垣勇夫・中野晴久・樋江井 修作・福岡猛志・藤澤良祐・間瀬宗則・森まどか・山内伸浩・山本智子
8．本書の編集は池本正明が担当した。執筆は第１・３・５章が池本、第２章を鈴木恵介、第４章を株式会社パレオ・ラボ（AMS 年代測定グループ・小林克也）、付載を小澤一弘（元本センター調査研究員）が担当した。
9．整理作業は、池本正明・小澤一弘が阿部裕恵・木下由貴子・堀田祐美（本センター整理補助員）の協力を得て実施した。ただし、遺物実測とトレース作業を橋本技術株式会社・株式会社シン技術コンサルに、挿図作製の一部を株式会社アコードと有限会社アルケーリサーチに、出土遺物の写真撮影は写真工房 遊に、科学分析を株式会社パレオ･ラボに、デジタル編集は有限会社アルケーリサーチに作業委託した。
10．調査に関する実測図・写真などの資料は本センターが、出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターが保管している。なお、遺物は本書に記載された番号を登録番号とした。

目　次

第１章　はじめに

1　経緯と経過……1
2　環境と周辺の遺跡……1

第２章　遺　構……6

第３章　遺　物

1　土器・陶器……13
2　窯道具……30
3　線刻（圧痕）資料……30

第４章　科学分析

1　放射性炭素年代測定……31
2　出土炭化材の樹種同定……33

第５章　考察と総括

1　主要遺構の変遷……36
2　出土遺物の特色……41
3　木葉状線刻・木葉圧痕について……42

付　載　１次調査の概要……47

挿図目次

図 1　周辺の遺跡 1　1:25,000 …… 2
図 2　周辺の遺跡 2　1:25,000 …… 3
図 3　調査区現状（2014.9） …… 4
図 4　調査区位置　1:5,000 …… 5
図 5　調査区全体図　1:200 …… 7
図 6　023SK　1:50 …… 8
図 7　土層断面図 1　1:80 …… 9
図 8　土層断面図 2　1:80 …… 10
図 9　土層断面図 3　1:80 …… 11
図 10　その他の遺構　1:80 …… 12
図 11　器種分類図　1:8 …… 13
図 12　出土遺物 1　1:4 …… 15
図 13　出土遺物 2　1:4 …… 16
図 14　出土遺物 3　1:4 …… 17
図 15　出土遺物 4　1:4 …… 18
図 16　出土遺物 5　1:4 …… 19
図 17　出土遺物 6　1:4 …… 20
図 18　出土遺物 7　1:4 …… 21
図 19　出土遺物 8　1:4 …… 22
図 20　出土遺物 9　1:4 …… 23
図 21　出土遺物 10　1:4 …… 24
図 22　出土遺物 11　1:4 …… 25
図 23　出土遺物 12　1:4 …… 26
図 24　出土遺物 13　1:4 …… 27
図 25　出土遺物 14　1:4 …… 28
図 26　出土遺物 15　1:4 …… 29
図 27　暦年較正結果 …… 32
図 28　出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 … 35
図 29　今回の調査区と 1 次調査の調査区 …… 37
図 30　調査区と窯体推定位置 …… 38
図 31　緒川村絵図 …… 39
図 32　調査区周辺の地籍図 …… 40
図 33　木葉状線刻・木葉圧痕 1　1:4 …… 43
図 34　木葉状線刻・木葉圧痕 2　1:4 …… 44
図 35　周辺地域の木葉状線刻　1:4 …… 46
図 36　1 ～ 3 号窯出土遺物
　実測図 1　1:4 …… 51
図 37　3 号窯・1 ～ 3 号窯灰原出土遺物
　実測図 2　1:4 …… 52
図 38　1 ～ 3 号窯灰原出土遺物
　実測図 3　1:4 …… 53
図 39　1 ～ 3 号窯灰原・1 号窯出土遺物
　実測図 4　1:4 …… 54
図 40　1 ～ 3 号窯・1 号窯灰原出土遺物
　実測図 5　1:4 …… 55
図 41　1 ～ 3 号窯灰原出土遺物
　実測図 6　1:4 …… 56
図 42　1 ～ 3 号窯灰原出土遺物
　実測図 7　1:4 …… 57
図 43　1 ～ 3 号窯灰原出土遺物
　実測図 8　1:4 …… 58
図 44　1 ～ 3 号窯灰原出土遺物
　実測図 9　1:4 …… 59
図 45　1 ～ 3 号窯灰原出土遺物
　実測図 10　1:4 …… 60
図 46　1 次調査出土遺物実測図 11　1:4 …… 61
図 47　窯体測量図　1:100 …… 62
図 48　1 次調査グリット図　1:200 …… 63

表目次

表 1　調査進行表 …… 1
表 2　測定試料および処理 …… 32
表 3　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 …… 32
表 4　樹種試料 …… 34
表 5　周辺地域の木葉状線刻 …… 45
表 6　1 次調査　1 ～ 3 号窯、灰原 出土遺物破片数表 …… 64
表 7　1 次調査　1 号窯 出土遺物破片数表 …… 64
表 8　1 次調査　2 号窯出土遺物破片数表 … 64
表 9　1 次調査　3 号窯出土遺物破片数表 … 65
表 10　1 次調査　灰原出土遺物破片数表 …… 65
表 11　1 次調査　出土遺物破片数表 …… 65
表 12　2 次調査　出土遺物破片数表 …… 66
表 13　出土遺物総破片数表 …… 66
表 14　2 次調査　山茶碗･小碗･小皿個体数 … 66
表 15　1 次調査・2 次調査 合計山茶碗・小碗・小皿個体数 …… 66

図版目次

図版 1　調査区遠景など
図版 2　調査区全景・遺構
図版 3　出土遺物 1
図版 4　出土遺物 2
図版 5　出土遺物 3
図版 6　出土遺物 4
図版 7　出土遺物 5
図版 8　出土遺物 6

巻　頭

遺跡位置図　1:200,000

添付ＣＤ−ＲＯＭ

添付データ 1　遺物計測一覧
添付データ 2　遺構計測一覧
添付データ 3　1 次調査報告書
（愛知県教育委員会　1962「八巻古窯址群」『愛知県知多古窯址群』転載）
添付データ 4　土器胎土分析

国土地理院 20 万分の 1 地勢図
「豊橋」「名古屋」

第１章　はじめに

１　経緯と経過

愛知県建設部都市整備課では、名古屋市郊外の交通量調整を目的に県道名古屋半田線の整備を計画した。ところがこの計画区域内には、周知の遺跡である八巻古窯群が所在していた。このため、愛知県建設部と、愛知県教育委員会とがその取り扱いを巡って協議した。その結果、遺跡を発掘調査して記録として保存することが決定した。

発掘調査は愛知県教育委員会を通して委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査区は平成 21（2010）年５月に実施された範囲確認調査の成果を基にして面積 770㎡とされた。調査期間は平成 22（2011）年４月～７月で、工程は表１に示す。調査途中の６月 29 日には調査区が学区となる卯の里小学校６年生児童 90 名の校外活動にも対応した。なお、諸事情により地元説明会の開催は断念したが、調査終了後の７月 24 日に東浦町うのはな館にて成果報告会を開催している。

発掘調査は株式会社シン技術コンサルの支援を得た。調査手順は除草後に地表面から表土のみをバック・ホゥにより除去したのち、平面直角座標第Ⅶ系（世界測地系）に準拠した５ｍグリッドを設定し、手掘りで遺構を検出・掘削する方法をとった。

２　環境と周辺の遺跡

今回発掘調査を実施した地点は、東経 136°55′3″、北緯 34°58′18″。現在の行政区画では知多郡東浦町の北西部で、東海市・大府市・知多郡阿久比町との境界部分に隣接している。

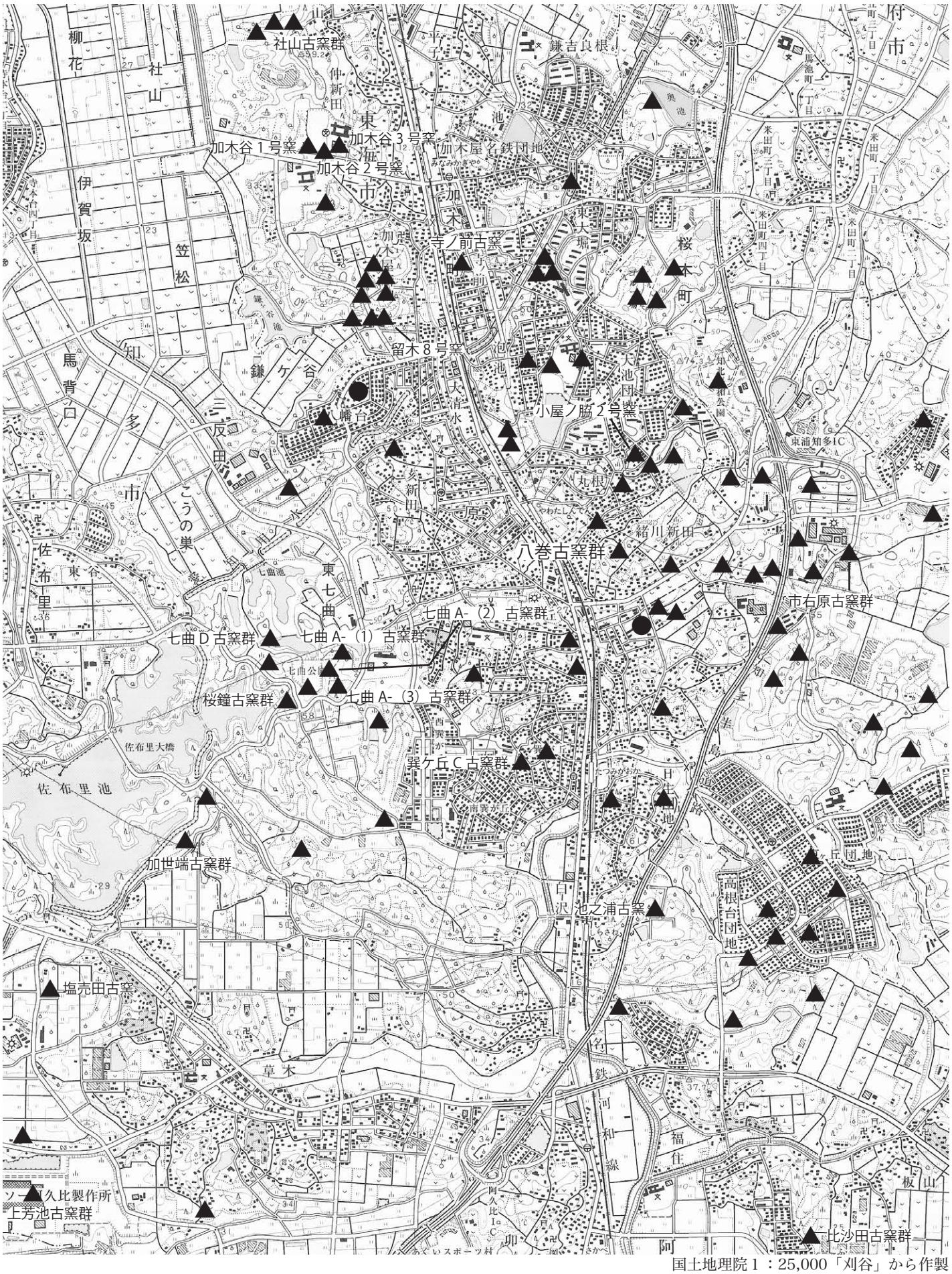
遺跡の位置を道路網で説明すると、知多半島自動車道の東浦・知多 IC の西側、県道 24 号線と名古屋鉄道河和線が交差する部分より北東 0.3㎞地点に該当する。公共交通機関では名古屋鉄道河和線の巽が丘駅が最寄りで、遺跡から南西に 1.0㎞地点にある。

周辺のランドマークは、南南東 0.6㎞に東浦町立卯の里小学校、西 0.8㎞に知多市立新田小学校、南東 1.5㎞には東浦町立西部中学校がある。西に 3.0㎞に位置する佐布里池は、愛知用水の工業用水調整池として昭和 40（1965）年に完成した。知多半島の他、名古屋市南部までの広大な範囲に給水しており、この地域の生産活動の礎となっている。

周辺の地形を概観すると、東浦町は知多半島の基部に位置し、東側が知多半島中央の丘陵部、西側は境川・逢妻川から三河湾に面している。このうちの丘陵部は名古屋市東部の名東区～緑区一帯から連続するもので、伊勢湾側と三河湾側の分水嶺となる。

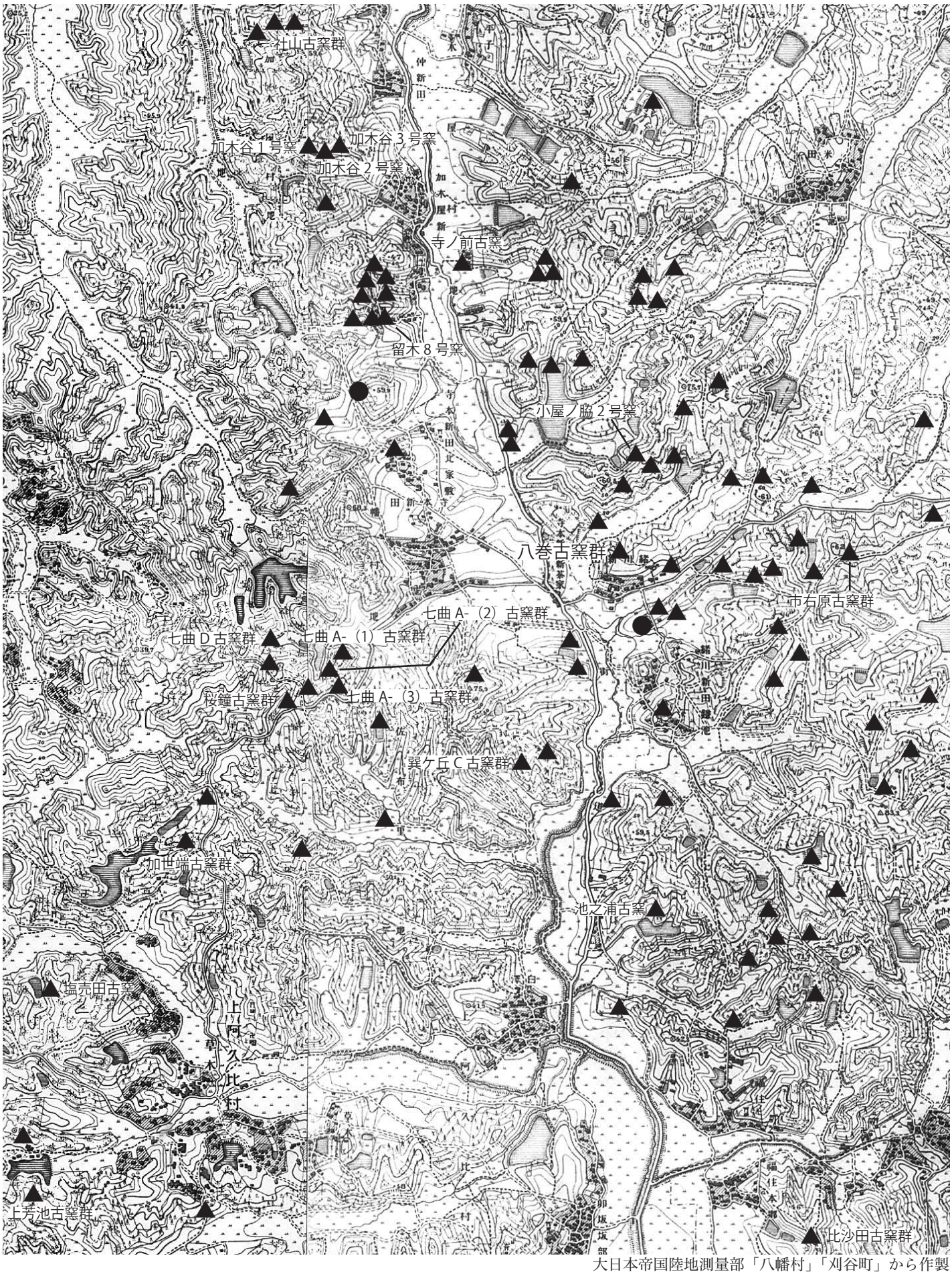
表１　調査進行表

４月下旬～５月上旬	表土ハギ
５月中旬～６月中旬	遺構検出・掘削
６月 28 日	空撮
６月 30 日	卯の里小学校体験学習対応（90 名）
７月上旬	補足調査・埋め戻し・資材撤去
７月 24 日	成果報告会（東浦町うのはな館 53 名）



国土地理院１：25,000「刈谷」から作製

図１　周辺の遺跡１　１：25,000



大日本帝国陸地測量部「八幡村」「刈谷町」から作製

図２　周辺の遺跡２（明治 23 年）　1：25,000

丘陵部は河川によりさらに細分されているが、今日では大規模に造成され旧地形を見る影も無い。造成以前の状況を示す図２では、丘陵部を南北に貫く水田地帯が明瞭に観察できる。この部分は大田川と阿久比川を結ぶラインで、東側が大府丘陵、西側は知多丘陵と呼ばれている。八巻古窯群は後者に位置し、丘陵地帯を開析する小規模な支谷の南西側緩斜面に位置している。

次に、図１・２の示す範囲を中心に周辺の遺跡を概観する。

この部分は基本的に丘陵部に該当し、窯跡を除けば遺跡の希薄な地域となる。これに対して、窯跡は常滑窯の範囲となり多数が知られている。八巻古窯群の近隣の遺跡分布状況を図２で観察すると、前述した大田川と阿久比川を結ぶラインに集まる傾向も観察できる。

周知の様に、常滑窯は早い時期から学術的に注目されている。実際、図１・２に示す範囲にも学史上著名な窯跡が点在している。

まず、八巻古窯群から北西に 3.0㎞地点には社山古窯群が所在している。昭和 29（1954）年～昭和 30（1955）年に横須賀町編纂委員会により発掘調査が実施され、瓦類と碗・皿類（中野編年　1ｂ～３期）が出土している。このうち瓦類は、京都府鳥羽東殿（1131 ～ 55 年建立）や京都府法金剛院（1330 年建立）、名古屋市熱田区熱田神宮寺（12 世紀第３四半期建立）に供給された事が指摘されている。

南西に 1.5㎞地点には、七曲古窯群が所在している。昭和 60（1985）年～昭和 62（1987）年にかけて公園造成工事に先立つ発掘調査が実施された。調査された窯体は 14 基で、分布状況から A ～ G 古窯群に細分されている。調査終了後、このうちの２基の窯体（A－１号窯、A－３号窯）が知多市指定史跡に指定され、公園内に覆屋で保護された露出展示として整備されている。

南西に 4.2㎞地点に所在する上芳池古窯群は、２地点で９基の窯体が検出されている。このうち２号窯、３号窯、６号窯は分焔柱の背後に数本の支柱を持つ窯体として注目された。類例は南西に 1.5㎞地点の桜鐘古窯群や、上記した七曲古窯群 B－１号窯でも報告されている。

八巻古窯群は今回の調査で二度目となる。１次調査は愛知県教育委員会によるもので、昭和 36（1961）年に実施されている。この調査は愛知用水建設工事に先立ち、昭和 31（1956）年から開始された猿投山西南麓古窯跡群の調査に続くもので、報告書は愛知県教育委員会から年度毎に刊行されている。八巻古窯群は昭和 37（1962）年度の報告書に掲載され、窯体３基が報告されている。この報告書は現在入手困難となっているため、愛知県教育委員会に許可を得て、本書に添付する CD-ROM に .pdf 形式で収納している。また、今回の報告書刊行にあわせて、統計処理を中心とした１次調査資料の再整理を実施し、２次調査の統計処理の成果とあわせて本書の付載にまとめている。

図３　調査区現状（2014.9）

図４　調査区位置　１：5,000

第２章　遺　構

今回の調査で検出された遺構は、中世では灰層や土坑、近世以降では不定形土坑や自然流路を確認している。調査区の地形は、南西方向が斜面上位となり北西方向へ下る斜面となっている。傾斜は調査区中央付近で平坦となる。この調査区中央部には南東から北西方向へ流れ下る自然流路（008NR）があり、これが傾斜が大きく変化する境界に位置している。後述する遺物集積の北東裾部分は 008NR に削られている。そのため 008NR の埋土にも焼台や融着した遺物等が含まれるが、近現代の遺物を同時に包含するため遺物集積より後の時代に流路が形成されたものと考えられる。なお、現況では斜面裾から北東方向には、調査区外にいたるまで流路は無く旧地形は大きく改変されている。008NR を境界にして調査区北東半部は大きく撹乱を受けていた。

・001SU、003 ～ 007SU（図 5）

001SU、003 ～ 007SU は灰層であるが、堆積に明確な違いが確認できたため遺物集積として分類している。いずれも調査区南西側の斜面上位より北東方向に流れ下って集積している。南西方向の斜面上位には八巻古窯群の１号窯～３号窯が存在し、当初はこれらの遺物集積の全てがこれらの窯跡からの排出によると考えられた。しかし包含遺物を細見したところ、006・007SU 出土品が既存の八巻古窯１～３号窯出土品よりも後代の製品と想定されたため、別の窯跡が八巻２号窯跡の北東方向に存在する可能性が想定された。別の窯の存在については第１次調査の時点でも言及されている。

なお、遺物整理作業の段階で得られた成果（楢崎彰一氏の調査日誌）によれば 003SU、005SU、001SU と 007SU の一部は第１次調査区と重複しており、これらの遺物集積は残存部分であったことが判明した。

・堆積状況

堆積状況から、003・001SU が最も下層となる。004・005・007SU がこれに続く。007SU は 004SU の直上に堆積し、さらに 007SU の上に 006SU が堆積するため、最も新しい状況を示す（図７）。遺物の年代観はこれと同調している。

・001SU

001SU は調査区南東側で検出された。範囲は残存状況で長軸 8.6m、短軸 4.4m を測る。窯跡の位置から八巻３号窯との関連が推定される。001SU 縁辺部分には、近世以降と考えられる不定形土坑などが多数存在し堆積状況は複雑である。これにより 001SU は南東側を欠損しており全容は不明である。遺物集積の上層部分も大きく欠損している可能性が高い。ここより南東側の地形は北東に向いていた傾斜が北向きに向きを変えつつあるため、これより南東方向には、さらなる遺物集積は存在せず、八巻古窯群としての遺物集積は収束している可能性が高い。

・003SU

003SU は地山直上に堆積し、調査区南東側の大きな面積を占める。層序は、隣接する 001SU、005SU のいずれにも先行する遺物集積である。長軸 13.2m、短軸 10.4m を測る。今回の調査で検出された遺物集積では最大規模となる。斜面上位に位置した八巻１号窯との関連が推定され、出土遺物の年代からもそれが裏付けられている。

図５　調査区全体図　１：200

・004SU

004SU は調査区北西側に広く分布する規模の大きな遺物集積である。長軸 15.2m、短軸 6.8m を測る。層序は地山直上に位置し、上層に 006SU、007SU が堆積する。斜面上位の八巻 2 号窯からはやや北東側に流れ下ったような堆積状況である。003SU が先に存在したため、これに阻害されて堆積した位置がやや北東方向にずれた可能性もあるが断定できない。

・005SU

005SU は調査区中央付近に位置する。長軸 8.4m、短軸 3.8m を測る。南東際で 003SU を、北西側は 004SU を覆うことから 003・004SU に後続する堆積である。第 1 次調査による八巻 2 号窯の正面に位置していることが判明している。

・006・007SU

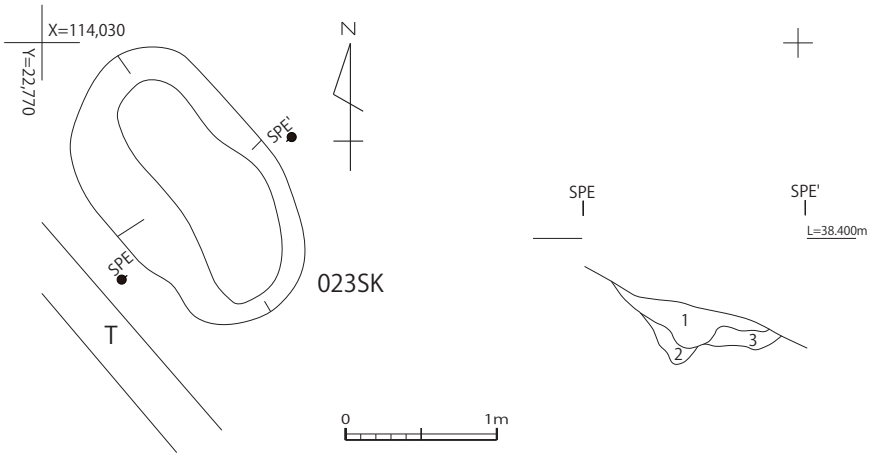
006・007SU は調査区内で確認された遺物集積としては最も北東側に位置する。006SU は長軸 11.4m、短軸 6.4m を、007SU は長軸 13.8m、短軸 7.8m を測る。これら 2 層は 004SU の北東側を覆う状態であり、前述のように 004SU とは連続しない時期の未知の窯からの排出であることも考えられる。

・023SK

023SK は土坑である。003SU 除去後に地山面にて検出された。003SU 上から掘り込まれた可能性もあるが検出できていない。底面はほぼ水平で、斜面を切り出したような形状をしている。

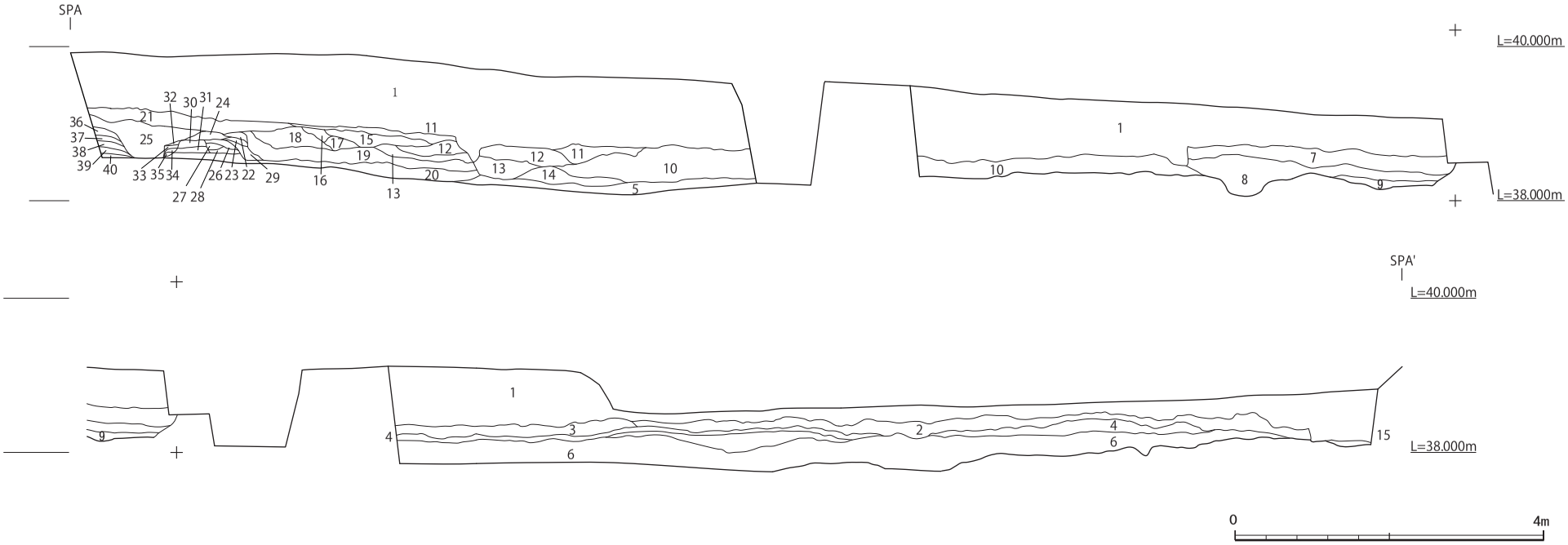
・009SX・010SX・012SX ～ 021SX

009SX・010SX・012SX ～ 021SX は平面形が不定形の土坑群である。調査区南東際付近に集中して分布し、明確な重複は見られないが、008NR に先行すると考えられ、層位からは近世～近代の遺構と考えられる。断面形から底部は平担、埋土は灰色シルト・微粒砂が主であり水成堆積と考えられる。耕作関連遺構の可能性も否定できない。



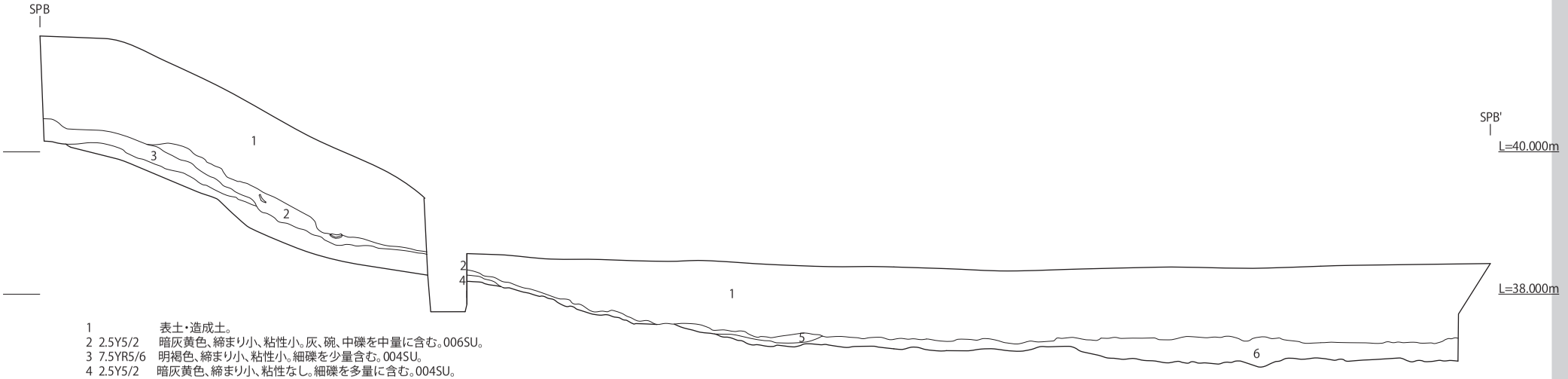
1 10YR6/6　明黄褐色　締まり小、細礫や焼成不良品、焼台、炭化物含む。
2 7.5YR6/6　橙色　締まり小、粘性小。焼台、細礫を含む。
3 2.5Y6/6　明黄褐色　締まり小、粘性小。細礫を含む。粘土。

図 6　023SK　1：50

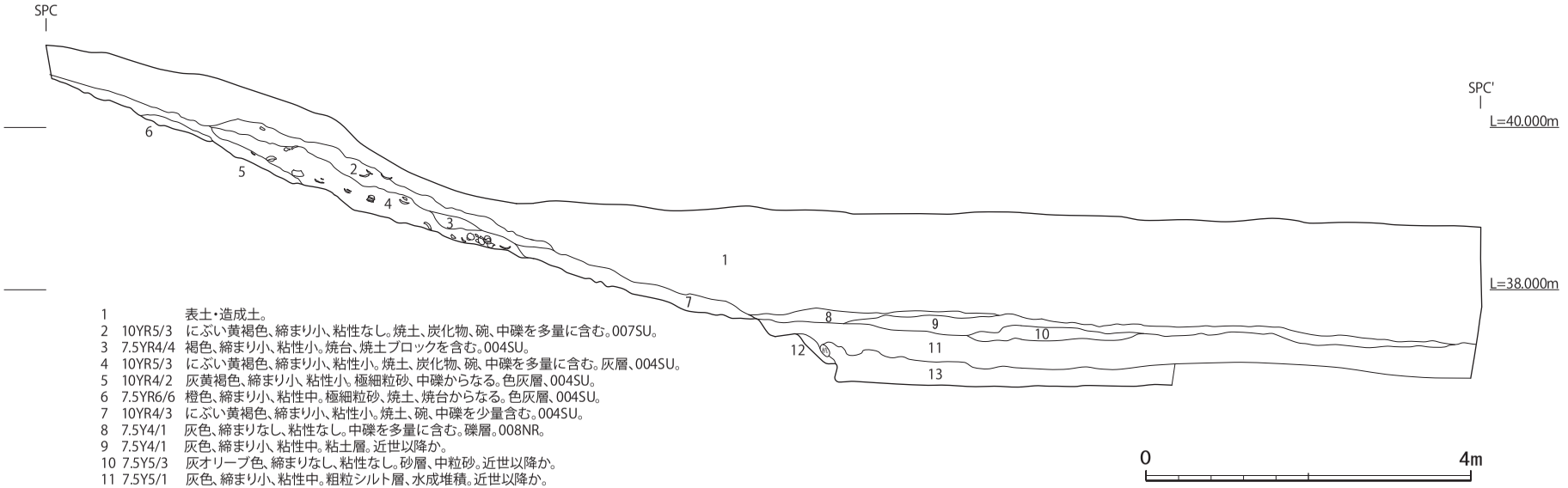


1 表土・造成土。
2 2.5Y5/2 暗灰黄色、締まり小、粘性小。灰、碗、中礫を中量に含む。006SU。
3 10YR4/1 褐灰色、締まり小、粘性小。灰、碗、中礫を多量に含む。007SU。
4 2.5Y5/2 暗灰黄色、締まり小、粘性なし。細礫を多量に含む。007SU。
5 10YR4/1 褐灰色、締まり小、粘性小。003SU。
6 10YR4/1 褐灰色、締まり小、粘性小。焼台、碗、中礫を多量に含む。004SU。
7 7.5YR4/2 灰褐色、締まり小、粘性なし。焼土、灰、焼台、碗、中礫を多量に含む。005SU。
8 7.5YR4/3 褐色、締まり小、粘性なし。焼土、灰、焼台、碗、中礫を多量に含む。005SU。
9 7.5YR4/3 褐色、締まり小、粘性なし。地山土が混じる。中礫を多量に含む。005SU。
10 7.5YR4/1 褐灰色、締まり中、粘性大。粘質土、焼台、碗を多量に含む。003SU。
11 10YR4/1 褐灰色、締まり小、粘性小。焼台、焼土、碗、細礫を含む。近世以降か。
12 7.5YR5/4 にぶい褐色、締まり小、粘性小。焼土、焼台、碗、細礫を含む。近世以降か。
13 10YR4/1 褐灰色、締まりなし、粘性中。24層と同じだが軟らかく粘性が強い。近世以降か。
14 7.5YR5/4 にぶい褐色、締まり小、粘性小。焼台の破片、碗、中礫を多量含む。003SU。
15 5YR5/4 にぶい赤褐色、締まり小、粘性小。焼土、碗、細礫を多量に含む。近世以降か。
16 7.5YR4/1 褐灰色、締まり小、粘性小。微細な炭化物を含む。近世以降か。
17 7.5YR5/3 にぶい褐色、締まり小、粘性小。焼台、中礫を少量含む。近世以降か。
18 7.5YR5/4 にぶい褐色、締まり小、粘性小。細礫を少量含む。近世以降か。
19 7.5YR6/6 橙色、締まり小、粘性なし。細礫を多量に含む。近世以降か。
20 10YR5/4 にぶい黄褐色、締まり小、粘性小。焼台の破片、細礫を少量含む。001SU。
21 10YR4/4 褐色、締まり中、粘性中。細礫、灰、炭化物を含む。近世以降か。
22 2.5Y5/4 黄褐色、締まり中、粘性なし。粗粒砂に粘土が混じる。近世以降か。
23 2.5Y5/4 黄褐色、締まり中、粘性小。色灰が斑状に入る。近世以降か。
24 5YR5/4 にぶい赤褐色、締まり中、粘性小。色灰層を畦構築に利用している。近世以降か。
25 10YR6/6 明黄褐色、締まり中、粘性小。近世以降か。
26 2.5Y6/4 にぶい黄色、締まり中、粘性小。粗粒砂、粘土。近世以降か。
27 2.5Y5/3 黄褐色、締まり中、粘性小。粗粒砂、粘土からなる。近世以降か。
28 5YR5/4 にぶい赤褐色、締まり小、粘性中。近世以降か。
29 5YR4/3 にぶい赤褐色、締まり小、粘性中。近世以降か。
30 2.5Y4/3 オリーブ褐色、締まり中、粘性小。近世以降か。
31 2.5Y4/3 オリーブ褐色、締まり中、粘性小。近世以降か。
32 7.5YR4/4 褐色、締まり中、粘性小。粗粒砂と粘土からなる。近世以降か。
33 12.5Y6/4 にぶい黄色、締まり小、粘性小。7.5YR5/6明褐色土が斑状に入る。近世以降か。
34 7.5YR4/4 褐色、締まり中、粘性小。細礫。近世以降か。
35 10YR4/4 褐色、締まり小、粘性小。粗粒砂に細礫を含む。近世以降か。
36 10YR4/4 褐色、締まりなし、粘性小。灰層含む。近世以降か。
37 7.5YR5/2 灰オリーブ色、締まり小、粘性中。近世以降か。
38 7.5YR6/4 にぶい橙色、締まり小、粘性中。焼土含む。近世以降か。
39 10YR5/4 にぶい黄褐色、締まり小、粘性なし。粗粒砂、細礫からなる。砂礫層。近世以降か。
40 10YR5/6 黄褐色、締まり小、粘性なし。粗粒砂、細礫からなる。砂礫層。近世以降か。

図7　土層断面図1　1：80



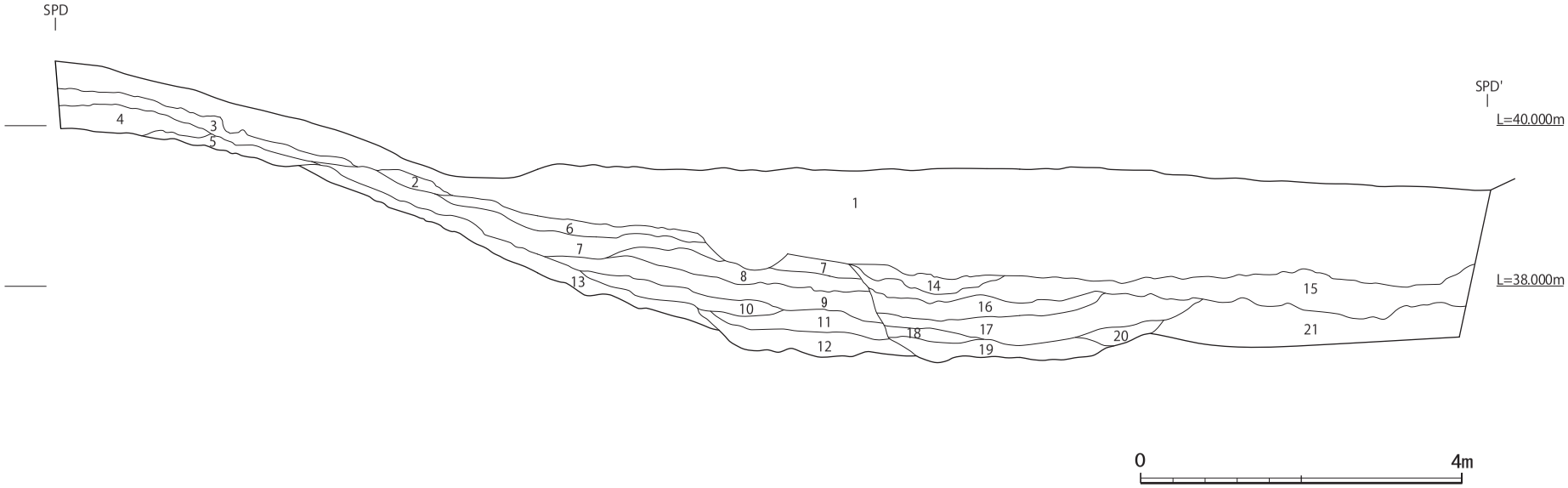
1　　表土・造成土。
2　2.5Y5/2　暗灰黄色、締まり小、粘性小。灰、碗、中礫を中量に含む。006SU。
3　7.5YR5/6　明褐色、締まり小、粘性小。細礫を少量含む。004SU。
4　2.5Y5/2　暗灰黄色、締まり小、粘性なし。細礫を多量に含む。004SU。
5　7.5Y4/2　オリーブ灰色、締まり小、粘性中。木片、腐食土を多量に含む。シルト質砂層。008NR。
6　10Y3/1　オリーブ黒色、シルト、木片、細礫を多量に含む。近世以降か。



1　　表土・造成土。
2　10YR5/3　にぶい黄褐色、締まり小、粘性なし。焼土、炭化物、碗、中礫を多量に含む。007SU。
3　7.5YR4/4　褐色、締まり小、粘性小。焼台、焼土ブロックを含む。004SU。
4　10YR5/3　にぶい黄褐色、締まり小、粘性小。焼土、炭化物、碗、中礫を多量に含む。灰層、004SU。
5　10YR4/2　灰黄褐色、締まり小、粘性小。極細粒砂、中礫からなる。色灰層、004SU。
6　7.5YR6/6　橙色、締まり小、粘性中。極細粒砂、焼土、焼台からなる。色灰層、004SU。
7　10YR4/3　にぶい黄褐色、締まり小、粘性小。焼土、碗、中礫を少量含む。004SU。
8　7.5Y4/1　灰色、締まりなし、粘性なし。中礫を多量に含む。礫層。008NR。
9　7.5Y4/1　灰色、締まり小、粘性中。粘土層。近世以降か。
10　7.5Y5/3　灰オリーブ色、締まりなし、粘性なし。砂層、中粒砂。近世以降か。
11　7.5Y5/1　灰色、締まり小、粘性中。粗粒シルト層、水成堆積。近世以降か。
12　5Y6/3　オリーブ黄色、締まり小、粘性中。27層よりやや粘性が強い。粗粒砂に細礫が少量混じる。近世以降か。
13　5Y6/2　灰オリーブ色、締まりなし、粘性小。近世以降か。

図８　土層断面図２　１：80

目次
終了



1　　表土・造成土。
2　10YR5/6　黄褐色、締まり小、粘性中。003SU。
3　10YR5/4　にぶい黄褐色、締まり中、粘性小。極細粒砂、碗、細礫を少量含む。003SU。
4　7.5YR5/6　明褐色、締まり中、粘性小。中礫を中量含む。003SU。
5　7.5YR6/3　にぶい褐色、粘土層。白色のサシが入る。003SU。
6　10YR4/1　褐灰色、締まり小、粘性小。炭化物、焼台、碗、細礫を含む。003SU。
7　10YR4/2　灰黄褐色、締まり小、粘性小。炭化物、中礫、焼台を含む。003SU。
8　2.5Y5/4　黄褐色、締まり小、粘性中。粗粒砂、灰が混じる。003SU。
9　2.5Y4/2　暗灰黄色、締まり小、粘性中。焼土、炭化物、灰を含む。003SU。
10　5Y5/2　灰オリーブ色、締まり小、粘性なし。粗粒砂、細礫を多量含む。003SU
11　5Y6/3　オリーブ黄色、締まり小、粘性小。中礫、碗を含む。003SU
12　5Y5/3　灰オリーブ色、締まり小、粘性小。細礫、灰を少量含む。003SU
13　5Y6/3　オリーブ黄色、締まり小、粘性小。中礫、碗を含む。003SU。
14　7.5YR4/1　褐灰色、締まり中、粘性大。粘質土、焼台、碗を多量に含む。008NR。
15　2.5Y5/2　暗灰黄色、締まりなし、粘性なし。流木、根、碗を含む。シルト層。近世以降か。
16　7.5Y6/2　灰オリーブ色、締まりなし、粘性なし。粗粒砂。近世以降か。
17　5Y5/3　灰オリーブ色、締まり小、粘性なし。粗粒砂。近世以降か。
18　5Y5/3　灰オリーブ色、締まり小、粘性なし。細礫を少量含む。粗粒砂。近世以降か。
19　7.5Y6/1　褐灰色、締まり小、粘性中。中礫を多く含む。近世以降か。
20　5Y5/4　オリーブ色、締まり小、粘性なし。粗粒砂層。近世以降か。
21　2.5Y5/4　黄褐色、締まりなし、粘性小。粗粒砂、砂層。近世以降か。

図９　土層断面図３　１：80

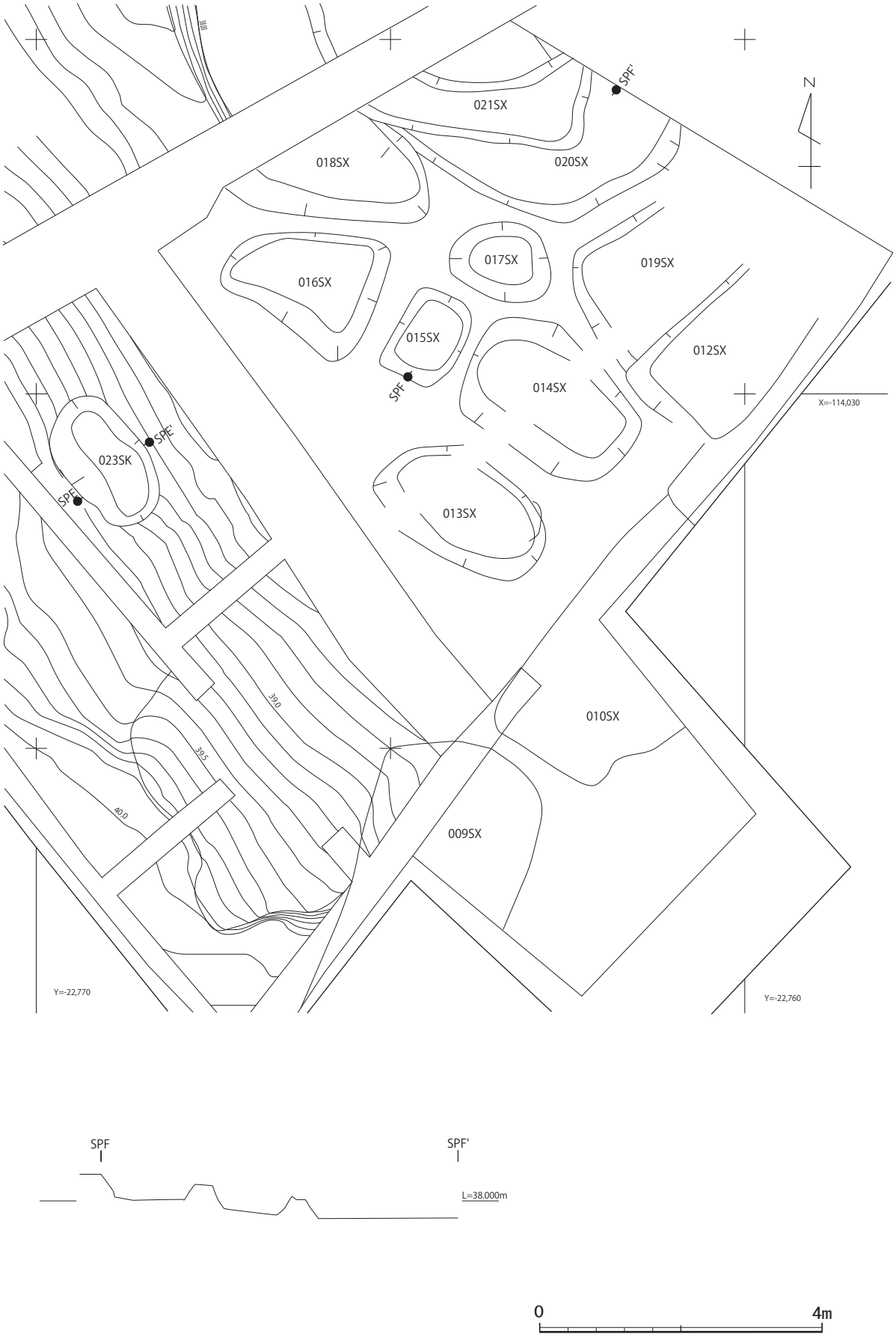


図 10　その他の遺構　1：80

第３章　遺　物

出土遺物の総量はコンテナー約170箱を数える。その大半が八巻古窯群の焼成品である灰釉系陶器（山茶碗）とその窯道具（焼台）である。

１　土器・陶器

八巻古窯群の焼成品と考えられる資料をここで報告する。器種は、碗・小碗・小皿がほとんどで、これに壺・瓶・鉢などが加わる状況にある。

以下、これらを器種別に報告するが、法量・色調などは、本書に添付するCD−ROMの遺物計測一覧を参照とする。

・碗

今回の調査で量的に最も多量に出土している。底部から口縁部に至る単純な形状で、外底部には高台が付く。碗Ａ～Ｃに区分する。灰層資料（SU01・03～07）を中心に報告するが、213～218は008NR出土。229～294は遺構外資料となる。

碗Ａは主に001SU･003SUなどで確認できる。法量は、口径20.0㎝、底径9.5㎝、器高6.0㎝程度となる。体部は丸みを帯び、全体的に器壁は薄い。口縁部は引き出すものが多い。高台は高く、端部はあまりつぶれない。平面形は歪みの少ない円形となる。内面はなだらかで内底部はフラットか中央部が低く盛り上がる。

碗Ｂは主に001SU・004SU・005SUなどで確認できる。法量は、口径21.0㎝、底径10.0㎝、器高6.5㎝程度となる。碗Ａと比較して器壁がやや厚い。体部の丸みは弱くなり、口縁部は余り引き出さない。高台はやや高く、端部はあまりつぶれない。平面形も歪みの少ない円形となる。内底部はなだらかだが、中央部が盛り上がる場合もある。調整はややラフとなり、内底部外側にわずかな段差が確認できるものも含まれる。

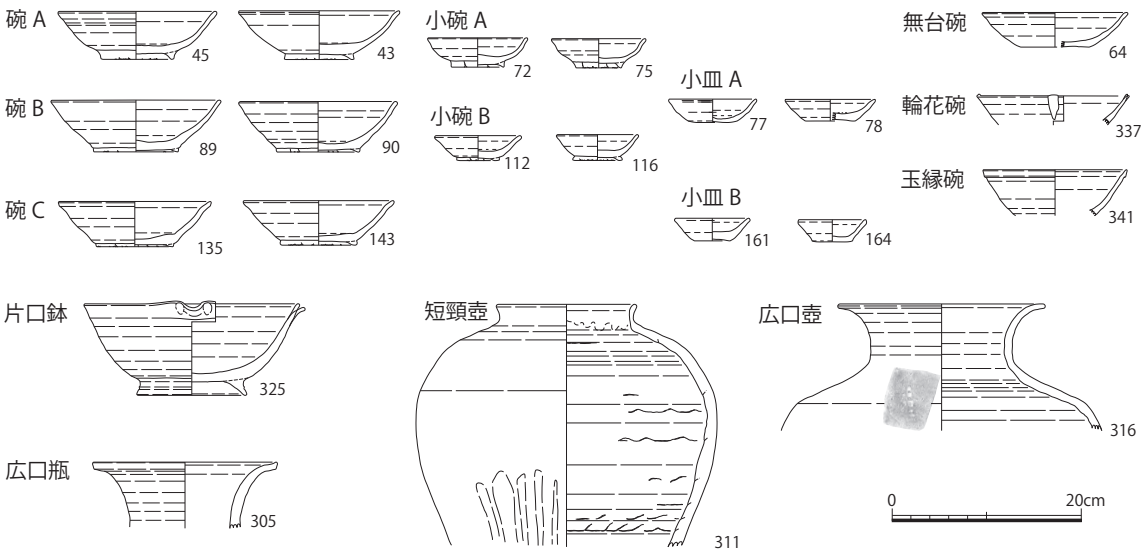


図11　器種分類図　１：８

碗 C は主に 006SU･007SU で確認できる。法量は、口径 19.0㎝、底径 9.0㎝、器高 6.0㎝程度となる。体部やや直線的で、口縁部はあまり引き出さず、外側の端部に面を持つものも含まれる。高台はやや低く、端部はつぶれるものが多い。平面形は若干歪む。内底部は調整が簡略化されたため雑な印象を受ける。外側に浅いくぼみが一周するものが多い。

・小碗

碗をそのまま縮小したような形状。小碗 A・B に区分するが、法量のバラツキが大きい。灰層資料（SU01･03 ～ 07）を中心に報告するが、219 ～ 226 は 008NR 出土。295 ～ 300 は遺構外資料となる。

小碗 A は 001SU・003SU などで確認できる。法量は口径 11.0㎝、底径 6.0㎝、器高 3.5㎝程度。やや大型で、器高が高く体部に丸みを有し、口縁部は引き出す。内底部はフラットか中央部が低く盛り上がる。高台はやや高い。

小碗 B は 001SU･004SU･005SU などで確認できる。法量は口径 12.0㎝、底径 6.0㎝、器高 3.5㎝程度。器高が小碗 A に比較して低く、体部の丸みも弱く、口縁部の引き出しも鈍い。高台はやや低く、内底部は、フラットか周囲に浅いくぼみが一周する。

・小皿

小碗から高台を取り除いた形状。A・B に区分する。灰層資料（SU01・03 ～ 07）を中心に報告するが、227・228 は 008NR 出土。301 ～ 304 は遺構外資料となる。

小皿 A は主に 001SU・003SU・004SU・005SU で確認できるが、数量は乏しい。006SU 出土の 172 も器高が低いがこれに含まれるのかも知れない。法量は、口径 11.0㎝、底径 6.0㎝、器高 3.5㎝程度となる。小碗 A・B から高台を取り除いた形状となる。

小皿 B は主に 006SU・007SU で確認できる。法量は、口径 9.0㎝、底径 5.0㎝、器高 3.0㎝程度で小型となる。口縁部は余り引き出さない。

・無台碗

64 は高台を持たない碗で、高台を除く形状は碗 A と同様となる。

・広口瓶・短頸壺・広口壺

305 ～ 307 は広口瓶。太く長い頸部を持ち、口縁端部に面を有する。端部の面は 305・307 が明瞭、306 はやや丸みを帯びる。305 が 001SU、306 が 004SU、307 が 008NR 出土。

310 ～ 315 は短頸壺。肩部がやや張る。頸部は長いもの（310 ～ 313）、やや短いもの（314・315）に区分できるのか。312 が遺構外資料の他、全て 003SU 出土。

316 は広口壺。肩部がやや張り、短く外反する頸部を持つ。口縁端部は丸く納める。頸部と肩部の境界は内外面ともに不鮮明となる。肩部に押印文が 1 ヶ所確認できるが、内面に当て具痕は確認できない。全面にヨコナデ調整を施すが、押印文の上面にのみ弱いヘラ削り調整を施す。317 は 316 と同一個体である可能性を持つ口縁部片。いずれも 001SU 出土。

318 ～ 324 は頸部を欠く資料を集めた。318 が短頸壺、319 ～ 324 は広口瓶か。底部の残存する 318・320 ～ 324 はいずれも平底となる。

・片口鉢

325 ～ 329 は片口鉢。碗をそのまま大きくした様な形状で、口縁部に片口を有する。やや高い高台が付き、外底部には基本的に粗面となる。数量は乏しい。片口部が残存する 325 はやや小振りとなる。326 ～ 330 は口縁部片で、330 は端部が玉縁状となる。331 は片口を有する碗、332 は片口を有する小皿となる。いずれも鉢ではないがここで報告する。

・その他の碗・皿

輪花碗と玉縁状口縁を有する碗などがある。

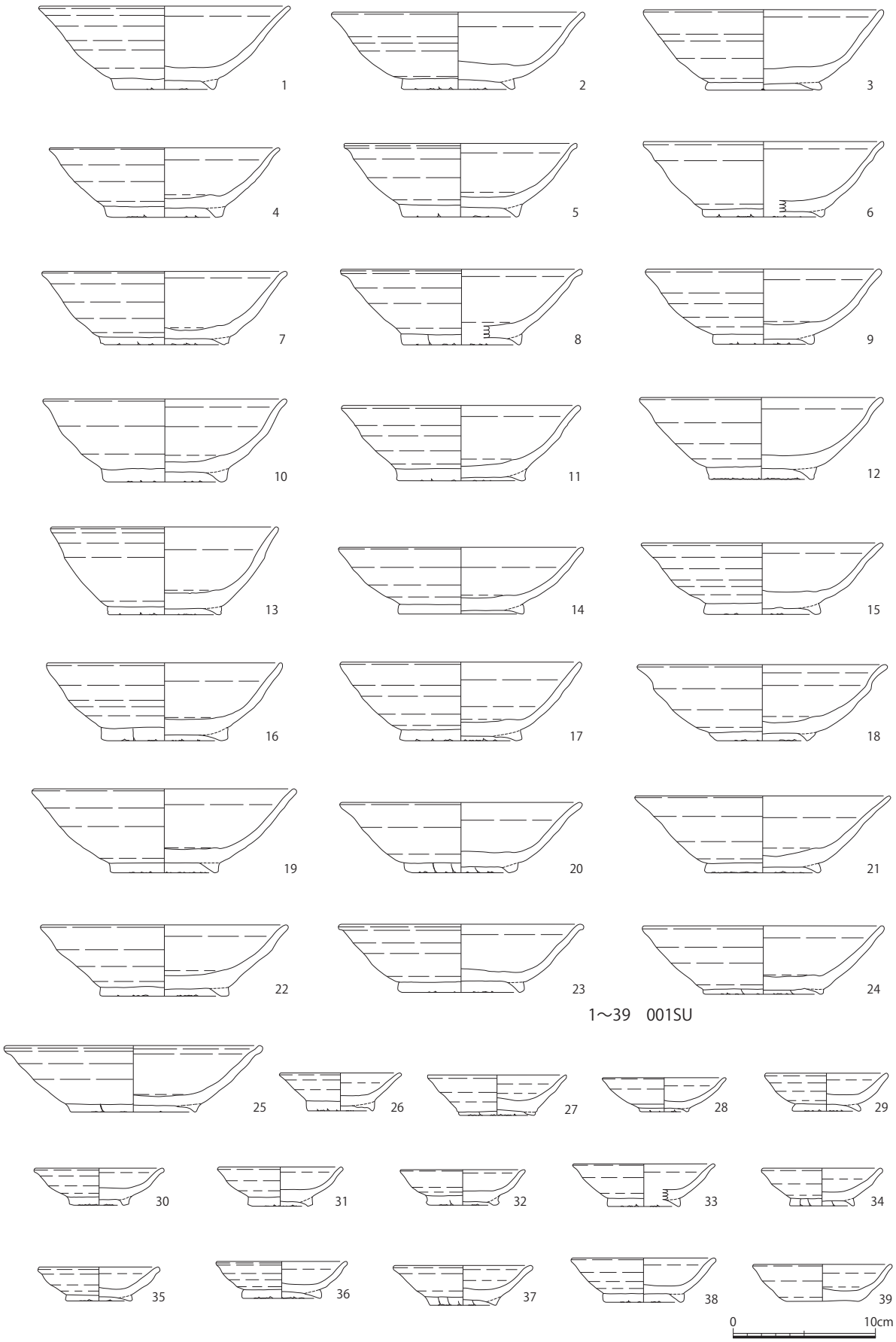

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
1～39　001SU
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0
10cm

図12　出土遺物1　1：4

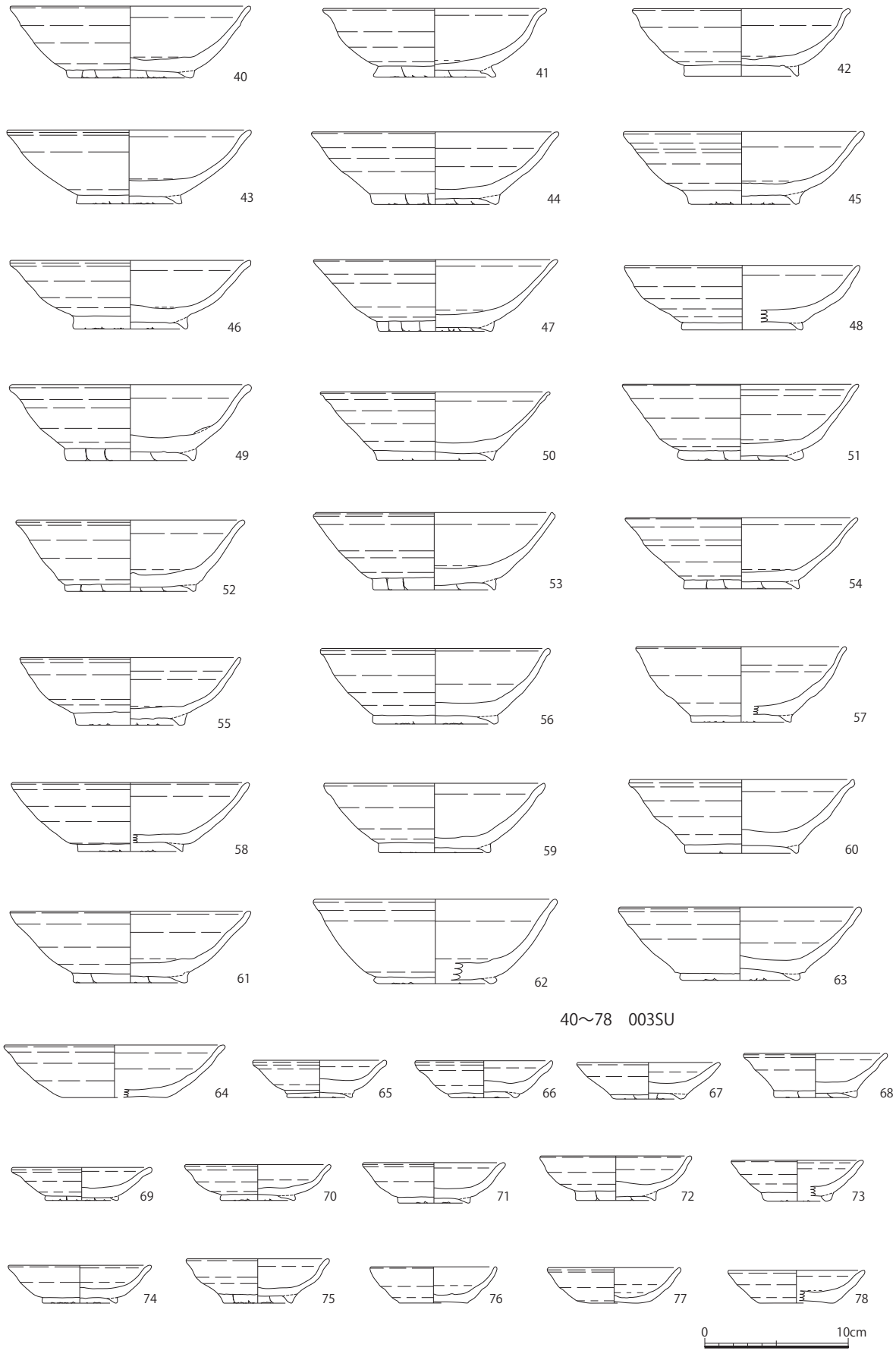

40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
40～78　003SU
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
0
10cm

図 13　出土遺物２　1：4

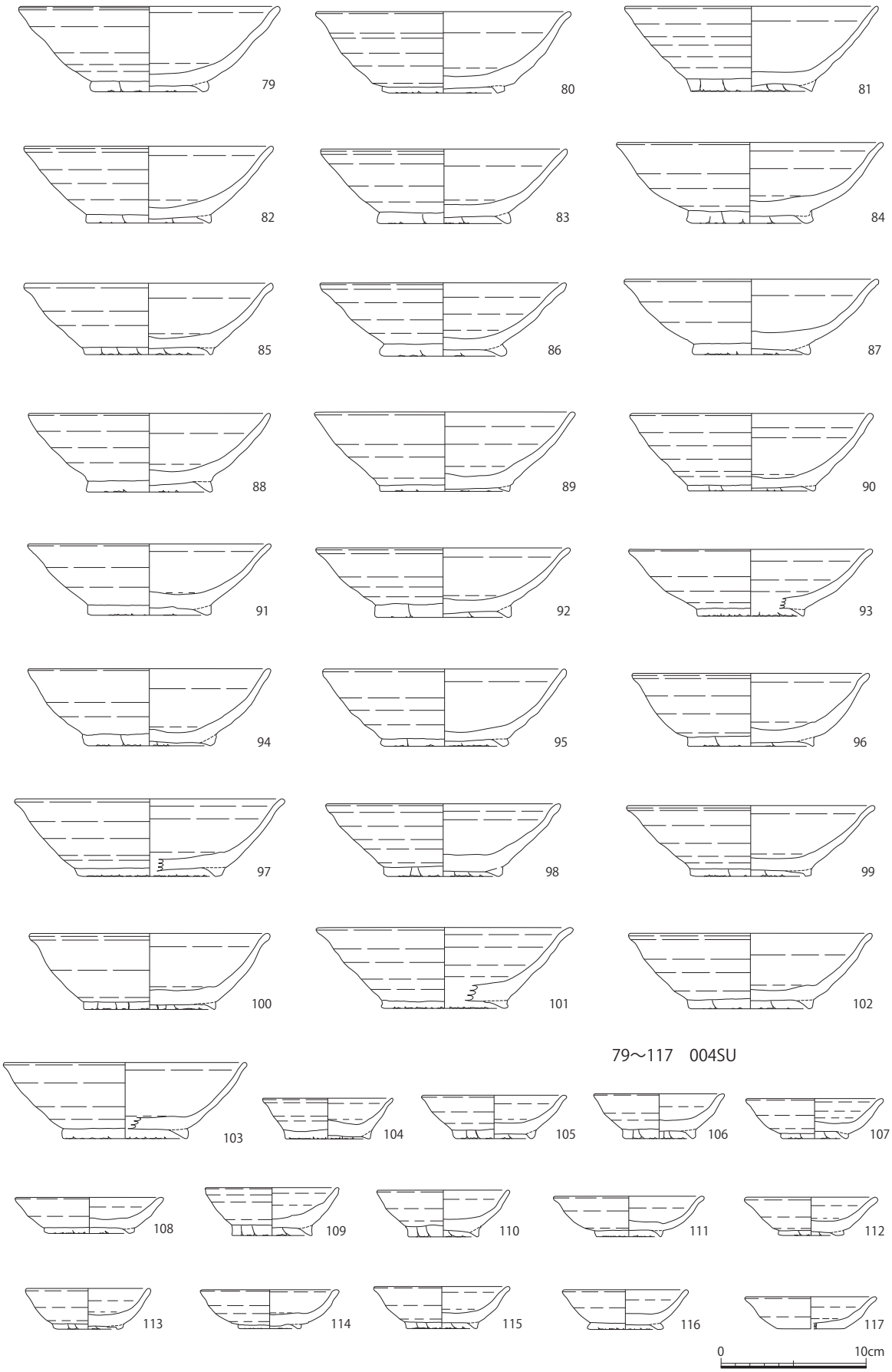

79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
79～117　004SU
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
0
10cm

図 14　出土遺物３　1：4

333 ～ 339 は輪花が確認できる碗・小碗を集めた。333 ～ 337 は輪花碗。輪花の表現は、指頭でナデ上げるもの（337）、ヘラ状工具による線刻（333 ～ 336）に区分できる。遺構外資料の 377 を除き 003SU 出土。

338・339 は輪花を施す小碗。338 は指頭、339 はヘラ状工具による。338 が遺構外資料で、339 は 005SU 出土。その他に輪花小碗の釉着資料（360）を得ているが後述する。

340 ～ 350 は玉縁状口縁を有する碗で、体部下方～底部を欠く。口縁部は湾曲させ、端部を肥大気味に仕上げるが、形状はややバラツキが大きい。340 はさらに指頭でナデ上げる輪花を施す。350 が 004SU、その他は 003SU から出土している。

・その他の遺物

上記以外の遺物をここでまとめて報告する。

351 ～ 354 は土師器鍋。いずれも口縁部片で短く屈曲する口縁部を有する。端部は上方に折り曲げて丸く納める。いずれも外面にススが付着する。

355 は上下に回転糸切り痕が観察できる扁平な円形粘土版。356 は碗、357 は小碗の底部片だが、内底部にも回転糸切り痕を残す。

358 ～ 363 は溶着資料。358 が碗で 8 点、359 は小碗で 9 点が溶着する。いずれも焼成時の重ね焼き単位数を留める資料で、最上段の上面は自然釉を被り、最下段の高台端部には焼台痕が観察できる。003SU 出土。360 は輪花小碗の釉着資料。3 点が溶着するが、このうち 2 点にヘラ状工具による輪花が確認できる。最下段の 1 点は小片のためか輪花が確認できない。最上段の上面は自然釉を被り、最下段の高台端部には剥離痕が確認できる。004SU 出土。361 ～ 363 は小碗と小皿の溶着資料となる。いずれも 3 点が溶着するが、361 は最下段の高台端、362・363 は最上段の上面と最下段の下面に剥離痕が観察できる。全て遺構外資料となる。

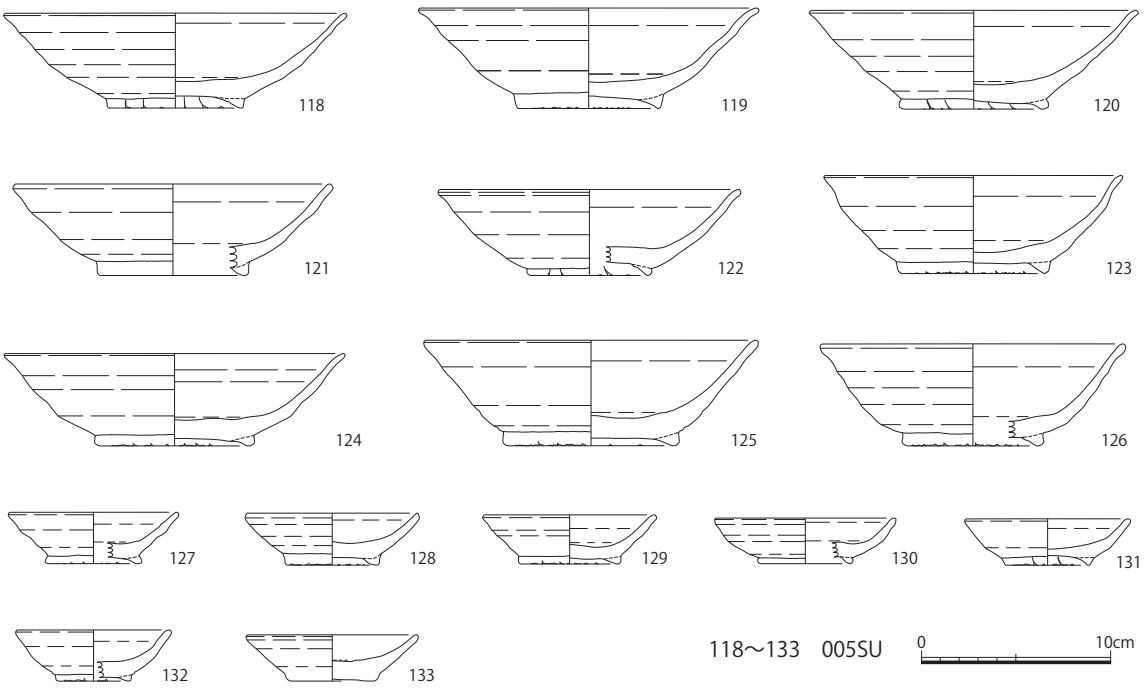


図 15　出土遺物 4　1：4

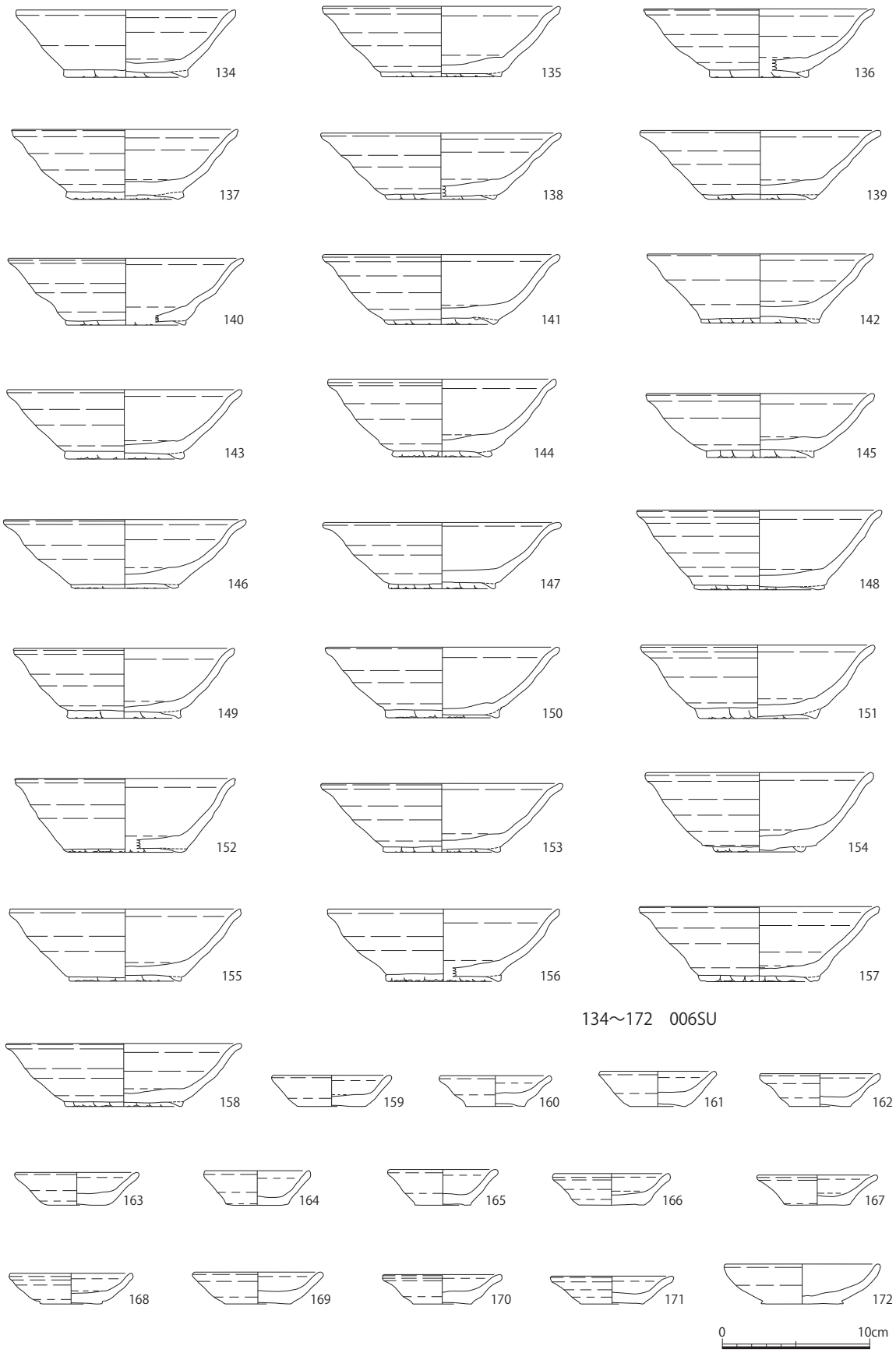

134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
134～172　006SU
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
0
10cm

図 16　出土遺物 5　1：4

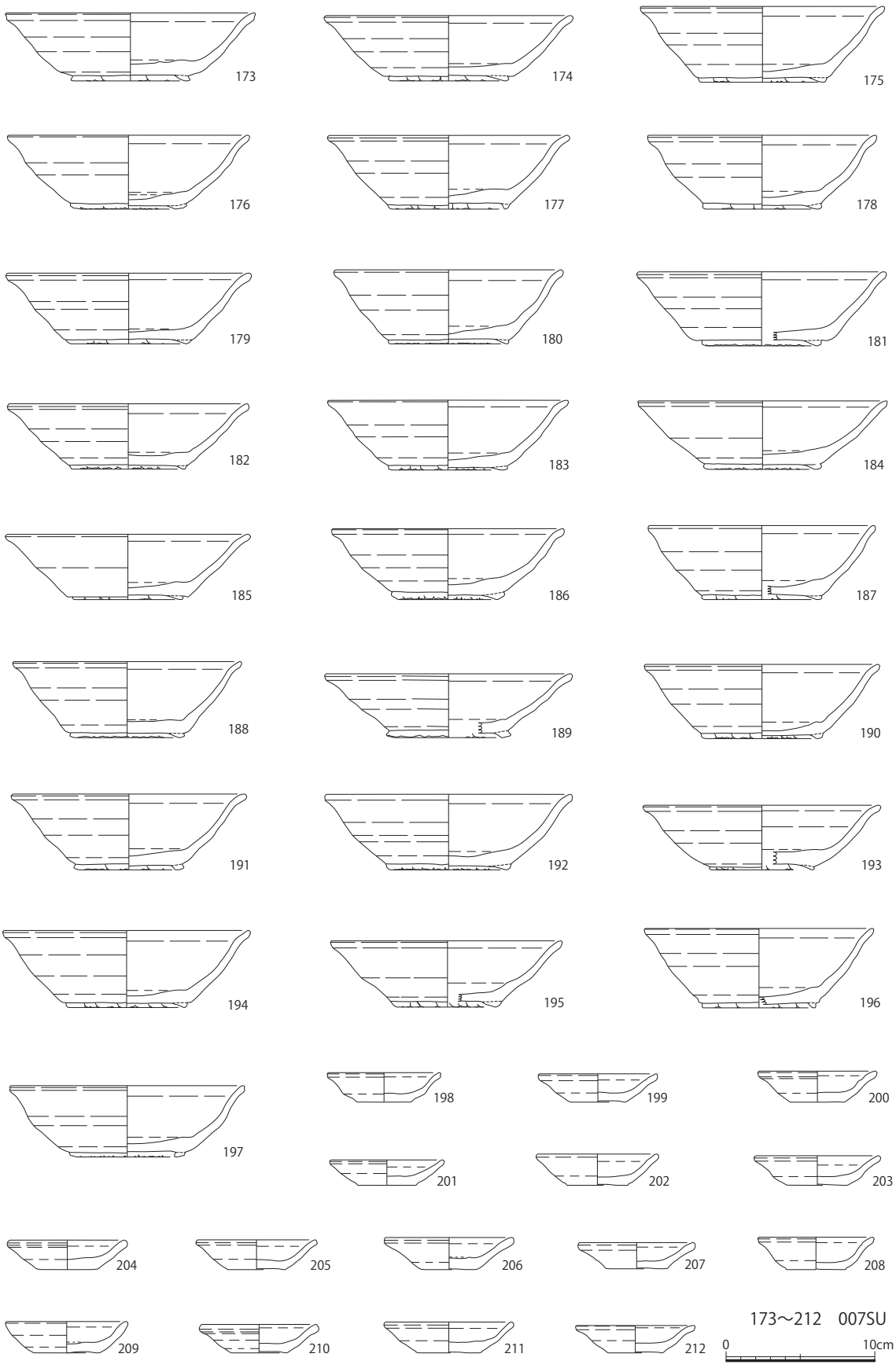

173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
173～212　007SU
0
10cm

図 17　出土遺物 6　1：4

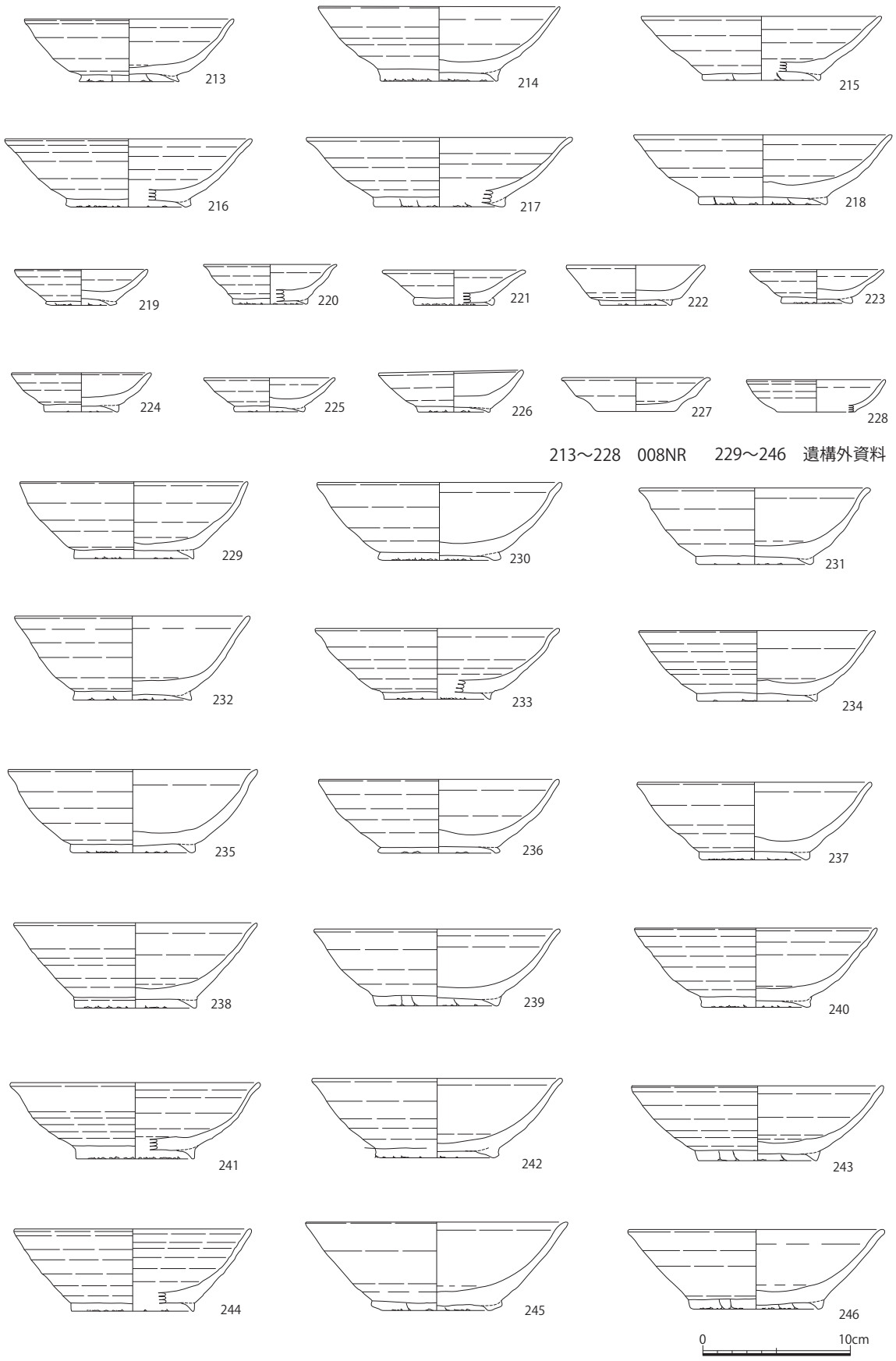

213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
213～228　008NR　229～246　遺構外資料
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
0
10cm

図 18　出土遺物７　１：４

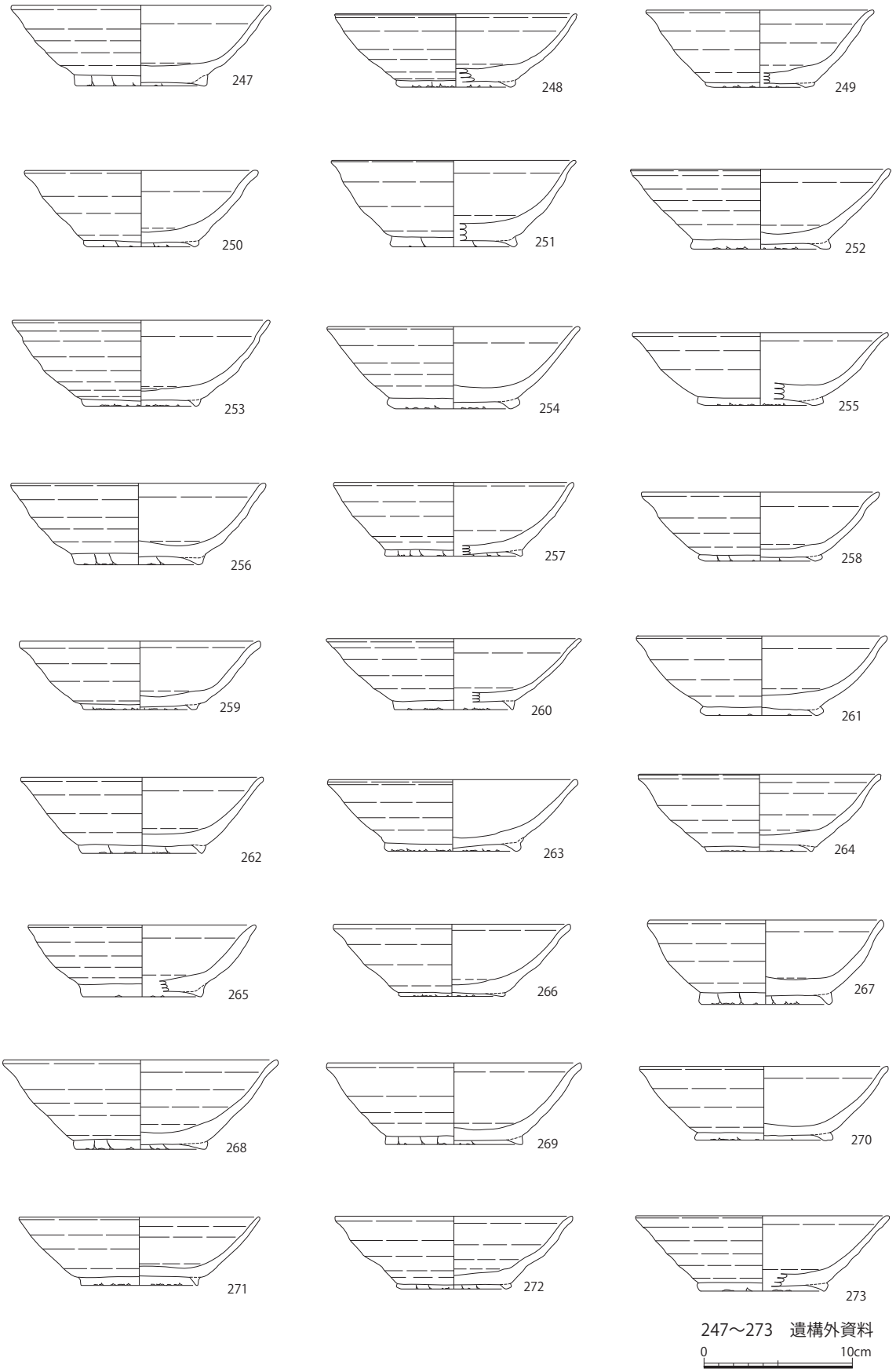

247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
247～273　遺構外資料
0
10cm

図 19　出土遺物 8　1：4

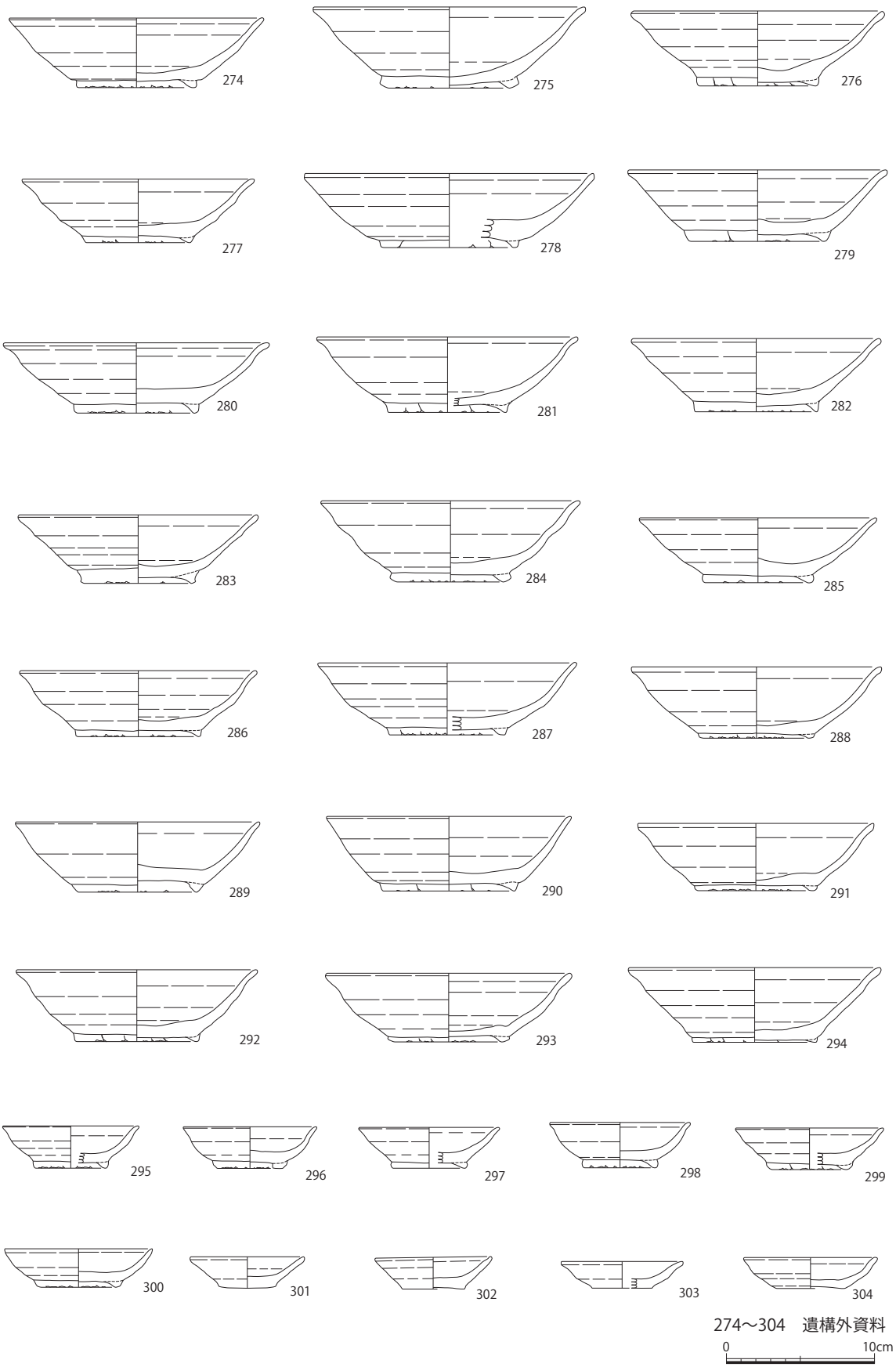

274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
274～304　遺構外資料
0
10cm

図 20　出土遺物９　１：４

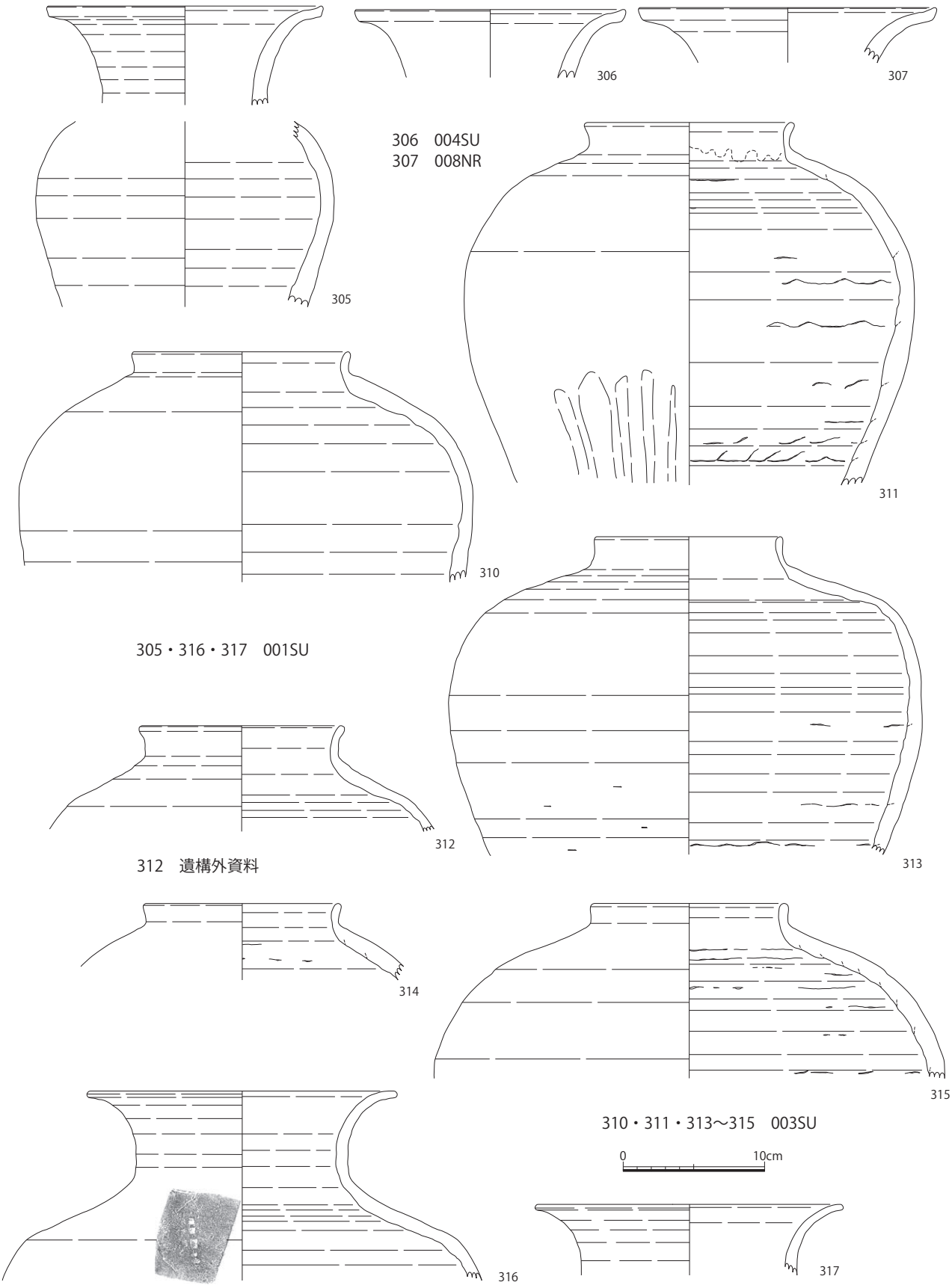


図 21　出土遺物 10　1：4

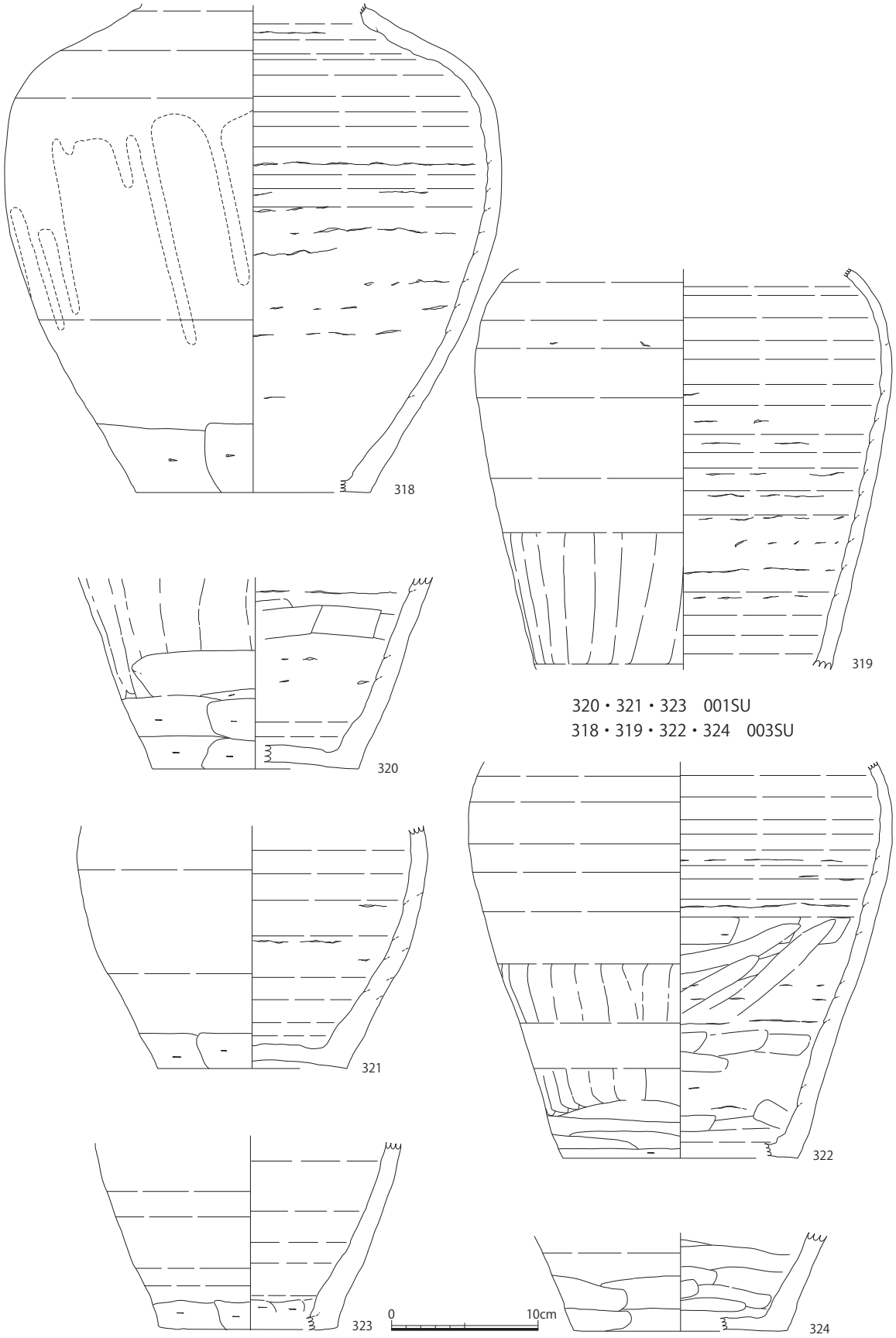


図 22　出土遺物 11　1：4

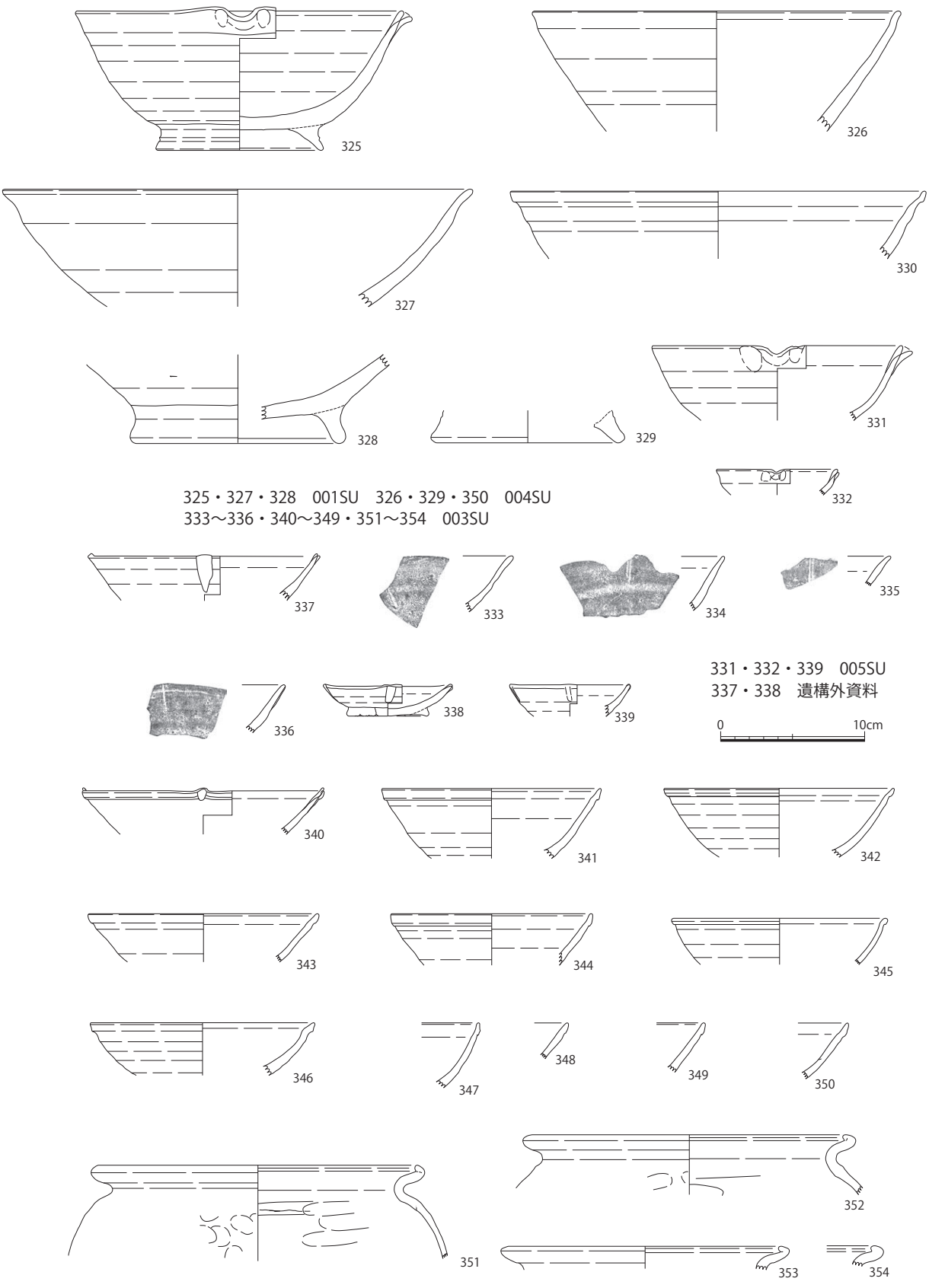


図 23　出土遺物 12　1：4

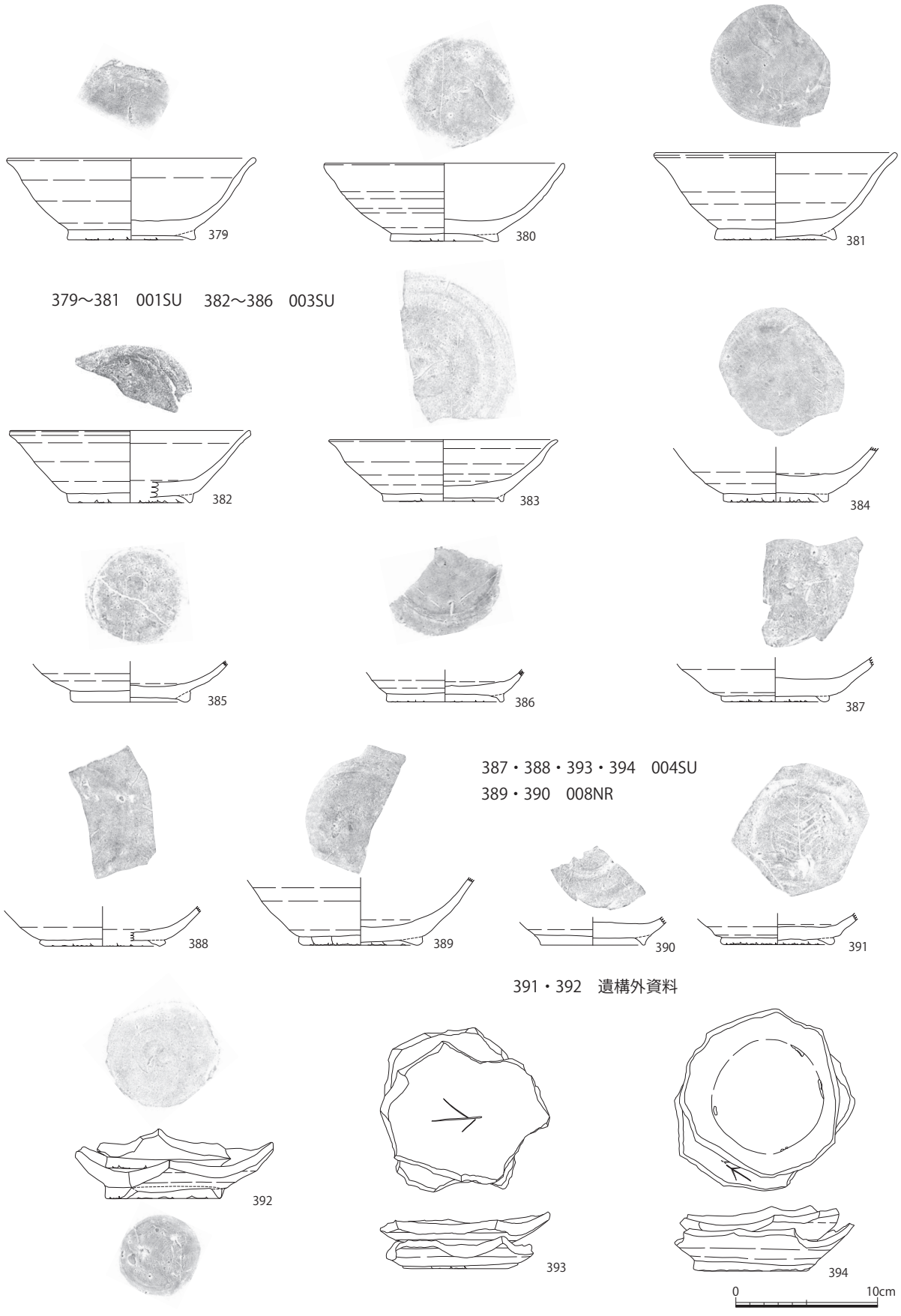


図 24　出土遺物 13　1：4

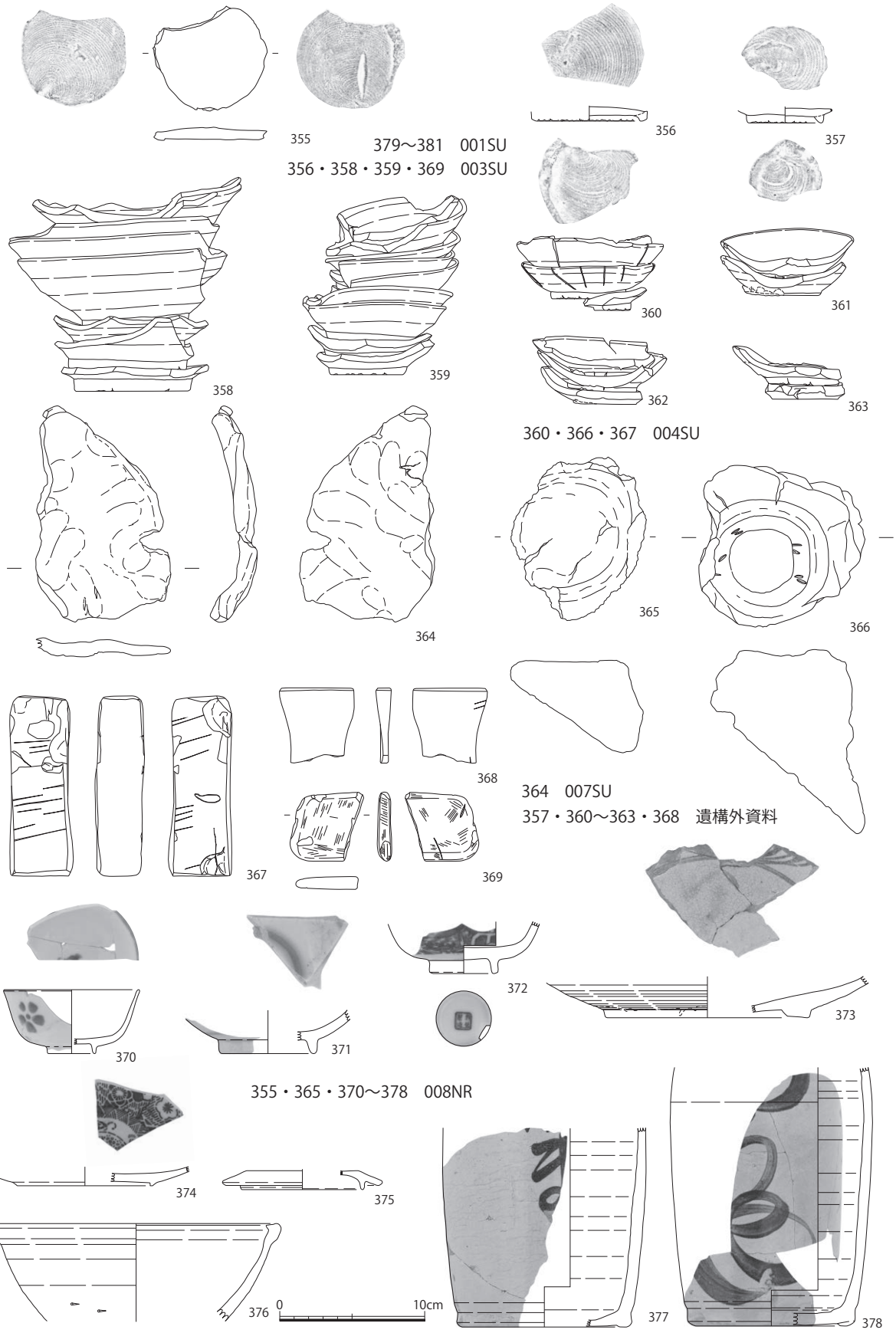
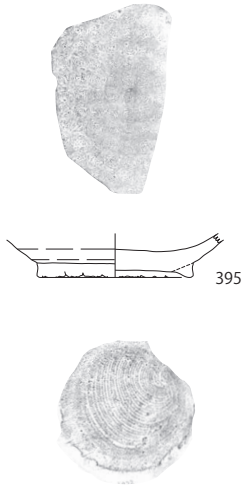
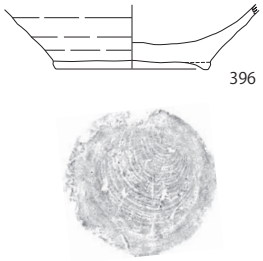
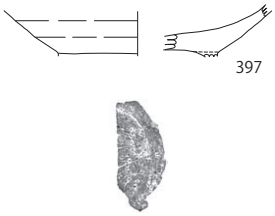


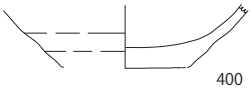
図 25　出土遺物 14　1：4

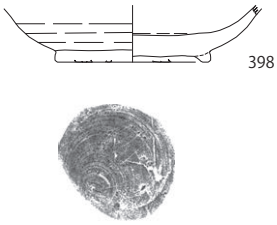






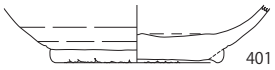
396・397・393・394　004SU
398　005SU

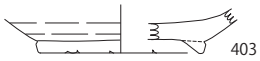


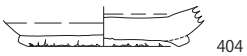


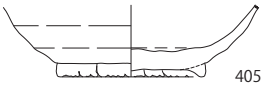
400　008NR
399・407　006SU

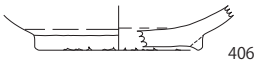
408　004SU

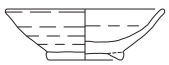












395・401～403・405・406　遺構外資料
404　001SU

0　10cm

図 26　出土遺物 15　1：4

370 ～ 378 は近世・近代の陶磁器。いずれも 008NR 出土。370 は瀬戸・美濃産の端反碗。登窯第 11 小期。373 は馬目皿の底部片。瀬戸産で登窯第 8 小期～第 11 小期。376 は美濃産片口。登窯第 8 小期。372・373 は銅板転写の染め付け。371・377・378 などとともに近代以降か。

367・368 は砥石で角柱状に成形される。367 は砂質凝灰岩で重量は 332.1g。004SU 出土だが、混入か。368 は使用による損耗が著しく原型すら留めない。凝灰質砂岩で重量は 30.9g。遺構外資料となる。369 は自然礫を研磨具として利用したもの。003SU 出土。材質は泥質凝灰岩。

2　窯道具（図 25–364 ～ 366）

窯道具には焼台がある。

焼台は碗の焼成用と考えられるサイズがほとんどとなるが、これより小型品で小碗（小皿）の焼成用と考えられるサイズもわずかに含まれる。図示した 2 点はいずれも碗の焼成用となる。

焼台は砂粒を多量に含んだ胎土を使用し、多孔質でスサの混和も観察できる。硬く焼き締まったものはまれで、多くは脆い。側面には掌の圧痕を留め、底面には窯体床面との剥離痕が確認できる。上面には重ね焼き時に最下段にあった碗底部の圧痕が残るものが通例となる。

焼台の整形は、窯詰め時に窯内にて行われたと考えられる。具体的な手順は、やや硬化気味の素地土を適当な大きさの塊にまとめ、窯体床面に掌などで圧着したものと推定できる。焼台の形状は丸餅状（365）から断面が三角形に近いもの（366）まで多様となるが、配置された場所の傾斜角に起因するものと考えられる。365 が 398.7g で 008N 出土。366 が 937.5g で 004SU 出土。

364 は湾曲した粘土版で、重量は 158.7g。全面に手づくね成形の痕跡を留める。窯道具に含めて報告するが、用途は明らかではない。全面ラフな調整を施す。胎土は碗・小碗などに類似し、前述した焼台とは明瞭に異なる。007SU 出土。

3　線刻（圧痕）資料（図 33–379 ～ 407・図版 7）

379 ～ 403・408 は細く浅い線刻を施す一群を集めた（注）。ほとんどが不鮮明となる。器種は碗に限定でき、26 点が確認された。線刻位置は内底部（379 ～ 394）、外底部（396 ～ 403）、内底部と外底部の 2 ヶ所（395）となる。出土位置は、379 ～ 381 が 001SU、382 ～ 386 が 003SU、387・388・393・394・396・397 が 004SU、398 が 005SU、399 が 006SU、389・390・400 が 008NR、その他は遺構外となる。

404 ～ 406 は圧痕。やはり不鮮明だが、中央脈・側細脈・細脈などが確認できるため、木葉の圧痕と理解した。器種は碗で、いずれも外底部で確認できる。出土位置は 404 が 001SU で、405・406 は遺構外資料となる。407 は、外底部に『十』もしくは『×』の線刻を施す。線刻は太く深い。

注

これらの資料を全て木葉圧痕とする意見もいただいている。確かに一部は木葉の圧痕と誤認している可能性を持つが、線刻の周囲を観察すると、工具の圧力が原因していると思われるわずかな盛り上がりが確認できる事例もある。特に葉縁はその傾向が強い。弧状もしくは連続線などで一定した筆圧を保ち難いのであろう。一方、中央脈・側細脈が比較的鮮明である資料も細脈が確認できない。

第４章　科学分析

１　放射性炭素年代測定

（１）はじめに

今回の調査で出土した炭化材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

測定試料の情報、調製データは表２のとおりである。

発掘調査では、中世前期の窯体に伴う複数の灰層が検出されている。試料は、６つに分けられた灰層のうち、層位および出土遺物から最も古相と判断されている003SUから採取された試料No.67（PLD-21142）と試料No.159（PLD-21143）の２点と、最も新相と判断されている007SUから採取された試料No.175（PLD-21144）と試料No.178（PLD-21145）の２点、の計４点の炭化材である。007SUの試料No.175は最終形成年輪のある炭化材で、それ以外の３点は最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であった。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

（２）結　果

表３に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代を、図27に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

（３）結　果

表３に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した

表２　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-21142		種類：炭化材（マツ属複維管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 採取位置：外側 -1 年輪分 状態：dry	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-21143		種類：炭化材（マツ属複維管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 採取位置：外側 -2 年輪分 状態：dry	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-21144		種類：炭化材（ムクロジ） 試料の性状：最終形成年輪 採取位置：外側 -4 年輪分 状態：dry	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-21145		種類：炭化材（マツ属複維管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外　部位不明 採取位置：外側 -1 年輪分 状態：dry	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

表３　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$9^{13}0$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1 σ)	$^{\%}$(C 年代 (yrBP±1 σ)	$^{\%}$(C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-21142 試料 No.67	-27.22±0.18	957±18	955±20	1028AD（24.1%）1046AD 1093AD（34.9%）1121AD 1140AD（ 9.2%）1148AD	1021AD（31.1%）1055AD 1077AD（64.3%）1155AD
PLD-21143 試料 No.159	-26.94±0.20	980±17	980±15	1020AD（57.2%）1042AD 1108AD（11.0%）1117AD	1016AD（61.0%）1049AD 1086AD（26.9%）1124AD 1137AD（ 7.4%）1151AD
PLD-21144 試料 No.175	-27.63±0.17	980±17	980±15	1020AD（57.2%）1042AD 1108AD（11.0%）1117AD	1016AD（61.0%）1049AD 1086AD（26.9%）1124AD 1137AD（ 7.4%）1151AD
PLD-21145 試料 No.178	-26.31±0.17	980±17	-））8%）	1030AD（20.5%）1046AD 1091AD（37.6%）1121AD 1140AD（10.1%）1148AD	1023AD（28.4%）1057AD 1076AD（67.0%）1155AD

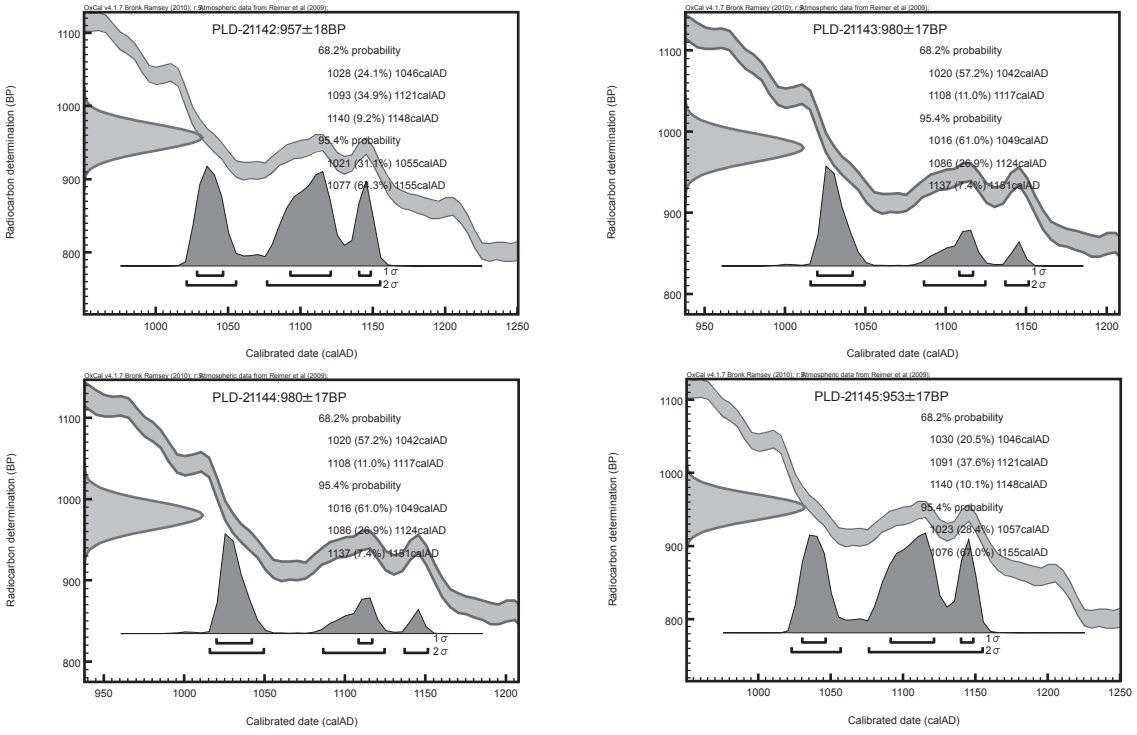


図 27　暦年較正結果

^{14}C 年代を、図 27 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5,730 ±40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ　伊藤 茂・安昭 炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・菊地有希子）

２　出土炭化材の樹種同定

（１）試料と方法

試料は、前述した放射性炭素年代測定試料と同一の、４点の炭化材である。放射性炭素年代測定の結果、003SU の時期は 11 世紀前半～ 12 世紀中頃、007SU の時期は 11 世紀前半～ 12 世紀中頃の年代値が得られた（放射性炭素年代測定の項参照）。また出土遺物では 003SU が古層、007SU が新層を示していると考えられている。計測可能な試料について、樹種同定前に木取りと復元直径、残存半径、残存年輪数の記録を行なった。復元直径の計測は、１㎝刻みの同心円に試料を当てて直径を求めた。残存半径は、試料で残存している半径を直接計測した。また残存年輪数は、残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定は、試料をまず乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）についてカミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製　VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

（２）結　果

同定の結果、針葉樹のマツ属複維管束亜属と広葉樹のムクロジの、計２分類群が産出した。マツ属複維管束亜属が最も多く３点で、ムクロジは１点であった。復元直径の計測結果では、試料 No.159 が直径３㎝、試料 No.175 のムクロジが直径１㎝に復元された。年輪数の計測では、試料 No.159 のマツ属複維管束亜属は残存半径 1.0㎝内に３年輪、試料 No.175 のムクロジは残存半径 0.5㎝内に３年輪、試料 No.178 のマツ属複維管束亜属は残存半径 1.1㎝内に２年輪がみられた。同定結果一覧を表４に示す。

次に同定した材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

・マツ属複維管束亜属　*Pinus subgen. Diploxylon*　マツ科　図 28　1a-1c（No.178）、3c（No.67）、4c（No.159）

仮道管と放射仮道管、放射組織、垂直および水平樹脂道で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。垂直樹脂道は晩材部に疎らに散在する。放射組織は単列のものと水平樹脂道を含む多列のものがみられる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側に向かって鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属にはアカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育する。材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。

・ムクロジ　*Sapindus mukorossi Gaertn.*　ムクロジ科　図 28　2a-2c（No.175）

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が単独ないし２～４個複合して散在する環孔材である。軸方向柔組織は４列以上の帯状、周囲状、翼状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅１～３列となるが、試料は未成熟の材のため、放射組織は一部直立細胞や方形細胞がみられた。

ムクロジは関東、新潟、富山県境以西の本州、四国、九州に分布する落葉高木の広葉樹である。材は中庸ないしやや重硬である。

（3）考　察

灰原でも古層を示す 003SU ではマツ属複維管束亜属が２点、新層を示す 007SU ではマツ属複維管束亜属とムクロジが各１点産出した。また復元直径では、003SU のマツ属複維管束亜属が直径３㎝、007SU のムクロジが直径１㎝と、共に小径木が産出した。各試料は灰原から炭化した状態で検出されたため、窯跡で利用されていた燃料材であると考えられる。マツ属複維管束亜属は燃焼性が高くて高火力を得やすいが、火持ちが悪いと言う材質をもつ。そのため窯跡の燃料材にはマツ属複維管束亜属を選択利用していた可能性があるが、分析試料数が少なく、詳細は不明であった。

知多半島とその周辺の窯跡で出土した炭化材は、沿岸部ではマツ属複維管束亜属、内陸部ではシイ属を中心とした広葉樹が多く利用されていると報告されている（愛知県埋蔵文化財センター ,2007）。また 14 世紀前葉に山茶碗を焼成していた上品野Ｅ窯跡では、燃料材の復元直径の計測が行われており、復元直径４㎝以下のマツ属複維管束亜属が多く産出している（小林 ,2011）。

八巻古窯では、試料数が少なく、樹種構成と復元直径共に傾向は掴めなかった。しかし古層を示す 003SU と新層を示す 007SU で共に小径木が産出しており、当窯跡でも小径木を燃料材として多く利用していた可能性がある。

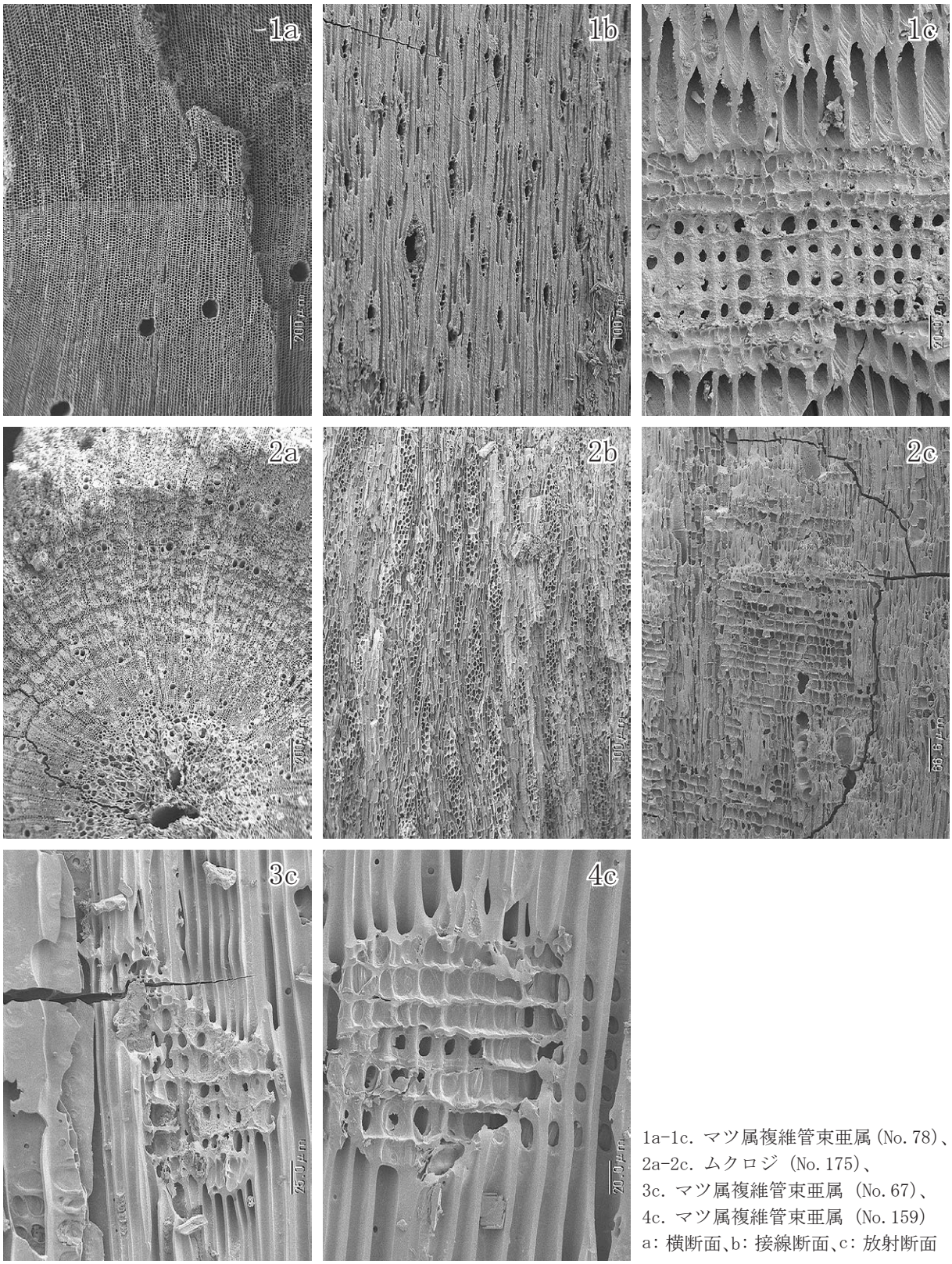
引用文献

愛知県教育･スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター(2007)夏敷古窯跡･蛇廻間古窯跡．222p, 愛知県教育･スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

小林克也(2011)上品野Ｅ窯跡出土炭化材の樹種．愛知県教育･スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター編「上品野Ｅ窯跡」：39-43, 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

表４　樹種試料

試料番号	出土位置	樹種	木取り	復元直径（㎝）	残存半径（㎝）	年輪数	備考
67	003SU（1C6f）	マツ属複維管束亜属	割れ	-	-	-	
159	003SU（1C6g）	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	3	1.0	3	枝材か
175	007SU（1C3c）	ムクロジ	芯持丸木	1	0.5	3	枝材か
178	007SU（1C3d）	マツ属複維管束亜属	割れ	-	1.1	2	



1a-1c. マツ属複維管束亜属 (No. 78)、
2a-2c. ムクロジ (No. 175)、
3c. マツ属複維管束亜属 (No. 67)、
4c. マツ属複維管束亜属 (No. 159)
a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

図 28　出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

第５章　考察と総括

１　主要遺構の変遷

ここでは、今回の調査で確認できた遺構を時期別に整理する。ここでは、これらを時期毎に区分してまとめたい。

・A 期（平安時代末）

八巻古窯群の操業期に該当する。

前述した様に、今回の調査は八巻古窯群としては二度目となっている。１次調査の調査区は、今回の調査区の西側に該当する。報告書によれば窯体は３基確認され、灰層の状況から近接してさらに別の窯体（以下、仮称４号窯）が存在する事も想定されている（愛知県教育委員会　1962・本書添付 CDROM に転載）。

調査区南西側の段状の掘削面に、窯体の断面と考えられる被熱部分が２ヶ所確認できた。確認位置と 001･113 ～ 007SU の堆積状況を考え合わせると、北側の被熱部分が２号窯、南側が１号窯と考えられる。この状況をやや強引に表現したのが図 29 である。ここでは破線で表現した３号窯は全くの推定位置となっている。それぞれの窯体の位置と、今回の検出遺構を対応させると、001SU が３号窯、SU003 が１号窯、004SU・005SU が２号窯、006SU・007SU が仮称４号窯の灰層であると考えられる。報告書によれば、築窯順序は１号窯→３号窯→２号窯→仮称４号窯となる（愛知県教育委員会 1962・本書添付 CD「添付データ 3」）。なお、１～３号窯の構造は本書付載に詳しいが、床面が焼成室の下部で屈曲、焼成室上部で高傾斜の床面となる窯体で、当該期の山茶碗窯としては一般的と言える。

・B 期（江戸時代後期）

B 期の遺構は、調査区の南東部を中心として確認された遺構群となる。性格を特定するには至らなかったが、何らかの土地利用に伴う遺構と考えられる。

ところで、１次調査報告書では本窯の立地について「前方東側は小支谷の最奥をなす。前方の谷底は一部分畑となっているが下方には湿地があり（以下略）」と説明されている。調査区東側に位置する 008NR が「下方の湿地」に該当するものと考えられ、実際に昭和 36（1961）年の１次調査時に調査区から飛散したと推定できるビニール袋が最上層から出土している。１次調査から近年に至る間に、この小支谷は造成土により埋め立てられ、調査開始直前の景観（図版１）を形成したのであろう。

008NR からは 18 世紀後葉～ 19 世紀頃の陶磁器も出土しており、丘陵側の一部には人為的な加工も観察できる（図８）。001SU・003SU の上面から検出された土坑群も性格不明ながらもこの段階まで遡る可能性を残し、窯体前面の小支谷では何らかの再開発が実施されていたものと考えられる。

図 31 は『東浦町誌』に掲載されている『緒川村絵図』をトレースしたものである。釈文は『東浦町誌』に依拠する。絵図は天保 12（1841）年に作製されたもので、東側に境川に面して緒川村の中心部、西側端部には飛び地状に緒川新田が描かれている。

八巻古窯群は緒川新田の周辺に位置しているものと考えられる。緒川新田は、緒川村の中心部分から西側に伸びる大野道沿いに位置し、加木屋村と寺本村の境界部となる。現存する溜池を目印に、図２の明治時代の地図や図 32 の地籍図を介して絵図中に八巻古窯群の位置を探すと、『唐路』と記された谷状の細長い地形に面した場所に該当するものと考えられる。大まかな位置となるが、絵図上に▲を付けた。

図 29　今回の調査区と１次調査の調査区

東浦町の竹内家文書によると、緒川新田は享保 12（1727）年に緒川村の支郷として成立したとされる。この他に、地元には緒川新田成立頃の享保年間（1716 ～ 1731）に作製された緒川新田周辺の開発を願い出た絵図が残されている。同じ内容の絵図が二枚存在する事から、この計画は実現しなかった可能性が高いとも考えられているが（降幡　1998）、緒川新田とその周辺の開発は、天保 12（1841）年の『緒川村絵図』の完成段階までには一定の成果を得たのであろう。こうした動きが、B 期の遺構群とも関連するものと推定される。

以上、今回の調査で検出できた遺構の変遷案をまとめた。しかし、調査区は八巻古窯群の灰層部分に限定されたものとなっており、仮称４号窯の実体など、周辺部の調査を待っての再検討が必要である事も記しておきたい。

参考・引用文献

降幡光宏　1998「新田開発と水争い」『新編　東浦町誌』本文編　東浦町誌編さん委員会
愛知県教育委員会　1962「八巻古窯址群」『愛知県知多古窯址群』

調査区外に写る３名の人物のうち右側２名は、１・２号窯と思われる被熱部分に立つ。
左側の１名は３号窯の推定位置。

図 30　調査区と窯体推定位置

乾坤院領善導寺領之外
一円御蔵入
知多郡緒川村図絵
高千七百七拾三石八斗七升八合　新田共
外
元高弐拾四石六斗五升五合　善導寺領
同三拾弐石弐斗八升弐合　乾坤院領
天保十二年丑五月
此色田面屋鋪
此色畑方
此色山
此色道筋
此色川筋
此色流作草生
此色乾坤院
善導寺　領
▲は八巻古窯群所在地
『新編　東浦町誌　資料編 1』より作製（再トレース・一部改変）

図 31　緒川村絵図

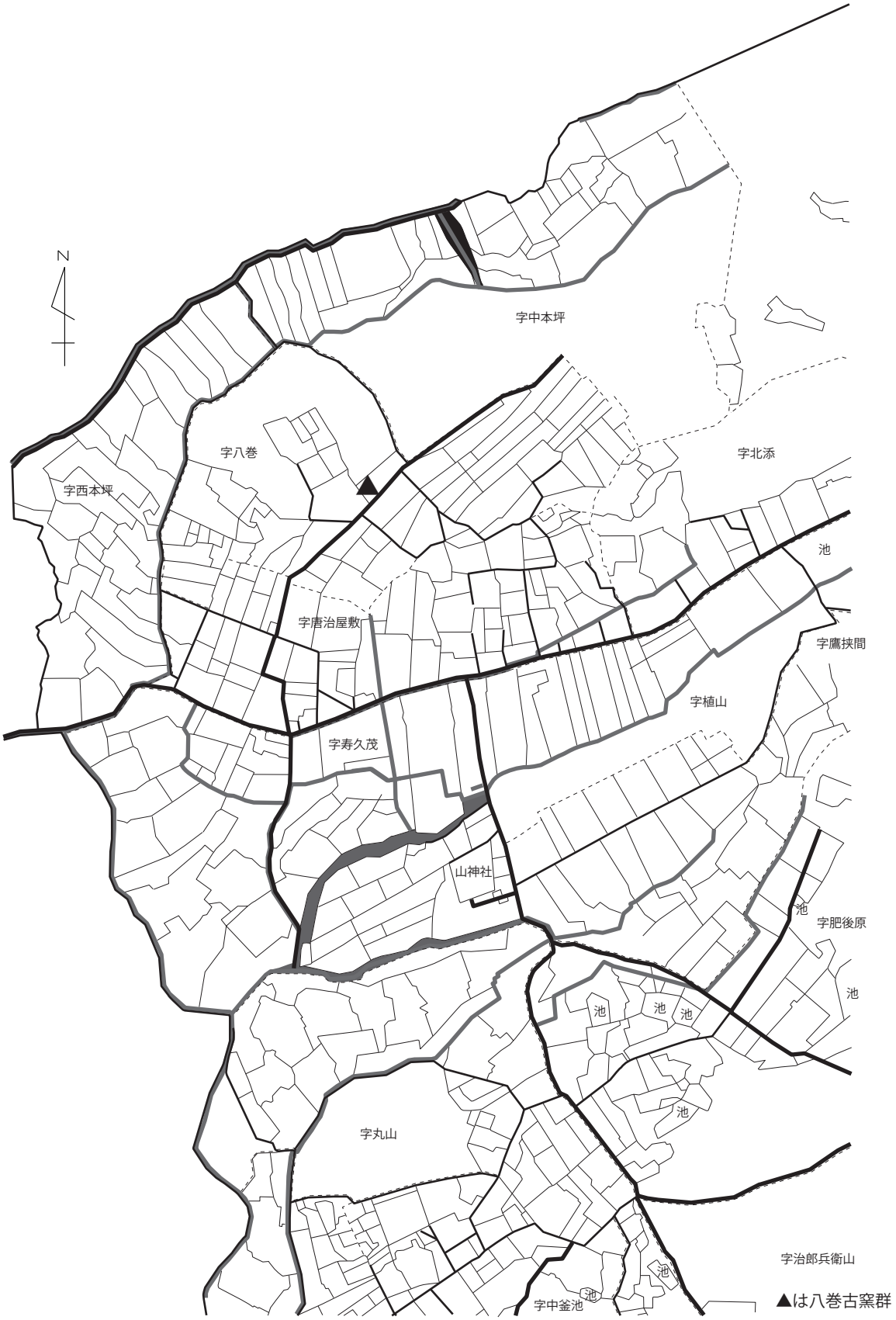


図 32　調査区周辺の地籍図

２　出土遺物の特色

次に製品の特色に注目する。付載で報告するカウントデータの集計結果に見る様に、本窯群は生産器種のほとんどが無釉の碗・小碗・小皿となっている（表 13）。各窯体の生産内容の差を概観すると、１号窯では碗・小碗に玉縁状口縁碗や輪花碗が含まれる状況や、壺類の存在が特徴的となる。これに続く２・３号窯では器種が（通常の）碗・小碗にほぼ集約され、壺類も不明瞭となる。一方、２号窯と仮称４号窯では碗・小碗（小皿）にほぼ限定された生産内容となる。

第３章で報告した碗・小碗・小皿の分類を知多窯の赤羽・中野編年に当てはめると、碗Ａ・小碗Ａが主に１ｂ型式期、碗Ｂ・小碗Ｂが２型式期、碗Ｃ・小皿Ｂが３型式期に該当する（注１）。これらの出土位置は、碗Ａ・小碗Ａが 001SU・003SU、碗Ｂ・小碗Ｂが 001SU・004SU・005SU、碗Ｃ・小皿Ｂが 006SU・007SU となっている。これを窯体と対応させると、１号窯が１ｂ型式期、３号窯が１ｂ型式期～２型式期、２号窯が２型式期、仮称４号窯が３型式期に帰属するものと考えられる。なお、前述した様に１次調査の所見では１号窯→３号窯→２号窯と報告されており、今回の調査成果と一致する。

ところで、中世陶器窯は分焔柱の有無に注目して、前者を瓷器系、後者を須恵器系と区分されている。周知の様に、当地域の中世陶器生産は瓷器系中世陶器に代表できる状況だが、生産内容により第Ⅰ類～第Ⅲ類に区分されている。第Ⅱ類は灰釉陶器の系譜を直接引く山茶碗生産に代表される一群で、第Ⅰ類が施釉陶器、第Ⅲ類が無釉の壺・甕・鉢類の生産となる（楢崎 1977）。

この分類に従えば、八巻古窯群は瓷器系中世陶器第Ⅱ類を生産した窯業遺跡となる。前述の様に操業期は１ｂ型式期～３型式期に及ぶが、生産内容は短頸壺や広口壺の有無で大きく二分できる。これらが存在する１～３号窯（１ｂ型式期～２型式期）と、碗・小碗（小皿）生産に集約された仮称４号窯（３型式期）で、両者の差は時期差ともなっている。なお、前者には輪花碗や玉縁状口縁碗も加わるが、12 世紀代の窯でしばしば生産される瓦類や三筋文系陶器などの特殊品は両者を通じて確認する事ができない。

一方、本書第５章で触れる様に、八巻古窯群では瓷器系中世陶器第 III 類に代表される甕の小片もわずかに含まれている（注２）。001SU 出土の押印文を持つ広口壺（316）も同様であろう。ただし、この状況は当該期の窯跡に散見できる状況となっており、八巻古窯群のみの特殊性とは言い難い。こうした微量の壺・甕類などに注意は必要であろうが、八巻古窯群は基本的には在地での消費を想定した生産を志向したものと推定できる。

注

注１　帰属時期は赤羽一郎氏・中野晴久氏・藤澤良祐氏のご教示による。年代観は（中野 2012）に従う。
注２　詳細は第５章に述べるが、１次調査の灰原として一括された資料中に散見できる。

参考・引用文献

中野晴久　2012「常滑窯」『愛知県史』別編 窯業３
楢崎彰一　1977「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集』３
藤沢良祐　2007「総論」『愛知県史』別編 窯業２

3　木葉状線刻・木葉圧痕について

（1）資料の観察

ここでは、第３章で報告した線刻（圧痕）資料を、八巻古窯群の特徴的な資料と理解して検討を加える（注１）。これらは端部が細い工具により非常に弱い筆圧で施された資料が多く、全形が不鮮明となる。形状は中央の線刻と斜方向に伸びる線刻の組み合わせを基本形とするが、時に葉縁も付加され、これが鋸歯状となる事例も含まれる。

形状は（391・１次 -161）などが基本形と考えられるが、中央の線刻と斜方向に伸びる線刻のみの場合も多い。ここではこうした線刻が木葉を表現していると想定し、木葉状線刻と仮称する（注２）。以下、木葉の細部名称を援用して観察する。

八巻古窯群出土の木葉状線刻資料は、側脈のみの線刻も含めると、今回の調査で 27 点、１次調査では 18 点が確認された。器種は碗に限定できる。線刻を内面に施すものを１類（379 ～ 391・394 下段・408・１次 -155 ～ 166）、外底部に施すものを２類（396 ～ 403・１次 -169 ～ 172）、内外面に施すものを３類（392・393 上段・１次 -167・１次 -168）と区分しておく。なお、１類は一葉を中央に刻むものがほとんどで、中心からはずれた（394）は例外的となる。また二葉を表現する事例も存在する（380・391・１次 -155・１次 -159）。

次に、木葉の圧痕も確認できる。今回の調査で３点（404 ～ 406）、１次調査では１点（１次 -173）で、全て２類となる。これらは厳密には線刻とは別に扱うべきかも知れないが、類例と仮定して木葉圧痕としてここで扱う。

図 33・34 は木葉状線刻・木葉圧痕資料を集成した。ここでは遺物番号の末尾に内底部の線刻を「a」、外底部を「b」、木葉圧痕（全て外底部）を「圧」と付した。これ以外に（図 42　１次 -128）は口縁部付近の補修部分にのみ木葉圧痕が確認できる。

なお、木葉状線刻・木葉圧痕資料は各地点から出土しているが、基本的には 001SU・003SU に伴う資料（１b 型式期～２型式期）と思われる。その他の出土位置は混入と理解したい。前述した様に、１・３号窯の製品となる。

木葉状線刻を詳細に観察すると、線刻はいずれも器面の乾燥がある程度進んだ段階に施され、細く浅いものが多い。直線はいずれも一息に刻まれるが、側脈が主脈を突き抜ける事例は存在せず、相応の熟練が想像できる。一方、ラインが薄く不鮮明である場合や、明瞭である場合も全形が描かれない事例も多い。また、２類には外底部の周囲にまで線刻が及ぶ例（400・１次 -172）もある。この場合、線刻は高台により覆われている事になる。こうした状況から、八巻古窯群の木葉状線刻は装飾とは別の理由で施された可能性が高い。ここでは木葉を線刻（もしくはスタンプ）する所作に意味を想定しておきたい。また、この考えにおいては木葉圧痕も木葉状線刻と同列に位置づける事ができる。

（2）近接地域の木葉状線刻

山茶碗の木葉状線刻は八巻古窯群以外でも散見する事ができる。資料を集成すると、名古屋市長廻間１号窯で碗が５点、壺が１点（七原他　1993）、瀬戸市長根５号窯で碗が１点（佐野　1998）、大府市別峅古窯群で碗が１点（池本他　2013）、田原市惣作 14 号窯で碗が１点（河合　1976）となる。岐阜県多治見市では各地に点在しており、大谷洞３号窯で碗が２点（田口他　2001）、大谷洞 44 号窯で碗が１点（田口他　2001）、明和 14 号窯で碗が１点（内山　1990a）、明和 22 号窯で鉢が１点（内山　1990b）となる。詳細は表５にまとめる。これらは時期的にはほぼ 12 世紀に納まるが、多治見市の資料は 13 世紀とやや下がる。

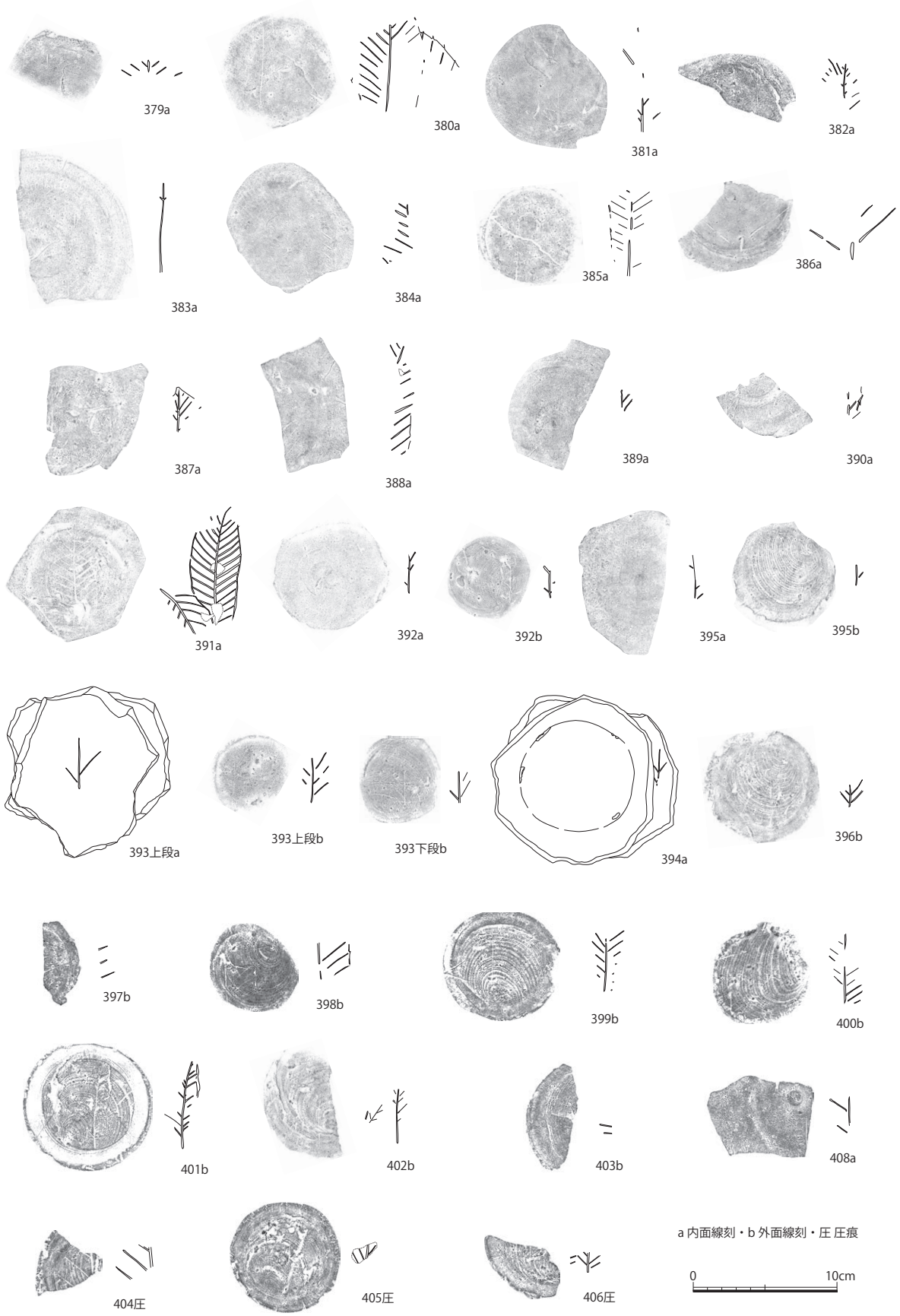


図 33　木葉状線刻・木葉圧痕１　１：４

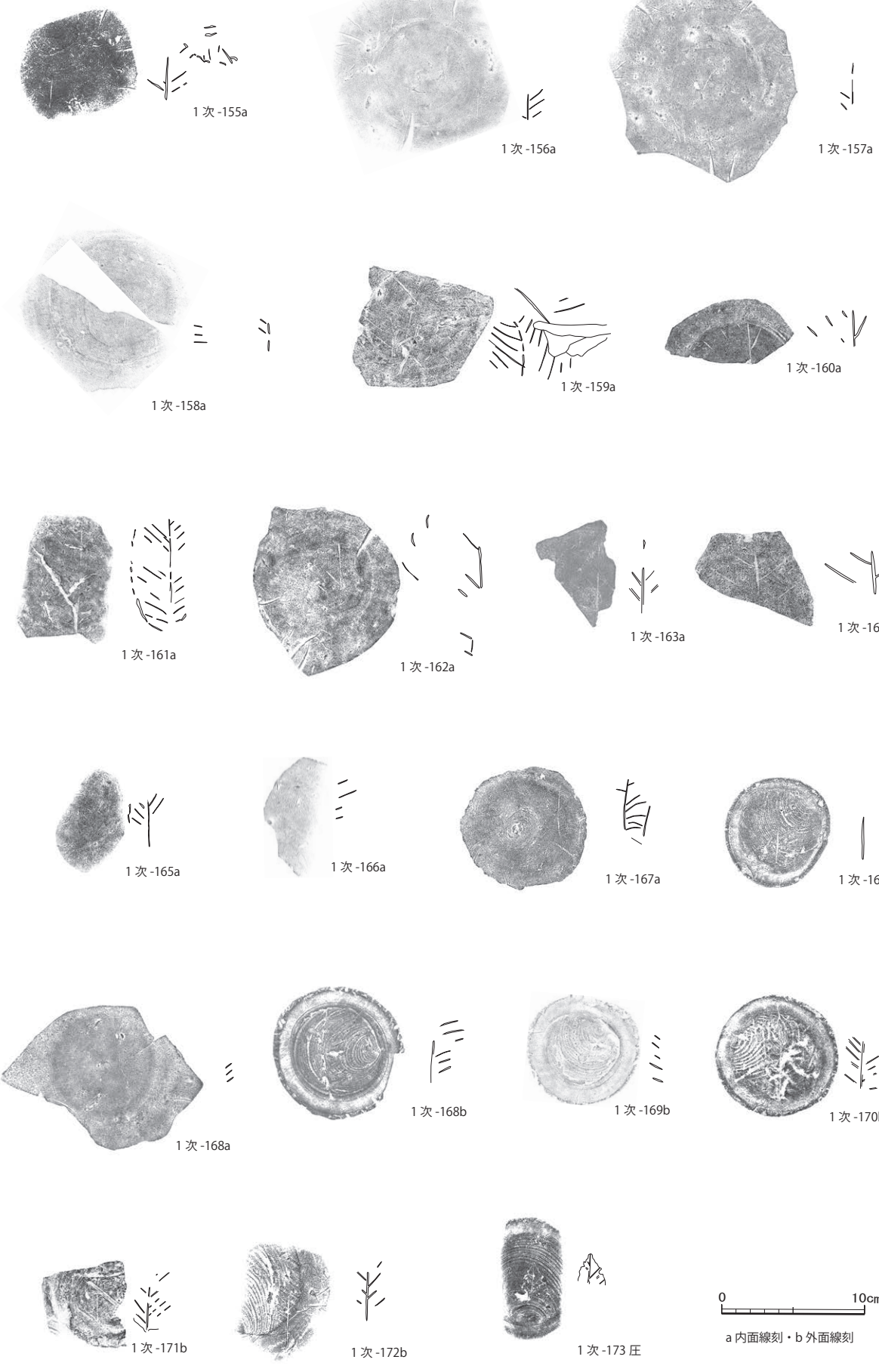


図 34　木葉状線刻・木葉圧痕２　１：４

これらの器種は基本的には碗で、全て１類となる。長廻間１号窯の壺と明和 22 号窯の鉢は例外的と言える。線刻のタッチは八巻古窯群資料と同様に細く浅いものが多い。

（３）まとめ

次に、八巻古窯群の資料には時期幅が想定される事に注目すると、八巻古窯群ではこうした碗が繰り返し生産されていた事にもなる。さらに、八巻古窯群に類似した木葉状線刻を施す碗が、ほぼ同時期の他地域の山茶碗窯にも存在する（図 35）ことは、類似の線刻が当地域において 12 世紀頃にある程度広域に存在していた可能性を示唆する。しかし、これらの性格については今後の検討課題となろう。

表５　周辺地域の木葉状線刻

番号	遺跡名（所在地）	器種	時期	特記事項	文献
A	長廻間１号窯（名古屋市）	碗	３型式	１類・輪花	七原他　1993
B	長廻間１号窯（名古屋市）	碗	３型式	１類・輪花	七原他　1993
C	長廻間１号窯（名古屋市）	碗	３型式	１類・輪花	七原他　1993
D	長廻間１号窯（名古屋市）	碗	３型式	１類・輪花	七原他　1993
E	長廻間１号窯（名古屋市）	碗	３型式	１類	七原他　1993
F	長廻間１号窯（名古屋市）	壺	３型式	外面肩部	七原他　1993
G	長根５号窯（瀬戸市）	碗	５型式	１類	佐野　1998
H	別岨古窯群（大府市）	碗	1b 型式期	１類	池本他　2013
I	惣作 14 号窯（田原市）	碗	2a 型式期	１類・二葉	河合　1976
J	大谷洞 44 号窯（多治見市）	碗	窯洞１～白土原１	１類	田口他　2001
K	大谷洞３号窯（多治見市）	碗	白土原１	１類	田口他　2001
L	大谷洞３号窯（多治見市）	碗	白土原１	１類	田口他　2001
M	明和 14 号窯（多治見市）	碗	明和１	１類・一葉以上、線刻は中心より外れる	山内　1990a
N	明和 22 号窯（多治見市）	鉢	明和１	外面	山内　1990a

注

注１　ここで検討する資料は、小碗外底部の『十』もしくは『×』(407) の２点を除く。なお、線刻か圧痕かの判断に苦しむ資料は、線刻は木葉を中央脈・側脈・葉縁のみで表現しているだろうと想定し、細脈の有無で判断している。また、溶着資料のうち、392 ～ 394 は実測後に剥離させて上段の外底部と下段の内底部中央を観察した。その結果､393 の上段の外底部で新たに線刻を確認できた。図 25 では出土時の状況を、図 33 は剥離後の上段・下段を表現している。

注２　ただし、第３章でも述べている様に、これらの資料を木葉圧痕とする意見もいただいている。

参考・引用文献

山内伸浩　1990a「明和 14 号窯」『明和古窯跡群発掘調査報告書』第二分冊 多治見市教育委員会
山内伸浩　1990b「明和 22 号窯」『明和古窯跡群発掘調査報告書』第二分冊 多治見市教育委員会
山内伸浩他　2001「浜井場３号窯」『北小木』第一分冊　多治見市教育委員会
田口昭二他　2001『北小木』第二分冊　多治見市教育委員会
河合　潔　1976「惣作 14 号窯」『惣作古窯址群』 田原町教育委員会
佐野　元　1998「菱野丘陵窯跡群（上）」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第６輯　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
七原恵史他　1993「長廻間古窯跡」『埋蔵文化財発掘調査報告　揚羽町古窯跡 NN302 号窯・NN304 号窯 長廻間古窯跡』埋蔵文化財発掘調査報告 24　名古屋市教育委員会
池本正明他　2013 『別岨古窯群』 愛知県埋蔵文化財センター

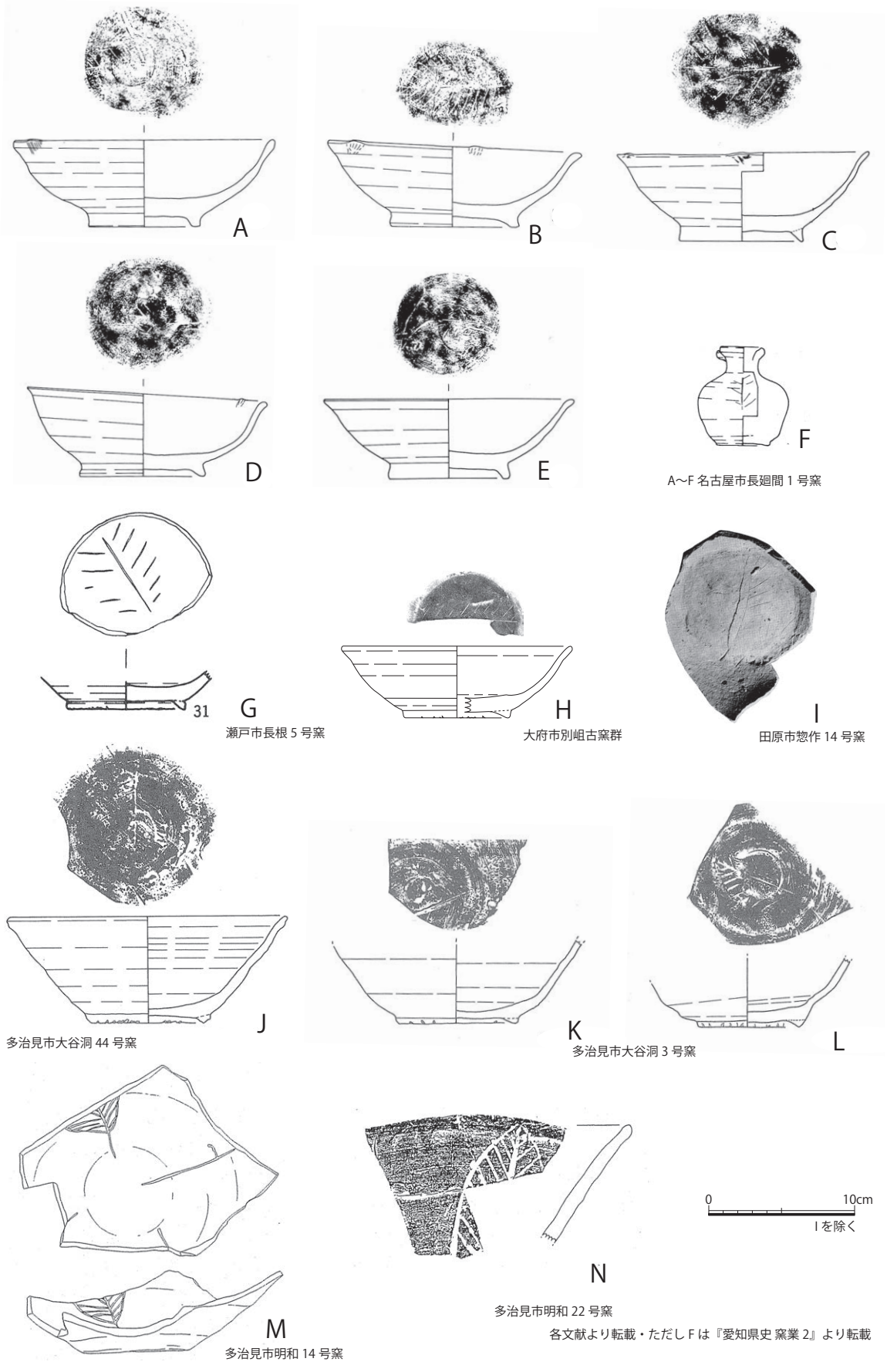


図 35　周辺地域の木葉状線刻　1：4

付　載　１次調査の概要

１　調査の概要

八巻古窯は、愛知用水建設工事に伴い、愛知県教育委員会と名古屋大学考古学研究室によって、昭和36（1961）年に窯体３基と前庭部及び灰原が発掘調査された。

第１次調査の報告書は愛知県教育委員会により昭和37（1962）年に、『愛知県知多古窯址群』として刊行され、その中の一古窯址として報告された。出土遺物は現在、愛知県陶磁美術館に所蔵される。

また『楯崎彰一（１）猿投・知多窯調査日誌　昭和34年３月～』によれば、「台風15号で松の大木が倒れ、その下から土器が発見されたのが、窯発見の端緒」と記載されている。

一部を抜粋する。「昭和36年７月26日（水）午後下草刈りから開始、小松が多く同時に小松をきる。７月28日（金）段上の凹みの上に、トレンチを入れる。凹みを鋏んで窯が２基並んでいる。この部分での出土品は茶碗のみである。」

７月30日（日）には１号窯と２号窯の前庭部と灰原部分18m×18mの範囲に、２mグリットが設定され、右から左にイからリ、上から下に１から９で、略図が描かれている。２号窯の窯体中心線がハのラインであることから、この略図をもとに作成したのが図48である。

第２次調査の調査区とほぼ重なり、第１次調査の掘り残した灰原下位部分が今回の第２次調査により出土した遺物ということになる。

２　遺　構

窯体３基は北側から２号窯、１号窯、３号窯である。

遺構に関する以下の文章は『愛知県史 窯業３ 中世・近世　常滑系』の「第２章　主要窯跡解説　41八巻古窯群」よりの転載である。

１号窯は、焼成室中央部から煙道部までが未調査のため詳細は不明だが、検出された部分の長さ5.6m、最大幅2.4mである。燃焼室は、長さ1.9m、焚口幅95㎝、最大幅1.5mである。床面傾斜は６度で下降する。分焔柱基部の平面形は直径60㎝の円形を呈し、天井まで残存する。通炎孔の幅は、左側が55㎝、右側が63㎝で、高さは左右ともに75㎝である。焼成室は、検出部分の長さ3.7mで、最大幅は中央部付近にある。床面上には、山茶碗焼成用の焼台と焼成室最前部には小碗焼成用の焼台が残存する。床面傾斜は、分焔柱から1.3m付近までは５度で、そこから29度で上昇する。焚口付近には長軸1.4mの土坑が確認されている。

２号窯は、全長7.6m、最大幅2.4mである。燃焼室は長さ1.6m、焚口幅1.0m、最大幅1.6m、である。床面傾斜は15度で下降する。分焔柱基部の平面形は、縦軸50㎝、横軸65㎝の隅丸方形を呈し、天井まで残存する。通炎孔の幅は左右とも60㎝で、高さは左側が60センチ、右側が50㎝である。焼成室は長さ5.2mで、最大幅は中央部付近にある。前半部右側の床面上には、山茶碗焼成用の焼台が残存する。床面傾斜は、分焔柱から1.7m付近までが５度で上昇し、そこから末端までが38度で急上昇する。煙道部は、長さ80㎝、最大幅70㎝で、床面傾斜は39度で急上昇する。焚口には、長軸1.2mの土坑が確認されている。

３号窯は、全長7.8m、最大幅2.4mである。焼成室は、長さ1.3m、焚口幅1.1m、最大幅1.7mである。

床面傾斜は 17 度で下降する。分焔柱基部の平面形は、縦軸 53㎝、横軸 60㎝の楕円形を呈する。通炎孔の幅は、左側が 65㎝、右側が 70㎝である。焼成室は、長さ 5.5m で、最大幅は前半部にある。床面傾斜は、分炎柱から 1.2m 付近までが 5 度で、中央部が 29 度で上昇し、後半部が 41 度で急上昇する。前半部の床面上には山茶碗焼成用の焼台が残存し、床面下には山茶碗が敷き詰められている。焼成室と煙道部の境界には、ダンパーが構築されている。煙道部は、長さ 1.0m、最大幅 1.1m である。床面傾斜は、前半部がほぼ水平であるのに対し、後半部は 34 度で急上昇する。焚口付近には 5 基以上の土坑が確認されており、焚口右後方にある土坑が最も大きく、長軸は 1.9m である。

灰原は、北東側の谷に向けて 16m×30m の範囲に広がっており、ブロック状のまとまりが確認されているが、どの窯体に伴う灰層かは明らかにされていない。

3　出土遺物

第 1 次調査出土遺物を再調査し、実測図、器種構成、出土総点数、総重量等を新たに作成した。

第 1 次調査出土遺物実測図のうち 1 より 77 までの実測図は『愛知県史 窯業 3 中世・近世　常滑系』「第 2 章　主要窯跡解説　41 八巻古窯群」よりの転載で遺物番号も県史と同じである。但し 71 と 72 は欠番とした。71 は底部と接合し 152 となり、72 は整理の混入遺物である。

1 号窯出土遺物：遺物番号 1 から 12。山茶碗（1 ～ 6）、小碗（7 ～ 12）。

2 号窯出土遺物：遺物番号 13 から 25。山茶碗（13 ～ 18）、小碗（19 ～ 22）、小皿（23 ～ 25）。

3 号窯出土遺物：　遺物番号 26 から 39。山茶碗（26 ～ 32）、玉縁碗（33）、小碗（34 ～ 39）、

1 ～ 3 号窯灰原出土遺物：　遺物番号 40 から 77。山茶碗（40 ～ 44）、輪花碗（45・46）、玉縁碗（47・48）、片口山茶碗（49）、小碗（50 ～ 52）、小皿（53・54）、片口鉢 I 類（55 ～ 61）、広口瓶（62・63）、短頸壺（64 ～ 70）、水滴（73）、碗（74）、蓋（75）、陶錘（76）、鍋（77）、である。

新たに実測図を作成したのは、1 号窯出土（78 ～ 84）が 7 点と 1 号窯から 3 号窯の灰原出土（85 ～ 154）が 70 点、他に砥石（146）1 点と伊勢型鍋（147）1 点がある。玉縁口縁の鉢・碗、沈線が巡る山茶碗、口縁に貼付け隆帯のある山茶碗、短頸壺等である。

1 号窯出土遺物（図 40–78 ～ 84）

玉縁の片口鉢（78）は玉縁幅が 7 ㎜を測る。玉縁小碗（79・80）と玉縁碗（81 ～ 84）の玉縁幅が 3 ㎜の狭いものと 5 ～ 6 ㎜の広いものが見られた。玉縁幅が 3 ㎜と狭いものは、小碗（80）と外反する口縁の碗（82）が、玉縁幅が 5 ㎜の小碗（79）と 8 ㎜の幅広の碗（83・84）がある。

1 号から 3 号窯灰原出土遺物（図 40 ～ 45–85 ～ 154）

内側底部が凹み、内側底部と立ち上がり部の境が段になり、製作方法が窺える山茶碗（85）があり藁状の痕が底部に見られる。口径 16㎝、底径 8 ㎝、器高 5.9㎝を測る。

玉縁碗（86 ～ 100）で、口縁を肥厚し玉縁幅が 3 ～ 10㎜と狭いものから広いものまで見られた。最も狭いものは 3 ㎜（98）を測るが玉縁というより灰釉碗の口縁に近い形状である。4 ㎜（99）、5 ㎜（96、97）、6 ㎜（95、100）、7 ㎜（92 ～ 94）、8 ㎜（86 ～ 90）、10㎜（91）と 1 ㎜ごとに見られ、8 ㎜幅のものが 5 例で一番多い。小皿に玉縁口縁の一部が付着した（100）例もある。

輪花碗（101 ～ 103）は篦で切り込んだもの（101）と指によるもの（102・103）とがあり、指によるものは受け口状の口縁となる。

中皿（104・105）としたが口縁内側に段がある。

内外面に沈線が巡る碗　山茶碗（106 ～ 114）と小碗（117・118）がある。

内側面に太い沈線と細い沈線が巡る。太い３㎜～４㎜幅の四条の沈線が巡り（106・107）、内面の降灰が厚いもの（107）もある。内底部に近い部位に五条の細い１㎜～２㎜幅の沈線が巡るもの（108）もある。底部見込み部分に太い３㎜～４㎜幅の沈線が二条巡るもの（109、110）と細い２㎜幅の一条の沈線が巡るもの（111）がある。底部裏面の高台内にも太い３㎜～４㎜幅の一条の沈線が巡るもの（112～114）もある。高台内に糸切り後に一条の沈線（115）と藁状の圧痕（116）が見られるものもある。

無台の小皿（119～125）でいずれも底部に糸切り痕が見られる。

口縁部貼付け隆帯の山茶碗（126～140）口縁部の内外に１㎝から２㎝幅の紐状粘土を縦に貼付けた隆帯のある山茶碗で、口唇部を包むように貼付けられ、貼付けられた口縁部が僅かに盛り上がることから、当初は輪花碗の一種かと想定したが、ほぼ完形品の山茶碗（126～128）から輪花碗ではないことがわかった。そこで改めてこれらの破片を含めてすべてについてＸ線撮影を行ったところ、貼付け隆帯の下に、口縁の罅割れが映し出された、この貼付け隆帯はひび割れを埋めるため貼付けられた事が判明した。口縁のひび割れは轆轤整形後乾燥時に生じたものと思われる。口縁のひび割れを補修するために、粘土を紐状にして、ひび割れの大きさに合わせて貼付けたようである。

山茶碗総点数 73,273 点のなかの僅か 15 点（0.02%）であった。なお二次調査では、山茶碗総点数 60,206 点のなかで 16 点（0.02%）出土している。

八巻古窯群として山茶碗総点数 122,994 点のなかで口縁部貼付け隆帯の山茶碗は 31 点（0.02%）の出土である。

貼付け隆帯には、丸い板状（133）や細い板状（126・130・138）になったものが見られ、粘土紐を外側から内側へ、縦に入ったひびに合わせて貼付け、ほとんどはそのままの状態で調整痕はないが、内面側に丁寧な調整（126）の見られるものがある。

器形全体を観察できる山茶碗が３例ある。口縁部貼付け隆帯が１ヶ所の山茶碗（126･127）と、２ヶ所の山茶碗（128）について仔細に観察する。

126 は、推定口縁 15.8㎝、底径 7.2㎝、器高 4.7㎝を測る貼付け隆帯１ヶ所の山茶碗で、貼付け隆帯の最大幅（口縁部）1.5㎝、下内側 3㎝、外側 3.4㎝を測る。口縁からの縦の長さは外側の方が長く下端が細く斜めになっている。貼付け隆帯には内面外面ともに丁寧な調整が施され、内面では縦位隆帯の断面が裾広がりの三角形状となる。また胴部割れ口に、木葉痕の幅２㎝、最大厚さ３㎜を測る粘土塊が混入していた。見込み部分に重ね焼きの高台痕が見られた。

127 は、口縁 17㎝、底径 8.6㎝、器高 5.6㎝を測る貼付け隆帯１ヶ所の山茶碗で、貼付け隆帯の最大幅（口縁部）1.8㎝、下内側 2.5㎝、外側 1.4㎝を測る。口縁からの縦の長さは外側の方が短い。見込み部分に丁寧な撫で痕が見られた。

128 は、輪花碗の一種と想定していた破片を見直すきっかけとなった山茶碗で、口径 17㎝、底径 8.3㎝、器高 5.5㎝を測り、相対に２ヶ所ではなく、少しずれた位置に貼付け隆帯が２ヶ所ある。貼付け隆帯１（図左）は最大幅（口縁部）1.2㎝、下内側 2㎝、外側 1.7㎝を測る。木葉痕の貼付け隆帯２（図右）は、最大幅（口縁部）1.7㎝、下内側 3.1㎝、外側 1.9㎝を測る。見込み部分には指痕が見られた。

刺突のある山茶碗（143）は、内底部より立ち上がる部分に図右上には葦かはっきりしないが茎を三本ひきずったかのような痕跡、図右中には径４㎜、奥行き２㎝１㎜の刺突が、図右下には楕円最大９㎜の管の痕が見られた。

指痕のある山茶碗（144）は、底部片の内側に６ヶ所の指痕が見られる。

穿孔のある山茶碗（145）口縁片は、外側から穿孔し内面の孔の回りには隆起が見られた。

短頸壺（148～154）は肩に丸みがあり（148～151）、器厚が薄いもの（148～150）と厚いもの（151）

がある。長胴の短頸壺（152・153）で県史図 11 の 71 に底部が接合したもの（152）で口径 13.6㎝、底径 13.4㎝、器高 38.2㎝を測るが、口縁のひずみが大きく、歪んだ口縁の低い部分も図示した。焼成中に破損したようで横倒しになり降灰が内面に見られた。

短頸壺の底部（153・154）で県史図 10 の 68 の胴部と接合した（154）が、歪みが大きく変形し接合図の実測が困難であったため、底部のみ（154）とした。

4　出土遺物総量

第 1 次調査出土遺物の総点数（表 6 ）は、73,226 点で、総重量は、2,864 トン 648g を測る。

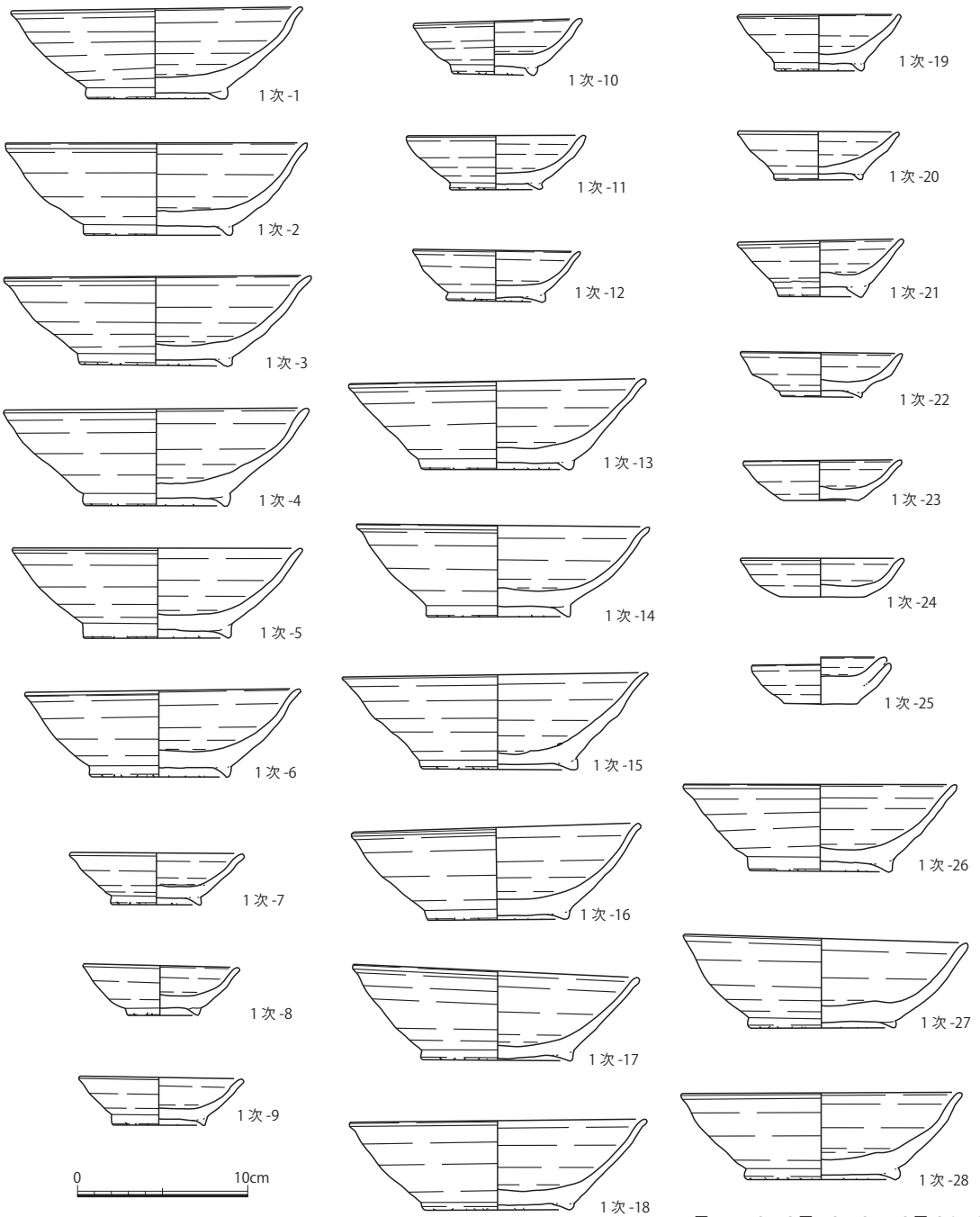
山茶碗が全体の 9 割 66,805 点（91%）を占め、小碗が 5,544 点（7%）である。山茶碗、小碗以外の器種は 1 % 以下の数値で、小皿が 575 点（0.7%）、短頸壺が 122 点（0.16%）、鉢 81 点（が 0.11%）で、器種構成と総点数から本窯は山茶碗を主体として生産した山茶碗焼成窯であることを再確認した。

なお 1 号窯（表 7 ）、2 号窯（表 8 ）、3 号窯（表 9 ）、灰原（表 10）について、それぞれ表とグラフを作成した。

山茶碗、小碗、小皿の個体数

出土点数の多い山茶碗、小碗、小皿の、三器種について、口縁と底部の 1 /12 の残存率から個体数を推定（表 11）した。山茶碗が口縁部では 3,420 個と底部では 8,127 個、小碗が口縁部では 593 個と底部では 2,596 個、小皿が口縁部では 40 個と底部では 93 個である。口縁部と底部の残存を比較すると、底部の残存が目立ち、口縁に対し、山茶碗では約 2 倍、小碗では約 4 倍、小皿では約 2 倍であつた。小碗の約 4 倍の数値は、小碗の口縁と山茶碗の口縁の判別が小片 1 /12 になるほど困難で、山茶碗の口縁に数えた可能性があり、小碗の口縁の点数が少なくなった可能性を比定できない。

（小澤一弘）



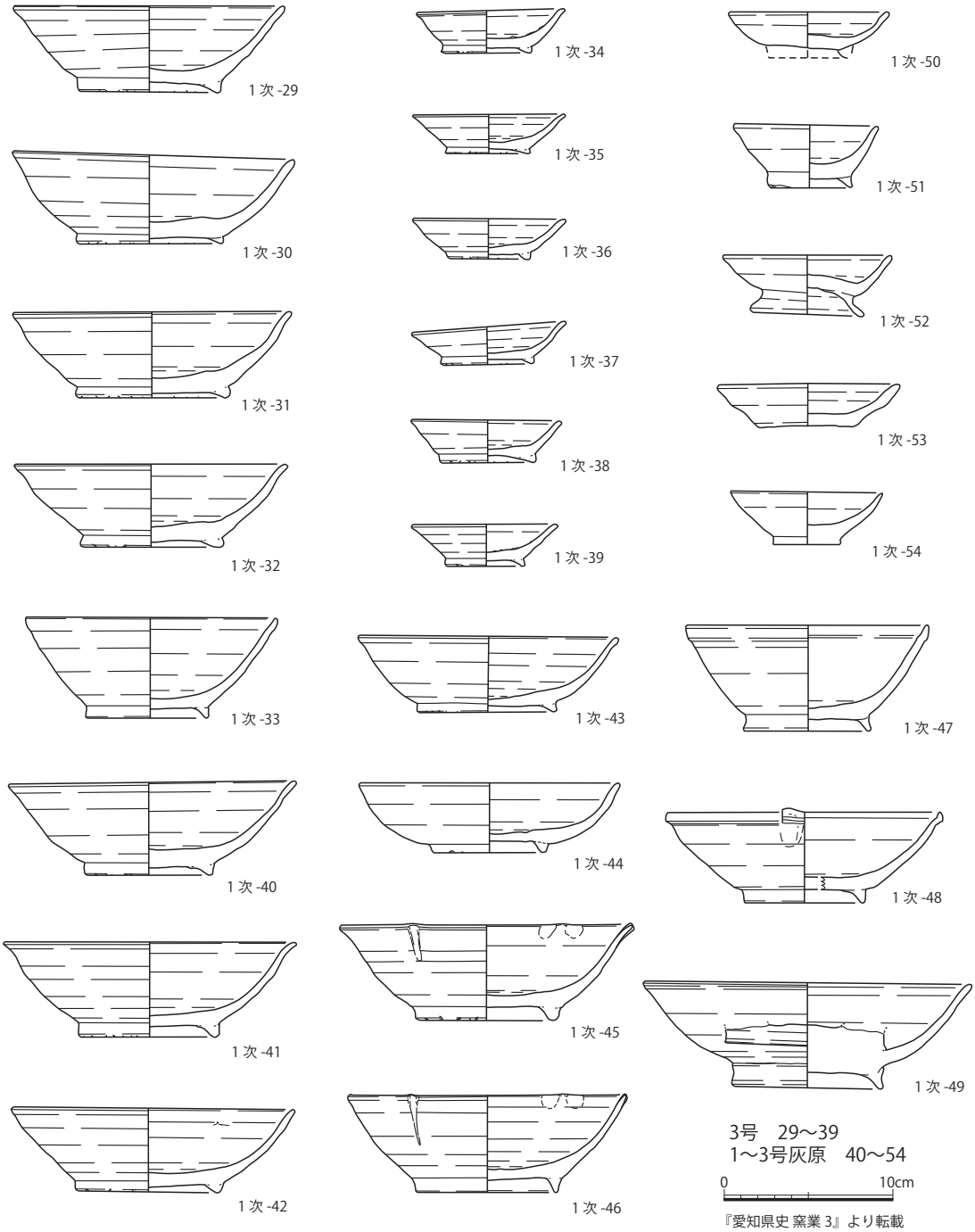
1号 1～12　2号 13～25　3号 26～28

『愛知県史 窯業 3』より転載

番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
1	山茶碗	16.2	—	8.2	—	5.3	県史
2	山茶碗	16.6	—	8.6	—	5.5	県史
3	山茶碗	18.2	—	8.9	—	5.3	県史
4	山茶碗	18.0	—	8.4	—	5.7	県史
5	山茶碗	17.2	—	8.6	—	5.4	県史
6	山茶碗	16.2	—	8.0	—	5.1	県史
7	小碗	10.3	—	5.2	—	3.1	県史
8	小碗	9.2	—	4.2	—	3.0	県史
9	小碗	9.6	—	5.4	—	2.9	県史
10	小碗	10.0	—	4.6	—	3.2	県史
11	小碗	10.6	—	5.2	—	3.3	県史
12	小碗	9.8	—	5.6	—	3.1	県史
13	山茶碗	17.5	—	8.7	—	5.3	県史
14	山茶碗	17.2	—	8.2	—	5.5	県史

番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
15	山茶碗	18.0	—	8.8	—	5.7	県史
16	山茶碗	16.8	—	8.2	—	5.5	県史
17	山茶碗	16.8	—	8.6	—	5.3	県史
18	山茶碗	17.4	—	8.5	—	5.3	県史
19	小碗	9.6	—	5.0	—	3.4	県史
20	小碗	9.3	—	5.0	—	2.9	県史
21	小碗	11.6	—	4.8	—	3.4	県史
22	小碗	9.5	—	3.6	—	2.6	県史
23	小碗	9.2	—	4.4	—	2.4	県史
24	小碗	9.5	—	5.0	—	2.4	県史
25	小碗	8.1	—	4.2	—	2.4	県史
26	山茶碗	16.0	—	8.3	—	5.2	県史
27	山茶碗	15.7	—	8.5	—	5.3	県史
28	山茶碗	15.4	—	8.8	—	5.1	県史

図 36　1～3号窯出土遺物実測図 1　1：4

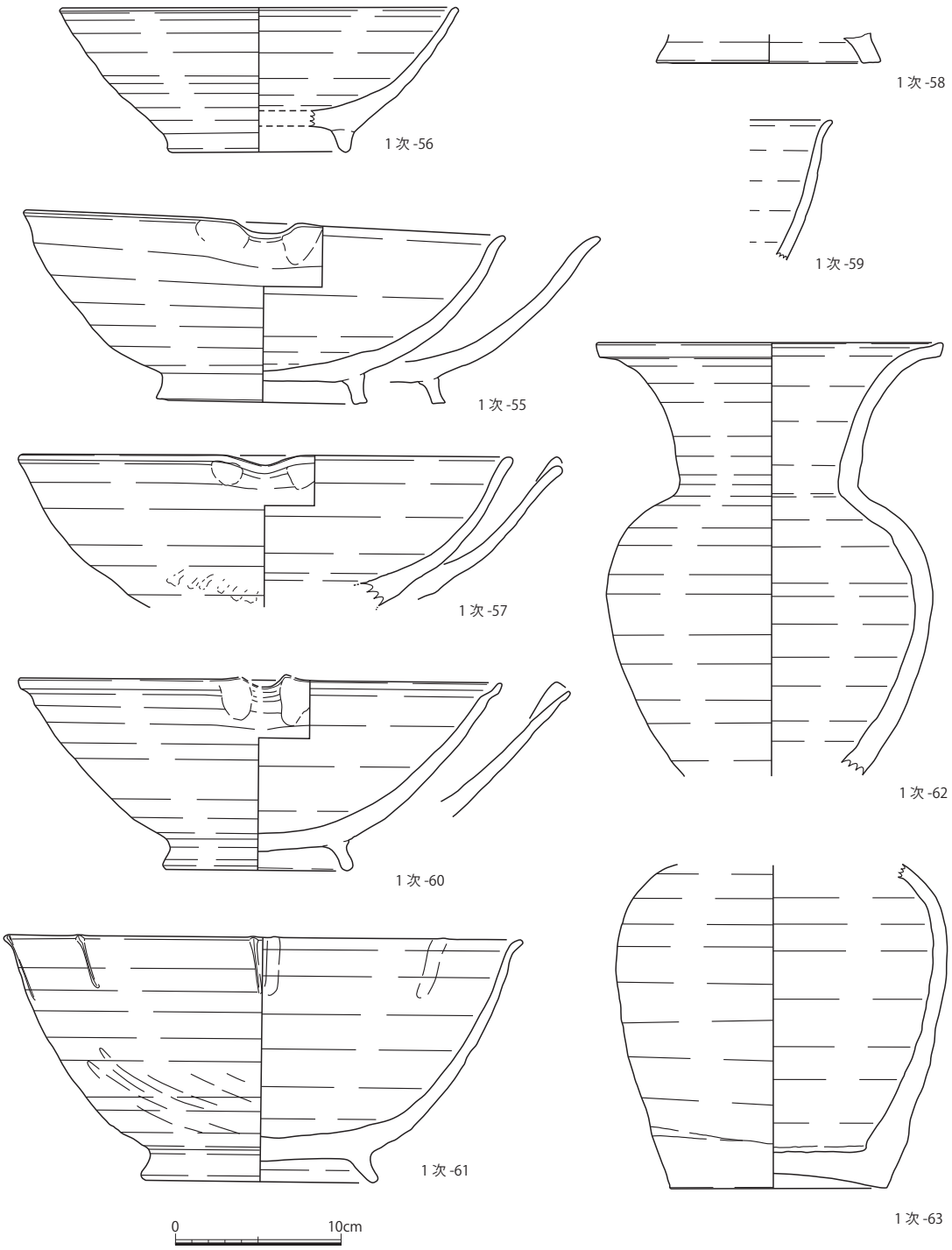


『愛知県史 窯業 3』より転載

番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
29	山茶碗	15.9	—	8.1	—	5.0	県史
30	山茶碗	16.8	—	8.5	—	5.3	県史
31	山茶碗	16.4	—	8.8	—	5.2	県史
32	山茶碗	16.0	—	8.2	—	5.0	県史
33	山茶碗	14.7	—	7.0	—	6.0	県史
34	小碗	8.7	—	5.0	—	2.5	県史
35	小碗	9.0	—	4.9	—	2.4	県史
36	小碗	8.9	—	4.5	—	2.4	県史
37	小碗	8.0	—	5.1	—	2.3	県史
38	小碗	8.9	—	5.5	—	2.5	県史
39	小碗	8.4	—	4.4	—	2.5	県史
40	山茶碗	16.9	—	7.7	—	5.5	県史
41	山茶碗	17.2	—	8.0	—	5.7	県史

	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
42	山茶碗	16.6	—	8.3	—	5.0	県史
43	山茶碗	15.2	—	8.0	—	4.6	県史
44	山茶碗	15.4	—	6.6	—	4.2	県史
45	山茶碗	17.2	—	7.7	—	5.7	県史
46	山茶碗	16.3	—	8.2	—	5.8	県史
47	山茶碗	14.3	—	7.4	—	6.4	県史
48	山茶碗	16.0	—	7.0	—	5.4	県史
49	山茶碗	19.1	—	8.6	—	5.4	県史
50	小碗	9.4	—	—	—	2.7	県史
51	小碗	8.3	—	4.6	—	3.7	県史
52	小碗	9.7	—	6.4	—	3.6	県史
53	小碗	10.7	—	5.5	—	2.6	県史
54	小碗	9.0	—	3.0	—	3.1	県史

図 37　3号窯・1～3号窯灰原出土遺物実測図2　1：4



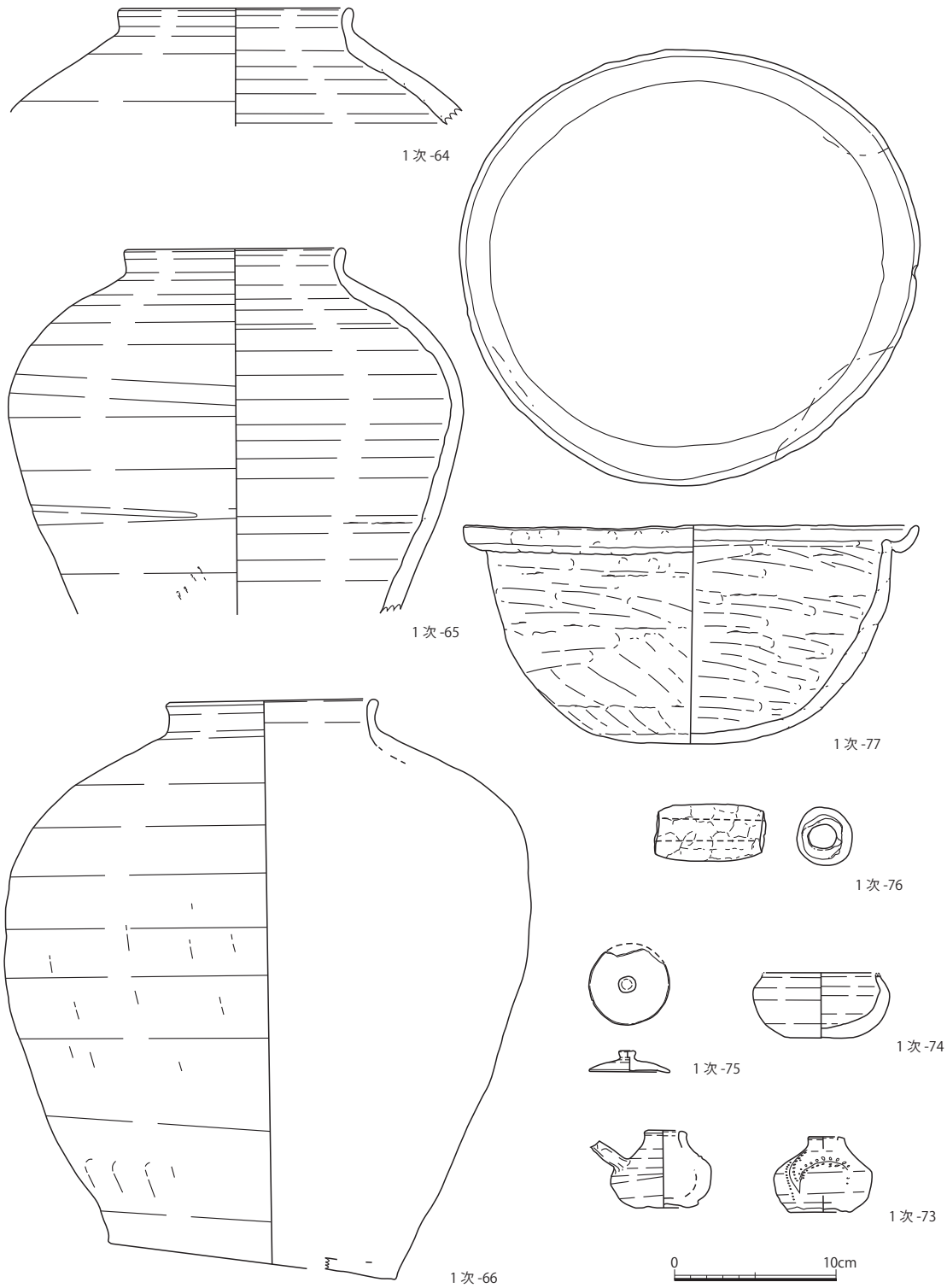
1～3号灰原　55～63

『愛知県史 窯業 3』より転載

番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
55	片口鉢	28.9	ー	11.7	ー	10.9	県史
56	片口鉢	23.7	ー	10.6	ー	8.8	県史
57	片口鉢	29.4	ー	ー	ー	9.2	県史
58	片口鉢	ー	ー	13.5	ー	1.7	県史
59	片口鉢	ー	ー	ー	ー	ー	県史

番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
60	片口鉢	29.2	ー	11.0	ー	11.5	県史
61	片口鉢(輪花)	31.0	ー	13.8	ー	14.8	県史
62	広口壺	20.9	ー		ー	26.2	県史
63	広口壺	ー	ー	13.1	ー	19.6	県史

図 38　1～3 号窯灰原出土遺物実測図 3　1：4



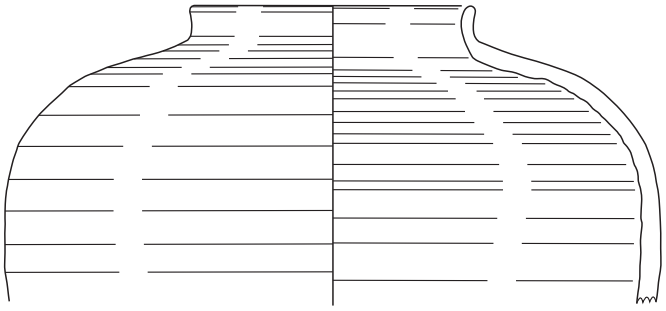
1～3号灰原　64～66・73～77

『愛知県史 窯業 3』より転載

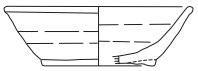
番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
64	短頸壺	14.2	―	―	―	5.4	県史
65	短頸壺	13.4	―	―	―	22.6	県史
66	短頸壺	12.7	―	17.9	―	34.9	県史
73	水滴	2.3	―	4.1	―	4.9	県史

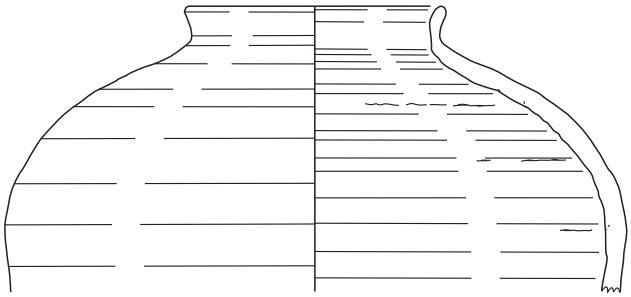
番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
74	碗	7.1	―	4.5	―	4.1	県史
75	蓋	5.0	―	―	―	1.4	県史
76	陶錘	最大幅3.6	―	最大長6.7	―	内径1.7	県史
77	鍋	28.1	―	6.5	―	13.6	県史

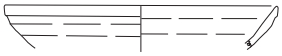
図 39　1～3号窯灰原・1号窯出土遺物実測図4　1：4

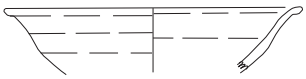

1次-67

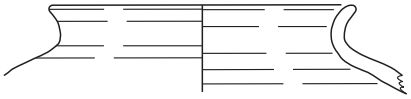
1次-79

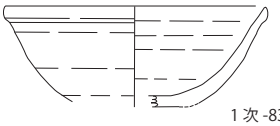

1次-80

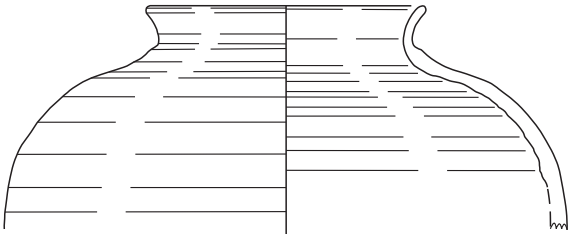

1次-68

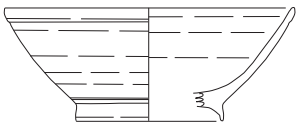

1次-81

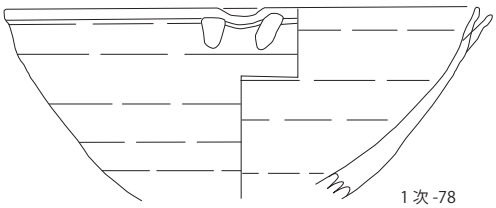

1次-82

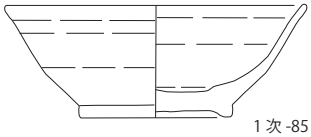

1次-69


1次-83


1次-70


1次-84


1次-78


1次-85

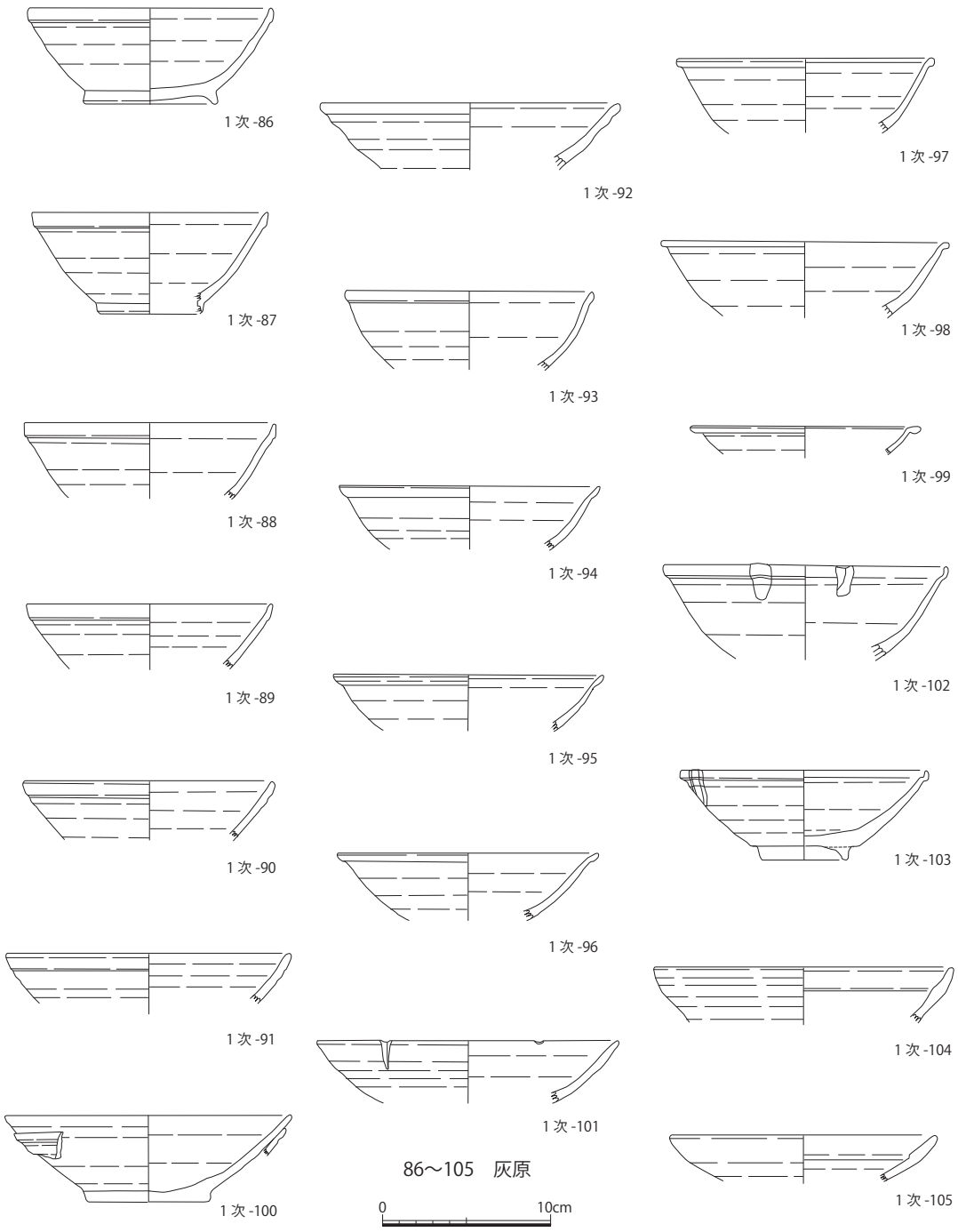
64～66　1～3号灰原
73・77　欠番
78～84　1号
85　灰原

67～70『愛知県史 窯業 3』より転載

番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
67	短頸壺	14.8	―	―	―	15.8	県史
68	短頸壺	13.8	―	―	―	15.1	県史
69	短頸壺	15.4	―	―	―	4.6	県史
70	短頸壺	14.5	―	―	―	12.1	県史
78	片口鉢	25.0	1/12	―	―	10.1	1号窯A154
79	玉縁小碗	9.6	1/12	―	―	2.5	1号窯A157

番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
80	玉縁小碗	9.6	4/12	5.8	3/12	3.1	1号窯木箱7
81	玉縁碗	14.4	1/12	―	―	2.3	1号窯A149
82	玉縁碗	15.8	1/12	―	―	3.4	1号窯A139
83	玉縁碗	13.8	1/12	6.2	―	5.3	1号窯A196
84	玉縁碗	15.2	2/12	7.8	1/12	6.0	1号窯A154
85	山茶碗	16.0	5/12	8.0	12/12	5.9	紙箱

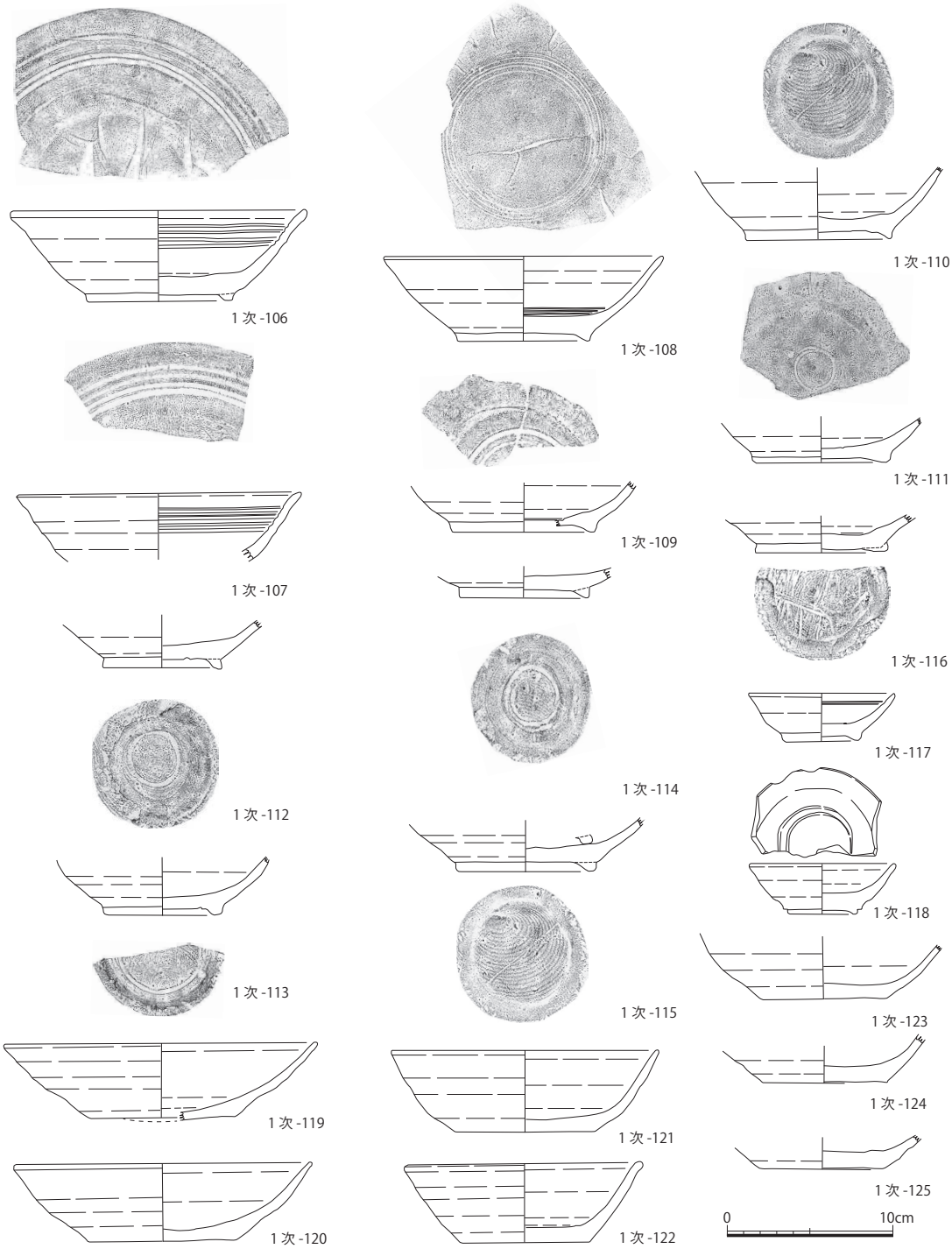
図 40　1～3号窯・1号窯灰原出土遺物実測図5　1：4



番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
86	玉縁碗	14.4	2/12	7.8	5/12	5.7	木箱94
87	玉縁碗	14.0	ー	6.0	ー	6.0	A228
88	玉縁碗	14.8	1/12	ー	ー	4.5	木箱66
89	玉縁碗	14.6	1/12	ー	ー	3.9	木箱94
90	玉縁碗	14.6	4/12	ー	ー	3.5	A261+228
91	玉縁碗	17.0	1/12	ー	ー	3.0	A295
92	玉縁碗	18.0	2/12	ー	ー	4.0	A301
93	玉縁碗	14.6	1/12	ー	ー	4.7	A226
94	玉縁碗	15.6	2/12	ー	ー	3.8	木箱18
95	玉縁碗	16.2	1/12	ー	ー	3.3	A330

番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
96	玉縁碗	15.4	2/12	ー	ー	4.0	A270
97	玉縁碗	15.2	1/12	ー	ー	4.4	A280
98	玉縁碗	17.0	2/12	ー	ー	4.5	A238
99	玉縁碗	13.6	1/12	ー	ー	1.7	A310
100	玉縁碗	18.0(17.0)	2/12(5/12)	(7.0)	(12/12)	(5.1)	木箱69
101	輪花碗	19.2	1/12	ー	ー	3.8	A242
102	輪花碗	16.8	2/12	ー	ー	5.6	木箱69
103	輪花碗	14.6	3/12	5.0	5/12	5.3	B102
104	中皿	18.0	1/12	ー	ー	3.3	A319
105	中皿	15.8	3/12	ー	ー	2.8	木箱92

図41　1～3号窯灰原出土遺物実測図6　1：4

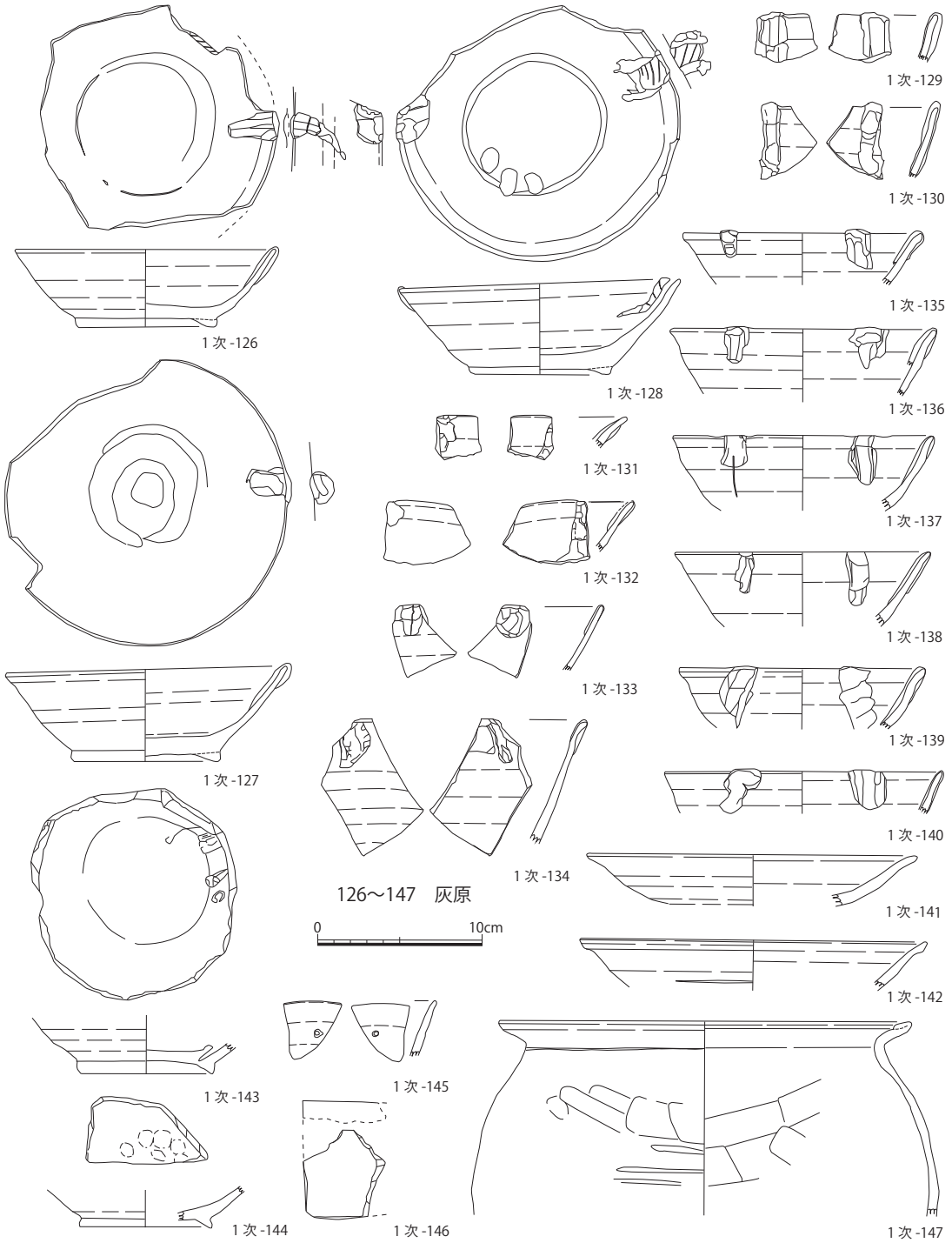


106～125　灰原

番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
106	山茶碗(四条)	18.0	5/12	8.6	7/12	5.5	紙箱
107	山茶碗(四条)	17.0	3/12	ー	ー	4.1	A205
108	山茶碗(五条)	16.5	5/12	8.0	12/12	5.1	紙箱
109	山茶碗(二条)	ー	ー	8.6	4/12	3.0	A220
110	山茶碗(二条)	ー	ー	8.8	12/12	4.3	木箱62
111	山茶碗(一条)	ー	ー	8.4	6/12	2.7	A297
112	山茶碗(一条)	ー	ー	7.2	12/12	3.0	A331
113	山茶碗(裏一条)	ー	ー	7.2	6/12	3.5	A313
114	山茶碗(裏一条)	ー	ー	7.8	ー	1.9	木箱93
115	山茶碗	ー	ー	8.1	12/12	3.3	木箱84

番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
116	山茶碗	ー	ー	7.8	8/2	2.2	木箱81
117	小碗(二条)	8.8	6/12	4.4	12/12	2.9	木箱20
118	小碗(一条)	8.8	3/12	4.0	6/12	3.0	A377
119	小皿	18.8	1/12	8.4	5/12	4.5	木箱102
120	小皿	8.0	2/12	8.8	6/12	4.7	A156
121	小皿	16.2	2/12	8.2	4/12	4.9	A236
122	小皿	14.5	2/12	7.8	4/12	4.8	A302
123	小皿	ー	ー	7.4	12/12	4.0	A155
124	小皿	ー	ー	7.5	12/12	2.9	A272
125	小皿	ー	ー	7.6	12/12	2.1	A272

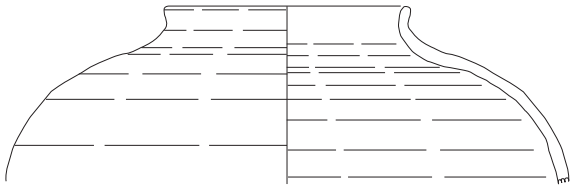
図 42　1～3号窯灰原出土遺物実測図7　1：4



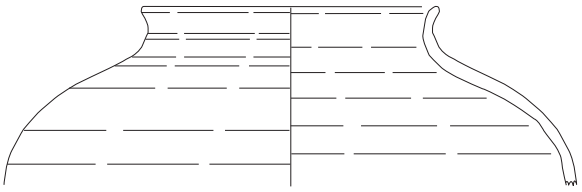
番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
126	山茶碗(貼付)	15.8	2/12	7.2	12/12	4.7	木箱30
127	山茶碗(貼付)	17.0	8/12	8.6	12/12	5.6	木箱47
128	山茶碗(貼付)	17.0	7/12	8.3	12/12	5.5	木箱32
129	山茶碗(貼付)	ー	1/12	ー	ー	3.0	A127
130	山茶碗(貼付)	ー	1/12	ー	ー	4.7	A127
131	山茶碗(貼付)	16.2	1/12	ー	ー	1.9	A2292
132	山茶碗(貼付)	19.0	1/12	ー	ー	3.0	A295
133	山茶碗(貼付)	ー	1/12	ー	ー	4.4	木箱84
134	山茶碗(貼付)	ー	1/12	ー	ー	7.5	A111
135	山茶碗(貼付)	14.4	2/12	ー	ー	3.1	木箱82
136	山茶碗(貼付)	15.8	2/12	ー	ー	4.0	A241

番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
137	山茶碗(貼付)	15.6	1/12	ー	ー	4.5	A133
138	山茶碗(貼付)	15.4	2/12	ー	ー	4.5	木箱48
139	山茶碗(貼付)	15.0	1/12	ー	ー	3.7	A211
140	山茶碗(貼付)	17.0	1/12	ー	ー	2.5	A118
141	中皿	18.0	1/12	ー	ー	3.4	A327
142	中皿	21.0	1/12	ー	ー	3.0	A310
143	山茶碗(刺突)	ー	ー	8.0	12/12	3.5	A344
144	山茶碗(指痕)	ー	ー	7.8	4/12	2.6	A352
145	山茶碗(穿孔)	ー	1/12	ー	ー	3.9	A163
146	砥石	最大長5.3	ー	最大幅5.0	ー	ー	2号窯A10
147	伊勢型鍋	25.0	ー	ー	ー	11.8	木箱

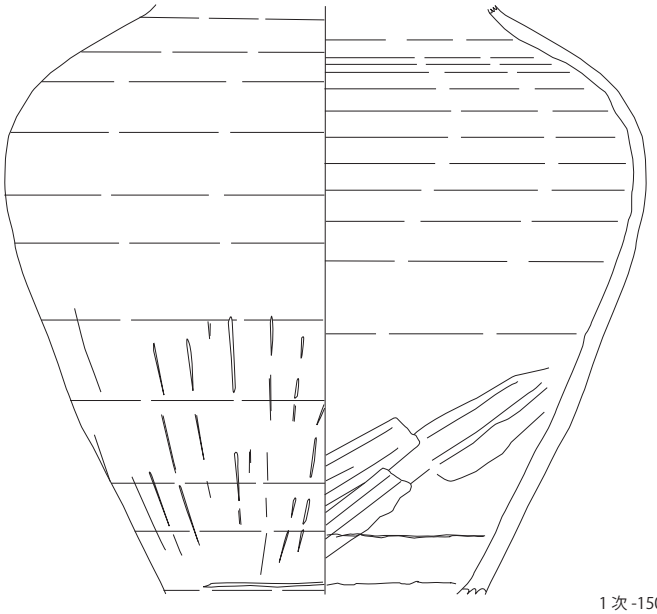
図 43　1～3号窯灰原出土遺物実測図8　1：4



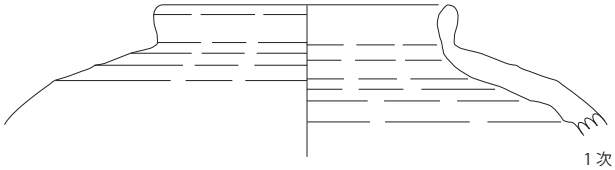
1 次 -148



1 次 -149



1 次 -150



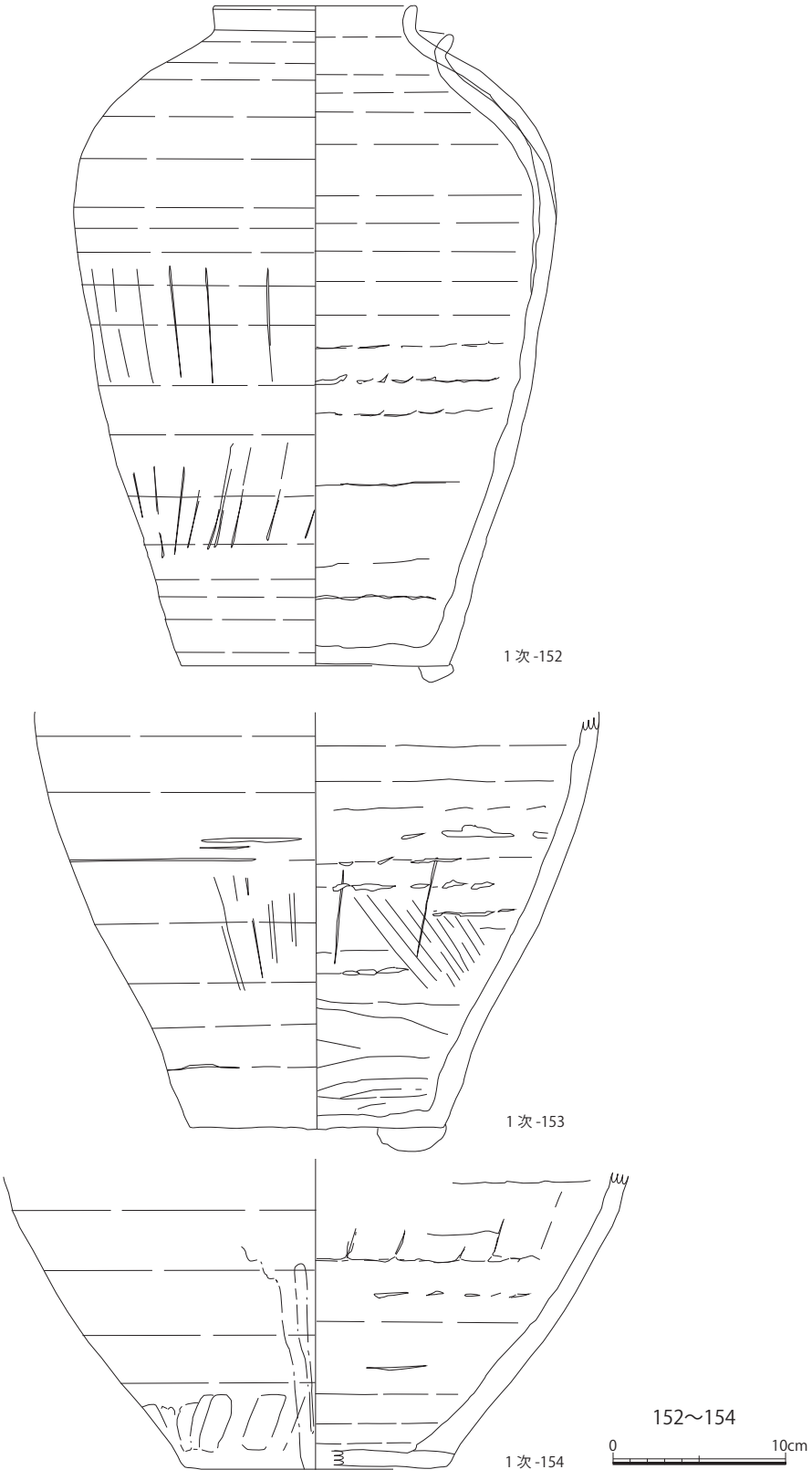
1 次 -151

番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
148	短頸壺	12.6	5/12	ー	ー	9.4	木箱75
149	短頸壺	15.6	4/12	ー	ー	9.4	木箱75
150	短頸壺	ー	ー	ー	ー	3.1	木箱26
151	短頸壺	15.6	4/12	ー	ー	6.8	木箱75

0　10cm

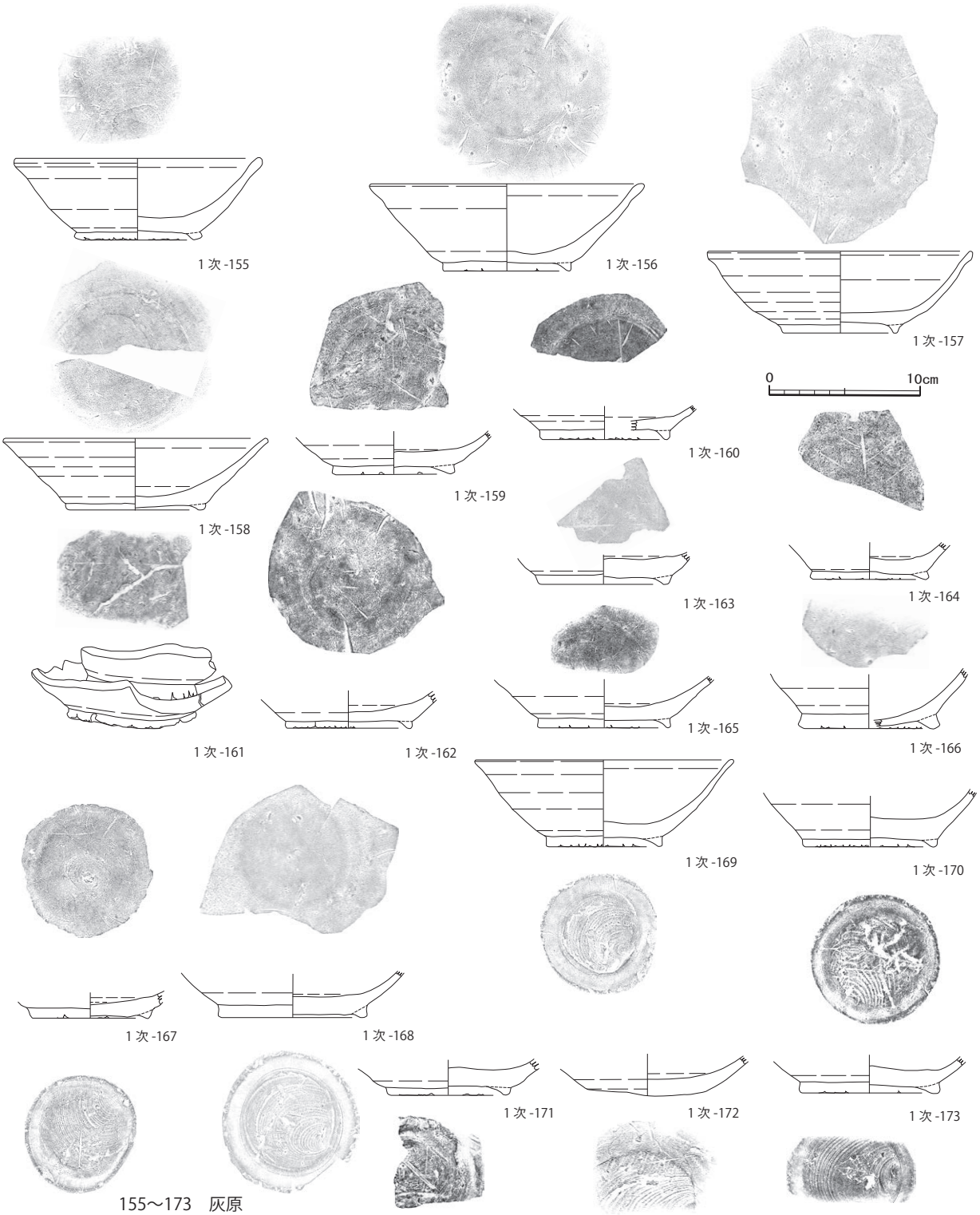
148～151

図 44　1～3 号窯灰原出土遺物実測図 9　1：4



番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
152	短頸壺	13.6	4/12	13.4	12/12	38.2	木箱
153	短頸壺	ー	ー	14.8	9/12	24.3	木箱26
154	短頸壺	県史68接合	ー	14.5	12/12	17.1	木箱

図 45　1～3 号窯灰原出土遺物実測図 10　1：4



番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
155	山茶碗(線刻)	15.6	—	7.6	—	9.4	木箱98
156	山茶碗(線刻)	17.0	—	8.2	—	5.8	紙箱　特
157	山茶碗(線刻)	17.6	—	7.4	—	5.4	木箱61
158	山茶碗(線刻)	17.2	—	8.6	—	4.8	A306
159	山茶碗(線刻)	—	—	7.6	—	2.8	A156
160	山茶碗(線刻)	—	—	8.2	—	2.2	A462
161	山茶碗(線刻)	—	—	—	—	—	A306
162	山茶碗(線刻)	—	—	8.0	—	2.5	A308
163	山茶碗(線刻)	—	—	8.1	—	2.2	木箱46
164	山茶碗(線刻)	14.4	—	—	—	3.1	A120

番号	器種	口径 cm	口径残存率	底径 cm	底径残存率	器高	箱番
165	山茶碗(線刻)	—	—	8.4	—	3.0	A241
166	山茶碗(線刻)	—	—	8.6	—	3.6	木箱89
167	山茶碗(線刻)	—	—	7.6	12/12	1.8	A243
168	山茶碗(線刻)	—	—	9.2	11/12	2.8	木箱54
169	山茶碗(線刻)	17.6	—	7.0	12/12	5.6	木箱90
170	山茶碗(線刻)	—	—	8.4	12/12	3.4	木箱67
171	山茶碗(線刻)	—	—	7.6	—	2.4	A227
172	山茶碗(線刻)	—	—	—	—	2.4	A259
173	山茶碗(圧痕)	—	—	8.8	—	2.4	A237

図 46　1次調査出土遺物実測図 11　1：4

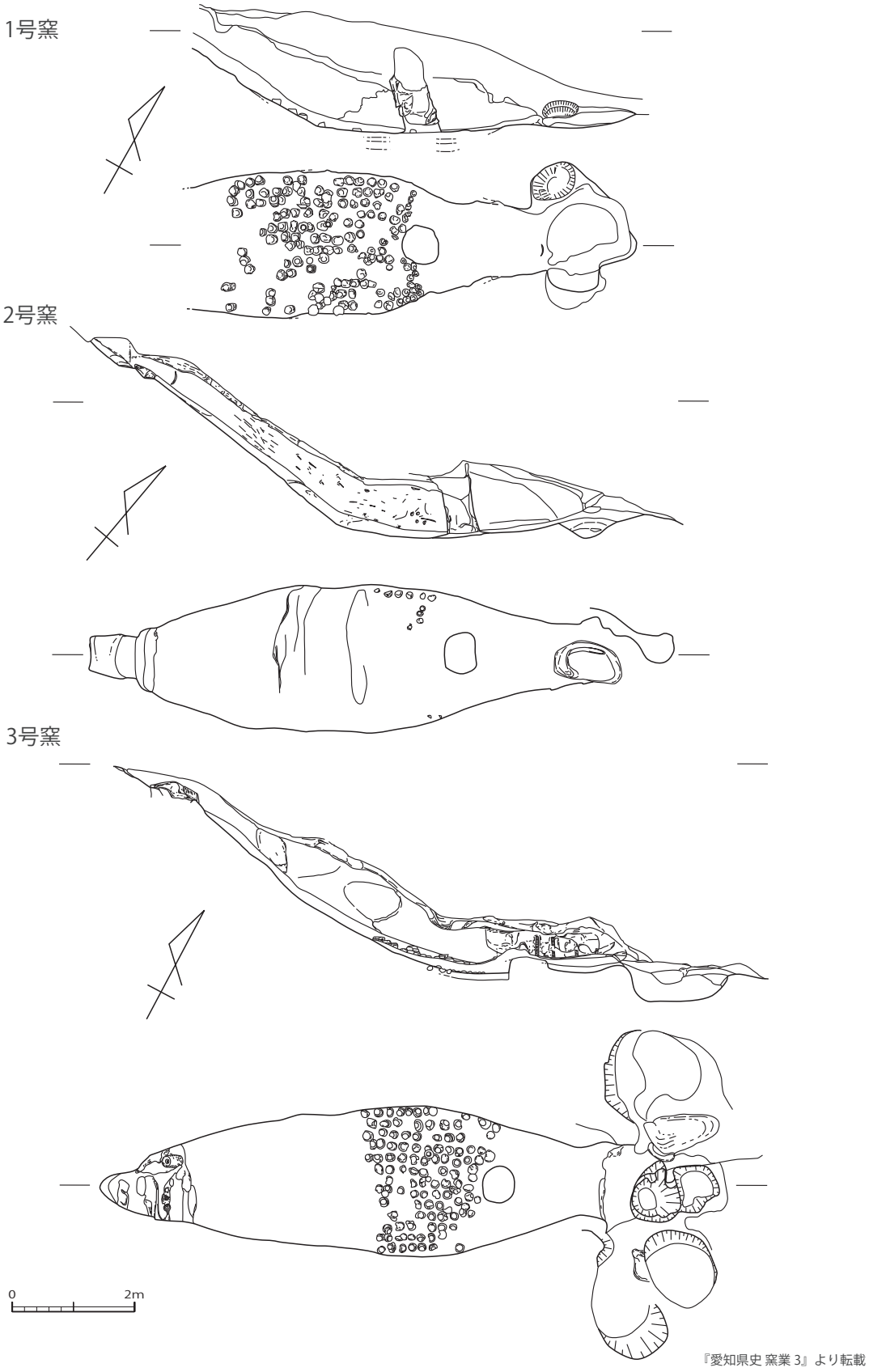


図 47　窯体測量図　1：100

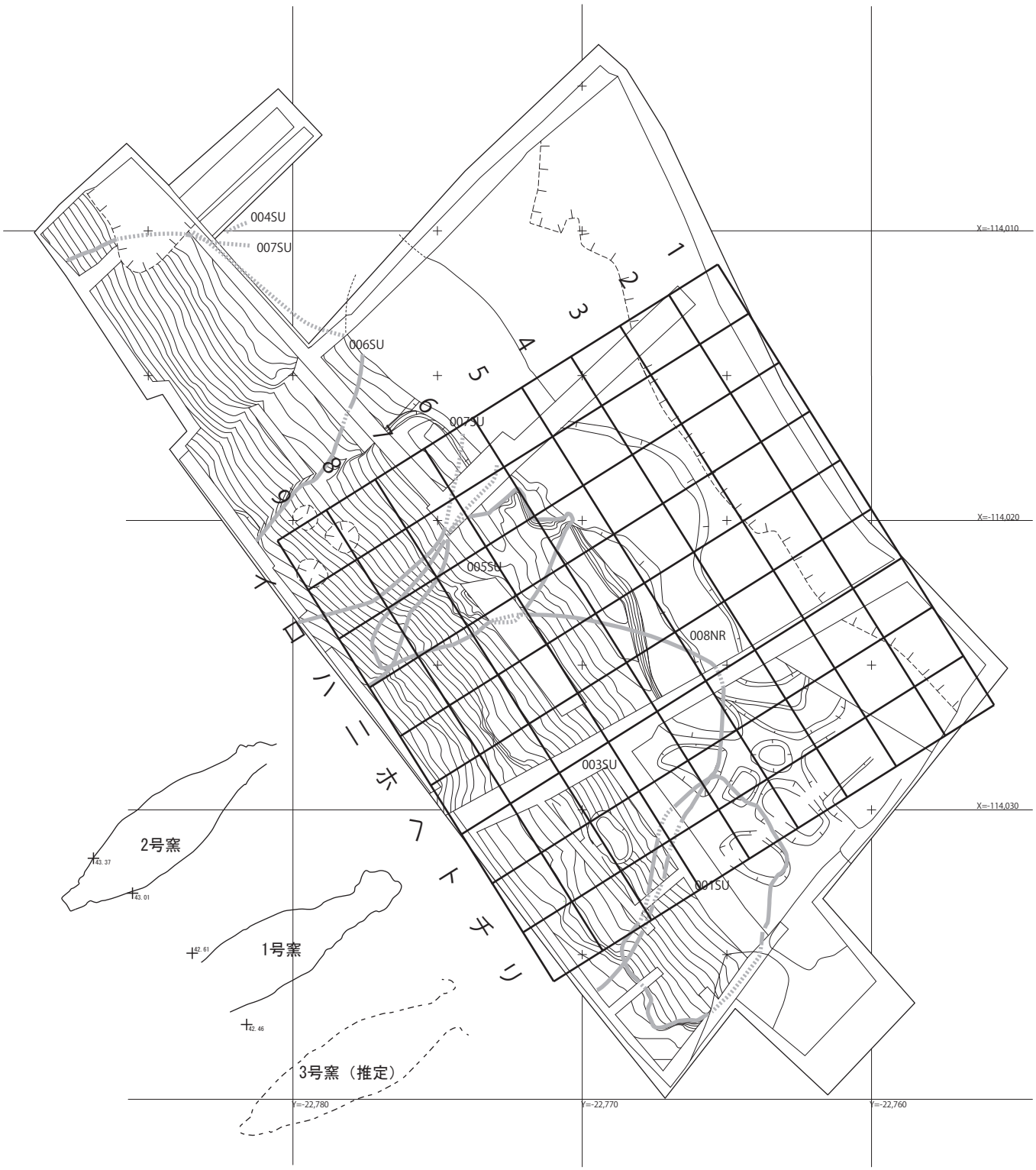


図 48　1 次調査グリッド図　1：200

表６　１次調査　１～３号窯、灰原出土遺物破片数表

1・2・3号窯・灰原								
器種	総破片数	%	部位					
			口縁部	%	底部	%	胴部	総重量ｇ
山茶碗	66,805	91.1678	33116	94.4121	20486	83.4596	13151	2599905.6
輪花　碗(指)			3	0.0086	—	—	—	
輪花　碗(ヘラ)			16	0.0455	—	—	—	
玉縁　碗(幅大.小)			32	0.0911	—	—	—	
玉縁　輪花　碗			1	0.0029	—	—	—	
小碗	5,544	7.5658	1601	4.5644	3790	15.4404	153	219968.8
小皿	575	0.7847	240	0.6842	238	0.9697	97	8355.2
中皿	1	0.0014	1	0.0029	—	—	—	50.2
片口鉢	66	0.0942	17	0.0484	8	0.0326	41	3733.7
鉢	12	0.0164	3	0.0086	2	0.0081	7	2827
短頸壺	120	0.1665	21	0.0599	15	0.0611	84	20524.5
広口壺	18	0.0205	13	0.0371	2	0.0081	3	4271.1
広口瓶	22	0.0314	—	—	3	0.0122	19	466.1
甕(常滑含む)	33	0.0450	2	0.0057	—	—	31	2995.5
壺	1	0.0014	—	—	1	0.0041	—	11
鍋(伊勢型＋土師)	68	0.0928	7	0.0200	—	—	61	866.7
蓋	4	0.0055	3	0.0086	1	0.0041	—	18
陶錘	1	0.0014	—	—	—	—	—	82
水滴	1	0.0014	—	—	—	—	—	—
窯道具(棒状含む)	2	0.0027	—	—	—	—	—	573
総計	73273	100	35076	100	24546	100	13647	2864648.4

※比率は小数点第五位を四捨五入する。

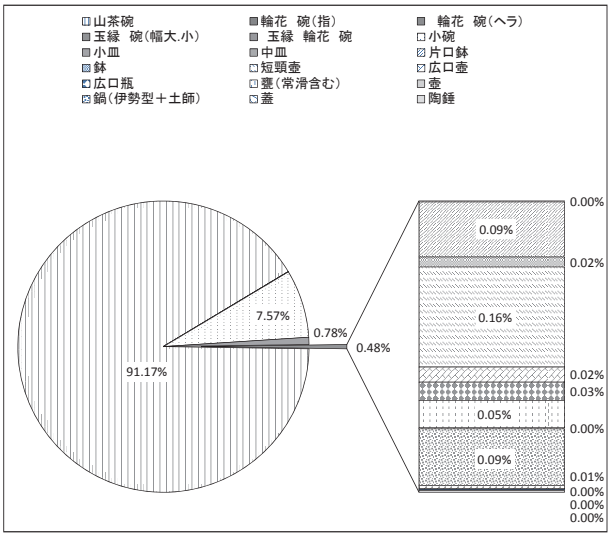


表７　１次調査　１号窯出土遺物破片数表

1号窯								
器種	総破片数	%	部位					
			口縁部	%	底部	%	胴部	総重量ｇ
山茶碗	11507	90.6134	6912	93.2290	3586	84.6354	991	117652
輪花　碗(指)			—		—	—	—	
輪花　碗(ヘラ)			11	0.1484	—	—	—	
玉縁　碗(幅大.小)			7	0.0944	—	—	—	
玉縁　輪花　碗			—		—	—	—	
小碗	1003	7.8983	437	5.8943	565	13.3349	1	29487
小皿	125	0.9843	40	0.5395	84	1.9825	1	646
中皿	—	—	—	—	—	—	—	—
片口鉢	11	0.0866	2	0.0269	2	0.0472	7	213
鉢	1	0.0079	1	0.0135	—	—	—	52
短頸壺	1	0.0079	1	0.0135	—	—	—	—
広口壺	3	0.0236	3	0.0405	—	—	—	—
広口瓶	18	0.1417	—	—	—	—	18	439
甕(常滑含む)	13	0.1024	—	—	—	—	13	635
壺	—	—	—	—	—	—	—	—
鍋(伊勢型＋土師)	17	0.1339	—	—	—	—	17	209
蓋	—	—	—	—	—	—	—	—
陶錘	—	—	—	—	—	—	—	—
水滴	—	—	—	—	—	—	—	—
窯道具(棒状含む)	—	—	—	—	—	—	—	—
総計	12699	100	7414	100	4237	100	1048	149333

※比率は小数点第五位を四捨五入する。

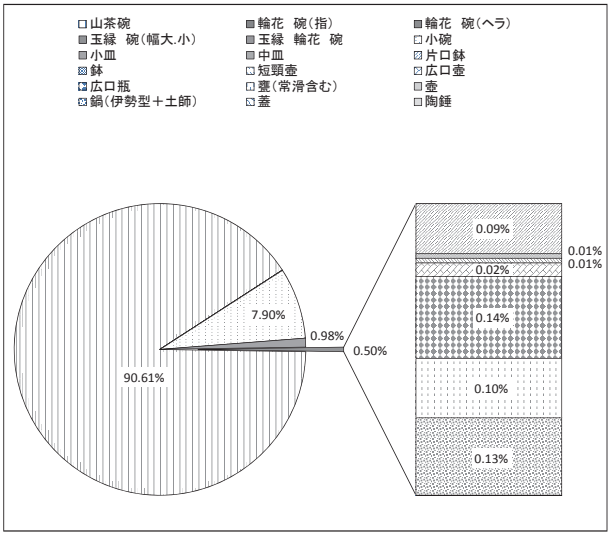


表８　１次調査　２号窯出土遺物破片数表

2号窯								
器種	総破片数	%	部位					
			口縁部	%	底部	%	胴部	総重量ｇ
山茶碗	4409	91.2458	2691	94.6535	1241	82.1854	471	189681
輪花　碗(指)			—	—	—	—	—	
輪花　碗(ヘラ)			3	0.1055	—	—	—	
玉縁　碗(幅大.小)			3	0.1055	—	—	—	
玉縁　輪花　碗			—	—	—	—	—	
小碗	323	6.6845	69	2.4271	251	16.6225	3	16218
小皿	98	2.0285	76	2.6733	18	1.1921	4	865.7
中皿	—	—	—	—	—	—	—	—
片口鉢	1	0.0206	1	0.0351	—	—	—	—
鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
短頸壺	1	0.0206	—	—	—	—	1	21
広口壺	—	—	—	—	—	—	—	—
広口瓶	—	—	—	—	—	—	—	—
甕(常滑含む)	—	—	—	—	—	—	—	—
壺	—	—	—	—	—	—	—	—
鍋(伊勢型＋土師)	—	—	—	—	—	—	—	—
蓋	—	—	—	—	—	—	—	—
陶錘	—	—	—	—	—	—	—	—
水滴	—	—	—	—	—	—	—	—
窯道具(棒状含む)	—	—	—	—	—	—	—	—
総計	4832	100	2843	100	1510	100	479	206785.7

※比率は小数点第五位を四捨五入する。

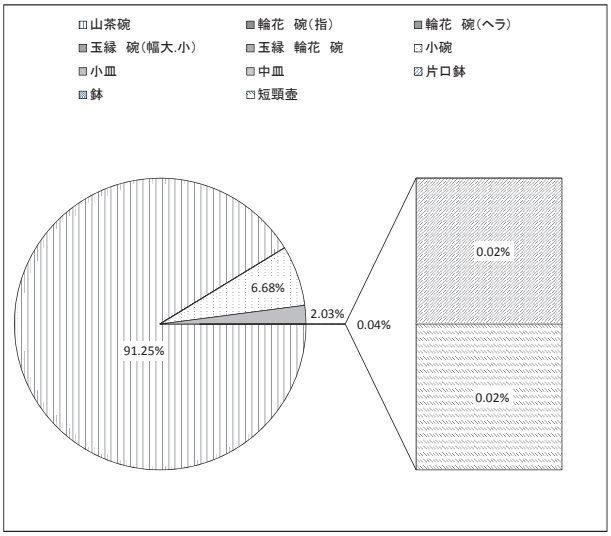


表９　１次調査　３号窯出土遺物破片数表

3号窯								
器種	総破片数	%	部位					
			口縁部	%	底部	%	胴部	総重量ｇ
山茶碗	2700	93.0714	1489	95.2655	426	76.7568	781	91904
輪花　碗(指)			—	—	—	—	—	
輪花　碗(ヘラ)			—	—	—	—	—	
玉縁　碗(幅大.小)			4	0.2559	—	—	—	
玉縁　輪花　碗			—	—	—	—	—	
小碗	189	6.5149	63	4.0307	124	22.3423	2	4647
小皿	12	0.4137	7	0.4479	5	0.9009	0	54.5
中皿	—	—	—	—	—	—	—	—
片口鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
短頸壺	—	—	—	—	—	—	—	—
広口壺	—	—	—	—	—	—	—	—
広口瓶	—	—	—	—	—	—	—	—
甕(常滑含む)	—	—	—	—	—	—	—	—
壺	—	—	—	—	—	—	—	—
鍋(伊勢型＋土師)	—	—	—	—	—	—	—	—
蓋	—	—	—	—	—	—	—	—
陶錘	—	—	—	—	—	—	—	—
水滴	—	—	—	—	—	—	—	—
窯道具(棒状含む)	—	—	—	—	—	—	—	—
総計	2901	100	1563	100	555	100	783	96605.5

※比率は小数点第五位を四捨五入する。

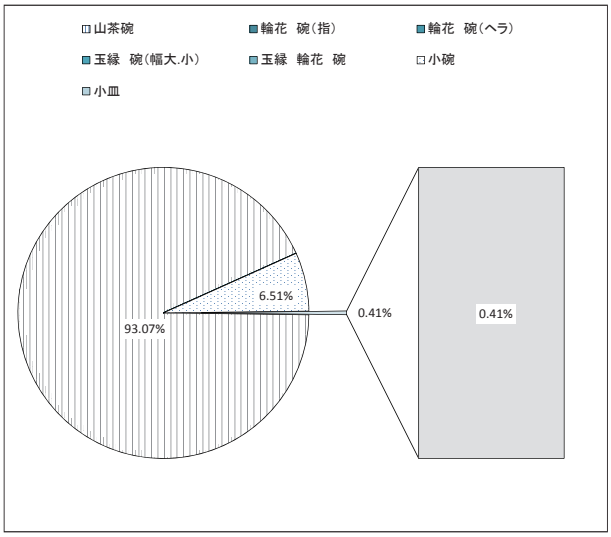


表 10　１次調査　灰原出土遺物破片数表

灰原								
器種	総破片数	%	部位					
			口縁部	%	底部	%	胴部	総重量ｇ
山茶碗	48189	91.1962	22024	94.7024	15233	83.4959	10908	2200668.6
輪花　碗(指)			3	0.0129	—	—	—	
輪花　碗(ヘラ)			2	0.0086	—	—	—	
玉縁　碗(幅大.小)			18	0.0774	—	—	—	
玉縁　輪花　碗			1	0.0043	—	—	—	
小碗	4029	7.6248	1032	4.4376	2850	15.6216	147	169616.8
小皿	340	0.6434	117	0.5031	131	0.7180	92	6789
中皿	1	0.0019	1	0.0043	—	—	—	50.2
片口鉢	54	0.1022	14	0.0602	6	0.0329	34	3520.7
鉢	11	0.0208	2	0.0086	2	0.0110	7	2775
短頸壺	118	0.2233	20	0.0860	15	0.0822	83	20503.5
広口壺	15	0.0284	10	0.0430	2	0.0110	3	4271.1
広口瓶	4	0.0076	—	—	3	0.0164	1	27.1
甕(常滑含む)	20	0.0378	2	0.0086	—	—	18	2360.5
壺	1	0.0019	—	—	1	0.0055	—	11
鍋(伊勢型＋土師)	51	0.0965	7	0.0301	—	—	44	657.7
蓋	4	0.0076	3	0.0129	1	0.0055	—	18
陶錘	1	0.0019	—	—	—	—	—	82
水滴	1	0.0019	—	—	—	—	—	
窯道具(棒状含む)	2	0.0038	—	—	—	—	—	573
総計	52841	100	23256	100	18244	100	11337	2411924.2

※比率は小数点第五位を四捨五入する。

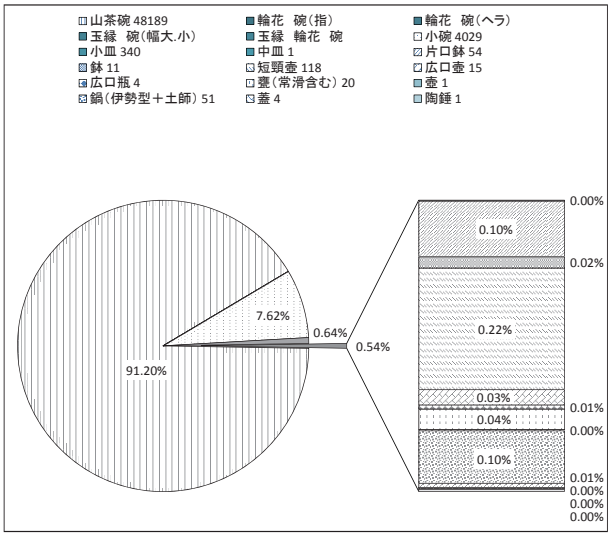


表 11　１次調査　出土遺物破片数表

器種	山茶碗66805点		小碗5544点		小皿575点		片口鉢66点		鉢12点		短頸壺120点		広口壺瓶40点	
部位	口縁	底部	口縁	底部	口縁	底部	口縁	底部	口縁	底部	口縁	底部	口縁	底部
点数	33116	20486	1601	3790	240	238	17	8	3	2	21	—	13	4
1号窯	656.8	1074	79.4	335	5.5	8.2	0.2	0.2	0.1	—	0.1	—	0.3	—
2号窯	276.2	520.8	54.4	186	9.5	12.8	0.1	—	—	—	—	—	—	—
3号窯	164.3	204	34.3	89.1	1.1	5	—	—	—	—	—	—	—	—
灰原	2322.8	6328	425.6	1986	24.7	67	1.3	0.8	—	2	2	3.5	0.9	2.2
個体数	3420.1	8127	593.7	2597	40.8	93	1.6	1	0.1	2	2.1	3.5	1.2	2.2

表 12　２次調査　出土遺物破片数表

第2次調査								
器種	総破片数	%	部位					
			口縁部	%	底部	%	胴部	総重量 g
山茶碗	56189	93.3279	28594	93.6556	8938	84.6642	18641	1129613
輪花　碗(指)			3	0.0098	—	—	—	
輪花　碗(ヘラ)			1	0.0033	—	—	—	
玉縁　碗(幅大.小)			11	0.0360	—	—	—	
玉縁　輪花　碗			1	0.0033	—	—	—	
小碗	3741	6.2137	1894	6.1937	1550	14.6822	300	78325.9
小皿	70	0.1163	8	0.0262	61	0.5778	1	2187
中皿	—	—	—	—	—	—	—	
片口鉢	16	0.0266	5	0.0163	4	0.0379	7	837.3
鉢	4	0.0066	1	0.0033	—	—	3	32.1
短頸壺	125	0.2076	4	0.0131	—	—	121	9772.3
広口壺	18	0.0299	6	0.0198	3	0.0284	9	616.5
広口瓶	—	—	—	—	—	—	—	—
甕(常滑含む)	15	0.0249	1	0.0033	1	0.0095	13	451.2
壺	2	0.0033	—	—	—	—	2	41
鍋(伊勢型＋土師)	25	0.0415	5	0.0163	—	—	20	314
蓋	—	—	—	—	—	—	—	—
陶錘	—	—	—	—	—	—	—	—
水滴	—	—	—	—	—	—	—	—
窯道具(棒状含む)	1	0.0017	—	—	—	—	—	372.2
総計	60206	100	30534	100	10557	100	19117	1222562.5

※比率は小数点第五位を四捨五入する。

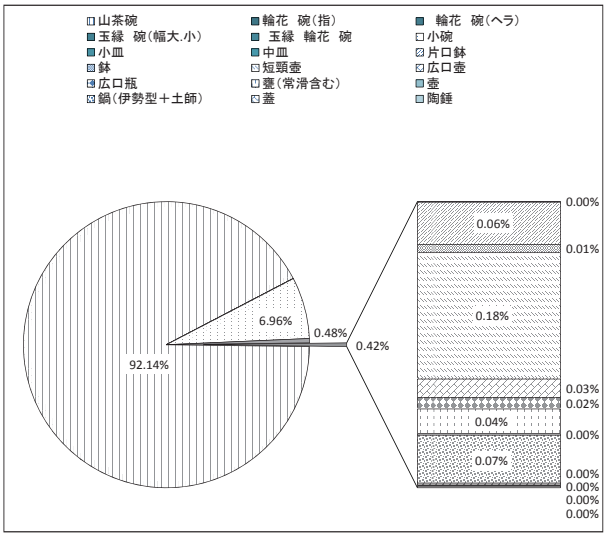


表 13　出土遺物総破片数表

1次調査・2次調査　合計)								
器種	総破片数	%	部位					
			口縁部	%	底部	%	胴部	総重量 g
山茶碗	122994	92.1448	61710	94.0558	29424	83.8219	31792	3729518.6
輪花　碗(指)			6	0.0091	—	—	—	
輪花　碗(ヘラ)			17	0.0259	—	—	—	
玉縁　碗(幅大.小)			43	0.0655	—	—	—	
玉縁　輪花　碗			2	0.0030	—	—	—	
小碗	9285	6.9562	3495	5.3269	5340	15.2124	453	298294.7
小皿	645	0.4832	248	0.3780	299	0.8518	98	10542.2
中皿	1	0.0007	1	0.0015	—	—	—	50.2
片口鉢	82	0.0614	22	0.0335	12	0.0342	48	4571
鉢	16	0.0120	4	0.0061	2	0.0057	10	2859.1
短頸壺	245	0.1835	25	0.0381	15	0.0427	205	30296.8
広口壺	36	0.0270	19	0.0290	5	0.0142	12	4887.6
広口瓶	22	0.0165	—	—	3	0.0085	19	466.1
甕(常滑含む)	48	0.0360	3	0.0046	1	0.0028	44	3446.7
壺	3	0.0022	—	—	1	0.0028	2	52
鍋(伊勢型＋土師)	93	0.0697	12	0.0183	—	—	81	1180.7
蓋	4	0.0030	3	0.0046	1	0.0028	0	18
陶錘	1	0.0007	—	—	—	—	—	82
水滴	1	0.0007	—	—	—	—	—	—
窯道具(棒状含む)	3	0.0022	—	—	—	—	—	945.2
総計	133479	100	65610	100	35103	100	32764	4087210.9

※比率は小数点第五位を四捨五入する。

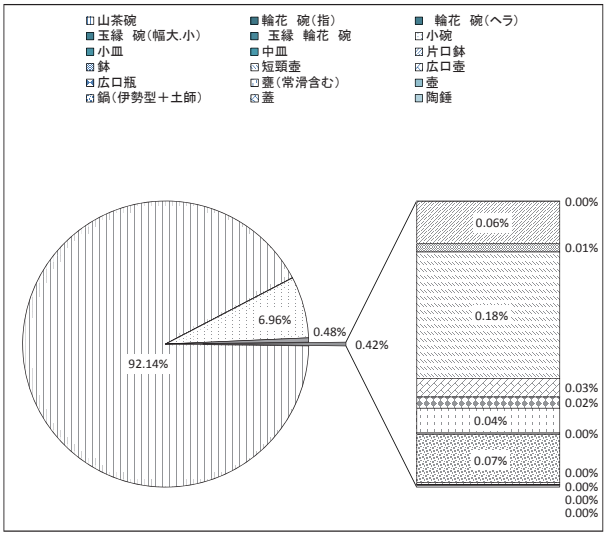


表 14　２次調査　山茶碗・小碗・小皿個体数

器種	山茶碗　総破片数 56189点		小碗　総破片数 3741点		小皿　総破片数 70点	
部位 （点数）	口縁 28594点	底部 8938点	口縁 1894点	底部 1550点	口縁 8点	底部 61点
総個体数	2536	2629.3	282.2	794	10.3	32.1

表 15　１次調査・２次調査　合計山茶碗・小碗・小皿個体数

器種	山茶碗　総破片数 122994点		小碗　総破片数 9285点		小皿　総破片数 645点	
部位 （点数）	口縁 61710点	底部 29424点	口縁 3465点	底部 5340点	口縁 248点	底部 299点
総個体数	5956.1	10756.6	875.9	3390.8	51.1	125.1

図版　1　調査区遠景など

調査区遠景

調査前風景

図版　2　遺　構

調査区全景

004SU 出土状態

006SU 出土状態

003SU 出土状態

灰層堆積状況

図版　3　出土遺物 1

1a

2a

5a

1b

2b

5b

1c

2c

5c

35a

41a

45a

35b

41b

45b

35c

41c

45c

図版　4　出土遺物２

51a

72a

82a

51b

72b

82b

51c

72c

82c

173a

175a

207a

173b

175b

207b

173c

175c

207c

図版　5　出土遺物３

308

309

311

312

313

316

318

322

図版　6　出土遺物４

330

336

338

341

344

352

358

359

図版　7　出土遺物５

380

381

382

385

386

387

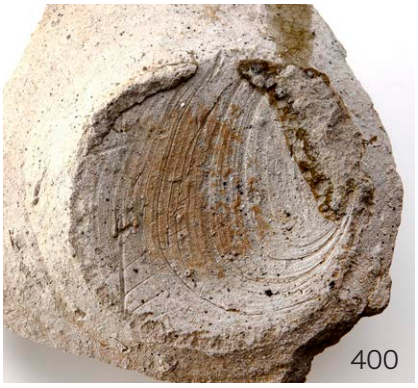
388

391

396

398

399


400

401

402

404

図版　8　1次調査出土遺物

60

61

67

68

100a

100b

127a

127b

127c

136・138a

136・138b

147

150

153a

153b

報告書抄録

ふりがな	はちまきこようぐん
書　　名	八巻古窯群
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第202集
編著者名	池本正明 小澤一弘 鈴木恵介 株式会社パレオ・ラボ
編集機関	公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　TEL0567(67)4161
発行年月日	西暦 2016年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
はちまきこようぐん 八巻古窯群	あいちけん ちたぐん 愛知県知多郡 ひがしうらちょうおがわ 東浦町緒川	23442	470011	34度 58分 80秒	136度 55分 3秒	2010.5 2011.04～ 2011.07	50 770	道路改良 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八巻古窯群	窯跡	平安時代末 ～ 鎌倉時代	灰原	中世陶器	
		江戸時代	流路	近世陶磁器	

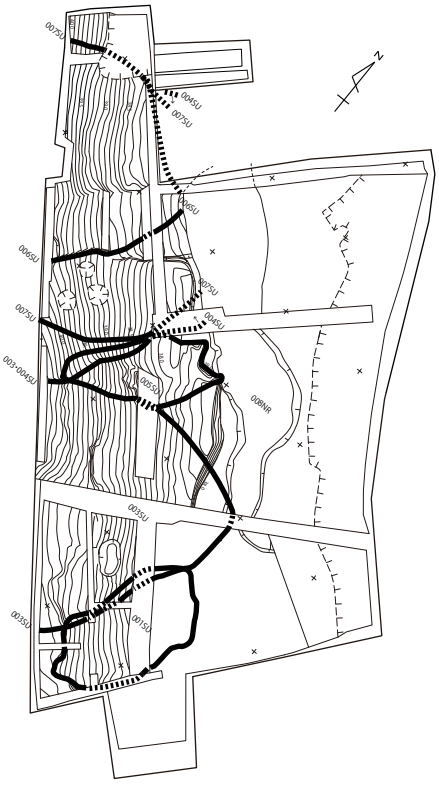
文書番号	発掘届出(21埋セ6 21.4.3・22埋セ131 22.3.10)　通知(21教生158 21.4.17・22教生2616 22.3.23) 終了届・保管証・発見届(21埋セ29 21.5.28・22埋セ128 22.7.27) 鑑定結果通知(21教生604 21.6.18・22教生2087 22.12.24)
要約	八巻古窯群は昭和36(1961)年に愛知県教育委員会によって調査され、窯体3基が確認されている。今回の調査は窯体下方の斜面部に該当するが、従来より知られている窯体に伴う灰原の末端が検出できた。

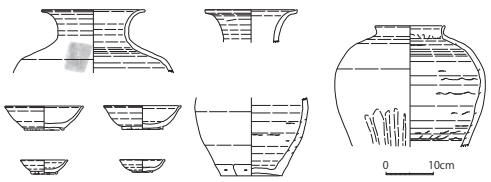
概　要

八巻古窯群は、知多郡東浦町緒川八巻に位置する。地形的には丘陵地帯を開析する小規模な支谷の南西側緩斜面に位置している。

今回の調査は八巻古窯群としては二度目となっている。１次調査は昭和 36（1961）年に実施され、窯体３基が検出されている。今回の調査区は１次調査の調査区北東部に該当し、１次調査で確認された窯体に伴う灰層を検出した。

出土遺物は大半が八巻古窯群の製品とその窯道具である。前者の器種には碗・小碗・皿・壺・瓶などが見られ、灰釉系陶器（山茶碗）窯としては比較的多器種に及ぶ。





愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第202集

八巻古窯群

2016年３月31日

発行　公益財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷　サンメッセ株式会社